

# 平城貝塚

愛媛県南宇和郡御荘町平城貝塚  
第Ⅳ次発掘調査報告書

1982

御荘町教育委員会

# 序 文

御荘町平城商店街の、ほぼ中央にある四国銀行御荘支店仮店舗跡地の民有地を銀行が借り受け駐車場として整備されるにあたり、ここに所在する埋蔵文化財の緊急発掘調査を実施いたしました。

この一帯は、古くより平城貝塚として知られ、戦前・戦後を通じ数次の調査や報告がなされております。本貝塚の特殊性として、この埋蔵文化財包蔵地の上に、民家や商店が密集して建てられ、戦後第1次（昭和29年）から第3次の発掘調査も改築工事と併行的に実施されたもので、今回もその例にもれません。

第4次発掘調査では、でき得る限り層位的に把握し正確に記録を残すことに努めました。その結果、従来検出をみなかった遺構や、ほぼ完形に近い少女期の古人骨発掘など多くの成果を挙げることができました。しかし調査期間その他の制約もあり、皆様の御期待に十分添うことができない点もあるかと思いますが、縄文後期文化解明のため御活用いただければ幸に存じます。

調査に際しまして、秋日厳しい中を、終始学究的情熱を傾け全面的に指導協力をいただきました日本考古学協会木村剛朗先生、また愛媛県文化振興局教育専門員阪本安光先生、松山市立内宮中学校草地性自先生、直接・間接に御協力いただきました県内考古学関係の諸先生や関係各位に対しまして、ここに深く御礼申し上げます。

なお人骨についての資料や、復原及び科学的処理につきましては、徳島大学医学部山田正興教授並びに高知医科大学山本恵三教授など両大学関係スタッフの方々に大変御世話になり貴重な資料として保存活用できますことを厚く感謝申し上げます。

自然遺物については、東京国立博物館古生物第3研究室長上野輝彌先生外、御多忙の中を御指導助言を賜り重ねて御礼申し上げます。

過去から現在へ、現在から未来へと歴史は間断なく続いていきます。私たちが生きている現代もいずれ過去になり、ひとつの歴史が残ります。私達は、このふるさとを愛し、先人が残してくれた遺産を、次代に伝えるとともに、文化の再創造に努めることを忘れてはなりません。

過去との対話を通じながら現在をみつめ、新しい時代へ向うための第一歩とするためにも、今後とも一層の御協力をおねがい申し上げます。

昭和57年7月30日

御荘町教育委員会教育長 中平留義

# 例 言

1. 本書は、愛媛県南宇和郡御荘町教育委員会が昭和56年度に実施した同町上町に所在する平城貝塚の第Ⅳ次発掘調査報告書である。
2. 平城貝塚の第Ⅳ次発掘調査は、四国銀行御荘支店仮店舗跡地を同店が駐車場とするのに先だつての緊急発掘調査である。
3. 本書の執筆は、第6章人骨の所見を徳島大学医学部山田正興教授・高知医科大学山本恵三教授両氏にお願いし、他は木村剛朗が担当した。
4. 自然遺物の鑑定については、東京国立博物館(古生物)第3研究室、上野輝彌室長にお願いした。しかし最終的研究結果は本報告作製に間に合わなかったためその一部を記載するにとどめた。
5. 本書の作成にあたっては岡本健児(高知女子大)教授に指導助言を得、編集は木村剛朗・辻内功・草地牲自があたった。なお本報告書は、第Ⅳ次調査の報告であり、Ⅱ～Ⅲ次の報告書は未刊である。したがって、第Ⅳ次調査において判明した事実によって、訂正あるいは補足したものにとどめる。
6. 発掘に際して、記録は木村剛朗が、写真は本多保博・楠木憲一が、遺物の整理は木村剛朗が、測量は株式会社南予設計事務所が分担をした。なお期間中、阪本安光(愛媛県教育委員会文化振興局)、草地牲自(松山市立内宮中学校)両氏の現地指導を受けた。
7. 本調査に当っては、西田栄(愛媛県文化財保護審議委員)、長井数秋(愛媛県立松山工業高校)、大山正風(松山市立内宮中学校)、犬飼徹夫(宇和島市立天神小学校)、森光晴(松山市立勝山中学校)氏等の積極的な助力があった。
8. その他、本遺跡についての見学会を昭和56年10月3日、4日の二日間、文化講座1回(60名)を実施した。

# 目 次

|               |    |
|---------------|----|
| 序 文<br>例 言    |    |
| 第1章 序説        | 1  |
| 第2章 位置と環境     | 2  |
| 第3章 遺跡及び調査の経過 | 7  |
| 第4章 層位と遺構     | 16 |
| 第1節 層位        | 17 |
| 第2節 遺構        | 20 |
| I 集石遺構        | 20 |
| II 配石遺構       | 21 |
| III 竪穴住居址     | 22 |
| IV 貯蔵穴        | 25 |
| V 土壙墓と人骨出土状態  | 25 |
| 第5章 出土遺物      | 32 |
| 第1節 人工遺物      | 32 |
| I 土器          | 32 |
| II 石器         | 50 |
| III 骨角器       | 57 |
| 第2節 自然遺物      | 57 |
| 第6章 人骨の所見     | 60 |
| 第7章 考察        | 64 |
| あとがき          | 76 |

## 挿 図 目 次

|         |  |    |
|---------|--|----|
| Fig. 1  | 平城貝塚の位置と周辺の遺跡分布図                         | 3  |
| Fig. 2  | 貝塚の分布範囲と第Ⅳ次調査位置図                         | 4  |
| Fig. 3  | 四国銀行御荘支店仮店舗跡地                            | 7  |
| Fig. 4  | 発掘調査風景                                   | 8  |
| Fig. 5  | 調査区グリッド配置平面図                             | 8  |
| Fig. 6  | 第1号人骨出土状態                                | 9  |
| Fig. 7  | 第2号人骨出土状態                                | 9  |
| Fig. 8  | E-4区平城式第2群土器深鉢出土状態                       | 10 |
| Fig. 9  | D-4区及びE-4区に出土の配石遺構状態                     | 10 |
| Fig. 10 | D-4区に出土の貯蔵穴遺構                            | 10 |
| Fig. 11 | 貯蔵穴床面に出土の平城式第2群土器片出土状態                   | 11 |
| Fig. 12 | E-4区に出土の魚骨出土状態                           | 11 |
| Fig. 13 | C-0及びC-1区の竪穴住居址                          | 11 |
| Fig. 14 | A-3区第1号人骨墓壇                              | 12 |
| Fig. 15 | B-2区柱穴と遺物出土状態                            | 12 |
| Fig. 16 | B-4区及びC-4区に出土の集石遺構                       | 12 |
| Fig. 17 | C-4・B-4・C-5・B-5区にまたがる竪穴住居址               | 13 |
| Fig. 18 | 第3号人骨上半身の上部を被う礫石出土状態                     | 13 |
| Fig. 19 | 第3号人骨の全身出土状態                             | 14 |
| Fig. 20 | 第3号人骨に密着のスクレイパー、平城式第4群土器出土状態             | 14 |
| Fig. 21 | 第3号人骨墓壇                                  | 15 |
| Fig. 22 | 第2号人骨墓壇                                  | 15 |
| Fig. 23 | 調査終了風景                                   | 15 |
| Fig. 24 | C-0及びD-0区北壁、B-3及びC-3区南壁、D-4及びE-4区北壁地層断面図 | 16 |
| Fig. 25 | C-0区～C-3区西壁、D-4区～D-8区東壁地層断面図と、遺物の層位的出土状態 | 18 |
| Fig. 26 | B-4区及びC-4区集石遺構実測図                        | 21 |
| Fig. 27 | E-4区及びD-4区に出土の配石遺構実測図                    | 21 |
| Fig. 28 | 竪穴住居址と集石遺構平面図                            | 23 |
| Fig. 29 | B-2・B-3・C-3区柱穴とB-2区に出土の遺物出土状態            | 24 |
| Fig. 30 | D-4区に出土の貯蔵穴実測図                           | 25 |
| Fig. 31 | 第1号人骨とその土壇墓及び墓壇内遺物出土状態                   | 26 |

|         |                                     |    |
|---------|-------------------------------------|----|
| Fig. 32 | 第2号人骨とその土壇墓及び墓壇内遺物出土状態              | 27 |
| Fig. 33 | 第3号人骨とその上部を被う遺物及び礫石出土状態             | 29 |
| Fig. 34 | 第3号人骨とその土壇墓実測図                      | 31 |
| Fig. 35 | 押型文土器拓影                             | 33 |
| Fig. 36 | 轟B式・船元式・宿毛式・平城式第1群土器拓影              | 35 |
| Fig. 37 | 平城式第2群a類土器拓影                        | 37 |
| Fig. 38 | 平城式第2群a・b類土器拓影                      | 38 |
| Fig. 39 | 平城式第2群a類土器深鉢実測図                     | 39 |
| Fig. 40 | 平城式第2群a類土器深鉢実測図                     | 41 |
| Fig. 41 | 平城式第2群土器a類浅鉢、b類深鉢実測図                | 42 |
| Fig. 42 | 平城式第2群b類、第3群土器拓影                    | 43 |
| Fig. 43 | 平城式第4群、第5群土器拓影                      | 45 |
| Fig. 44 | 平城式第5群土器拓影及び底部、円盤状土器片実測図            | 46 |
| Fig. 45 | 片粕式・広瀬上層式・伊吹町式土器拓影                  | 47 |
| Fig. 46 | 伊吹町式・黒土BⅡ式・拝鷹山式・石丸式・土師質土器・常滑陶器拓影実測図 | 49 |
| Fig. 47 | 打製石斧・円盤状石器・石核・石錘実測図                 | 51 |
| Fig. 48 | 叩石実測図                               | 52 |
| Fig. 49 | 石鏃・スクレイパー・骨角器及び第3号人骨頭蓋直下の自然礫実測図     | 54 |
| Fig. 50 | 石皿実測図                               | 55 |
| Fig. 51 | 平城式頸部文様変遷図                          | 69 |
| Fig. 52 | 平城式第2群鉢形土器（第Ⅲ次発掘資料）                 | 70 |

## 付 表 目 次

|     |                                |    |
|-----|--------------------------------|----|
| 第1表 | 平城貝塚周辺の主要縄文遺跡一覧                | 5  |
| 第2表 | D-4～D-5区、C-1～C-3区に出土の土器類とそのレベル | 19 |
| 第3表 | 出土石器一覧                         | 56 |
| 第4表 | D-0区貝層サンプル（貝殻比）                | 58 |
| 第5表 | C-0区貝層サンプル（貝殻比）                | 58 |
| 第6表 | 第1号人骨・第3号人骨                    | 63 |
| 第7表 | 頭骨計測値および指数（第3号人骨）              | 63 |
| 第8表 | 平城貝塚第Ⅳ次縄文土器編年位置                | 73 |

## 図版目次

|        |   |       |
|--------|---|-------|
| PL. 1  | 平城貝塚の全景                                   | 79    |
| PL. 2  | D-0~C-0区北側の壁面                             | 80・81 |
| PL. 3  | C-0~C-2区西側の壁面                             | 81    |
| PL. 4  | 第1号人骨                                     | 82    |
| PL. 5  | 第2号人骨                                     | 83    |
| PL. 6  | 第3号人骨発掘時の配列状態                             | 84    |
| PL. 7  | 第3号人骨取骨後補修復元後                             | 85    |
| PL. 8  | 第3号人骨頭骨                                   | 86    |
| PL. 9  | 第3号人骨頭骨上面観                                | 86    |
| PL. 10 | 第3号人骨頭骨側面観                                | 86    |
| PL. 11 | 第3号人骨下顎骨上面観                               | 87    |
| PL. 12 | 第3号人骨の復元された骨盤, 前面観                        | 87    |
| PL. 13 | 轟B式, 船元式, 宿毛式, 平城式第1群土器                   | 88    |
| PL. 14 | 平城式第2群土器a類                                | 88    |
| PL. 15 | 平城式第2群土器a類                                | 89    |
| PL. 16 | 平城式第2群土器a類                                | 89    |
| PL. 17 | 平城式第2群a・b類                                | 90    |
| PL. 18 | 平城式第2群土器b類                                | 90    |
| PL. 19 | 平城式第3群~4群土器                               | 91    |
| PL. 20 | 平城式第5群土器                                  | 91    |
| PL. 21 | 平城式底部                                     | 92    |
| PL. 22 | 片粕式, 伊吹町式, 黒土BⅡ式, 拝鷹山式, 土師質坏・小皿, 常滑甕      | 92    |
| PL. 23 | 打製石斧, 円盤状石器, 石錘                           | 93    |
| PL. 24 | 叩石, 石核                                    | 93    |
| PL. 25 | 石皿  | 94    |
| PL. 26 | 石鏃, 骨角器, 黒曜石剥片・スクレイパー, 円盤状土器片, 第3号人骨頭蓋直下礫 | 94    |
| PL. 27 | 貝類  | 95    |
| PL. 28 | 鹿角  | 95    |
| PL. 29 | 哺乳類                                       | 96    |
| PL. 30 | 魚類, 海棲哺乳類, 爬虫類                            | 96    |
| PL. 31 | 植物(カシ類)炭化種子                               | 97    |

## 第1章 序説

西日本における縄文文化で、その隆盛をみるのが後期縄文文化といっても過言ではない。器面を流れるような柔和な曲線で描き、その区画内を磨消縄文手法で変化をつけた華麗な文様構成には、当時の生活の豊かさとゆとりさえ感じられる。その盛行の背景には漁撈が生業の中に大きなウエイトをもっていたからにはほかならない。

四国を代表する高知県宿毛貝塚、愛媛県平城貝塚のごときは、その文化波の中で発展した典型的な後期縄文貝塚遺跡である。二つの貝塚は、共に豊後水道を西に望む四国の西南部に位置し、九州姫島産黒曜石分布圏の中に包括される。この様な環境のなかでの後期中葉平城貝塚は、その文化を豊後水道にもつ、いわゆる『豊後水道後期縄文文化圏』の範ちゅうにあって、その様相からは、中核的位置づけが可能である。

かつて平城貝塚は、3度にわたり発掘調査がなされている。第Ⅰ次が昭和29年(Fig. 2, A地点)で、縄文土器を中心としたその全容が鎌木義昌・西田栄によって(「伊予平城貝塚—縄文土器を中心として—」愛媛県御荘町教育委員会)と題して昭和32年に公表がなされている。第Ⅱ次(Fig. 2, B地点)は遺憾ながらその記録がない。第Ⅲ次は(Fig. 2, C地点)調査にたずさわった草地牲自によって(「平城貝塚第Ⅲ次発掘調査概報」愛媛の文化第13号所収)となって昭和48年に著わされている。

これらの調査は、平城貝塚が御荘町商店街の中心に位置していることから、総てが店舗の改築工事に併合し行なわれたものであって不十分なままに終わっている。これは、当時であってはいたしかたないことであろう。それにしても特殊な条件のもとでの調査で著わされた内容には高く評価されるものがある。特に第Ⅰ次の子細な土器観察とその特徴を把握しての土器分類は、それに価するし、第Ⅲ次では攪乱層であったとはいえ、採集された縄文土器には目をみはるものがある。また最近では(Fig. 2, D地点)で片粕式をほぼ単純に出土し犬飼徹夫によってその論考(「平城上層式土器について」古代文化No. 231所収)が昭和55年になされるなど、平城貝塚にみる文化の深さをまざまざとみせつけている。

先輩、諸先生の残された実績については層位的に把握されたものではなく、その内容についてはいろいろと評価のわかれるところであろうが、しかし、これぬきにしては平城貝塚の今日的な位置づけも確立し得なかつたであろうことも忘れてはならない。とはいえ、それらは平城貝塚の全てを把握するものではなく、けっして満足はいくものではない。われわれは発掘調査のされる機会を待って、その不足分を一つでも補うべき努力と責務を痛感していたものである。

## 第2章 位置と環境

平城貝塚は愛媛県の最南端、南宇和郡御荘町平城上町に所在し、その推定範囲は、東西60m、南北90mである (Fig. 1, Fig. 2)。発見は明治24年 (1891) 土佐の郷土史家寺石正路によってなされたものである。

当初は、このあたり一帯が、わずかな人家を残して真白に貝殻を敷きつめた畑地であったと記録されているが、土地の古老の話によると、その状態は昭和初年頃まであまり変わらなかったときく。現在は、それも貝塚の上を高知～松山間をむすぶ県道 (旧国道56号線) が通り、その両側は商店が密集する御荘町の中心街と化している。それでも奥まった人家の庭先、路地裏では、今日でも貝殻の散布地が残り、当初の古態をかいま見ることができる。

本貝塚は、このあたりの主峰、観音岳 (標高782m) が南部の御荘湾へと複雑な地形をなして裾を広げるその先端部に、舌状台地をなし南面して延びる洪積段丘上に立地する。この段丘は、東側から緩やかに上がって頂部でわずかな水平面を保ち、さらに南西方向に下る。いわゆる中央部で一段と高く盛り上がりを見せる地形をなすが、ちょうど貝塚の形成は、頂部の平坦面から南西方向の緩斜面にそれをみる。貝層の厚さは、頂部で薄く傾斜面で厚いことが過去の調査で明らかである。なお、本貝塚の南方前面には、観音岳の東斜面に源流をもつ僧都川が近接して流れ、その清流を御荘湾へと注いでいる。僧都川は延長距離16kmの中級河川で、この河川には、観音岳南斜面に源を発する和口川が水量をたたえて貝塚のある舌状台地の東側を流れ合流している。したがって本貝塚は、東と南が河川に囲まれた格好となっている。また西方には、細長く入り込んだ遠浅の御荘湾がすぐ足元にまでせまり生活環境の勝れた条件下にある。段丘面の最も高い個所で標高8.35m、少し下った貝層の厚い斜面では7.21mを測る。

平城貝塚が僧都川河口近くの右岸に開けた洪積段丘上に立地することについては既述のとおりであるが、この流域には、従来、平城貝塚の外、良好な後期縄文遺跡の分布は知られていない。ただ中流域においては、先土器時代とおぼしき石器や、姫島産黒曜石を伴う前期縄文遺物を出土する梶郷駄場遺跡が最近に知られたくらいである。大体において、このあたりは、山岳部で遺跡も希薄で、御荘湾岸、あるいはそれを望む周辺部に集中しているようである。節崎・八幡野・長崎・貝塚・深泥・馬瀬などは、総てが後者の環境下に立地する縄文遺跡であるが、大方が後期に属し、どれも遺物包含地で規模は小さい。その中でも深泥に限っては早期から前・中・後期にまたがる遺物を出土する最も良好な遺跡で、特に姫島産黒曜石の出土では四国屈指の遺跡に数えられる。平城貝塚とは直線で1700mの近距離に位置している。沖積平野の発達弱いことから、弥生時代は法華寺に良好な遺物 (前期前葉) を出土する他は、どこも貧弱で小規模遺跡 (後期) にとどまり、古墳時代は皆無である。

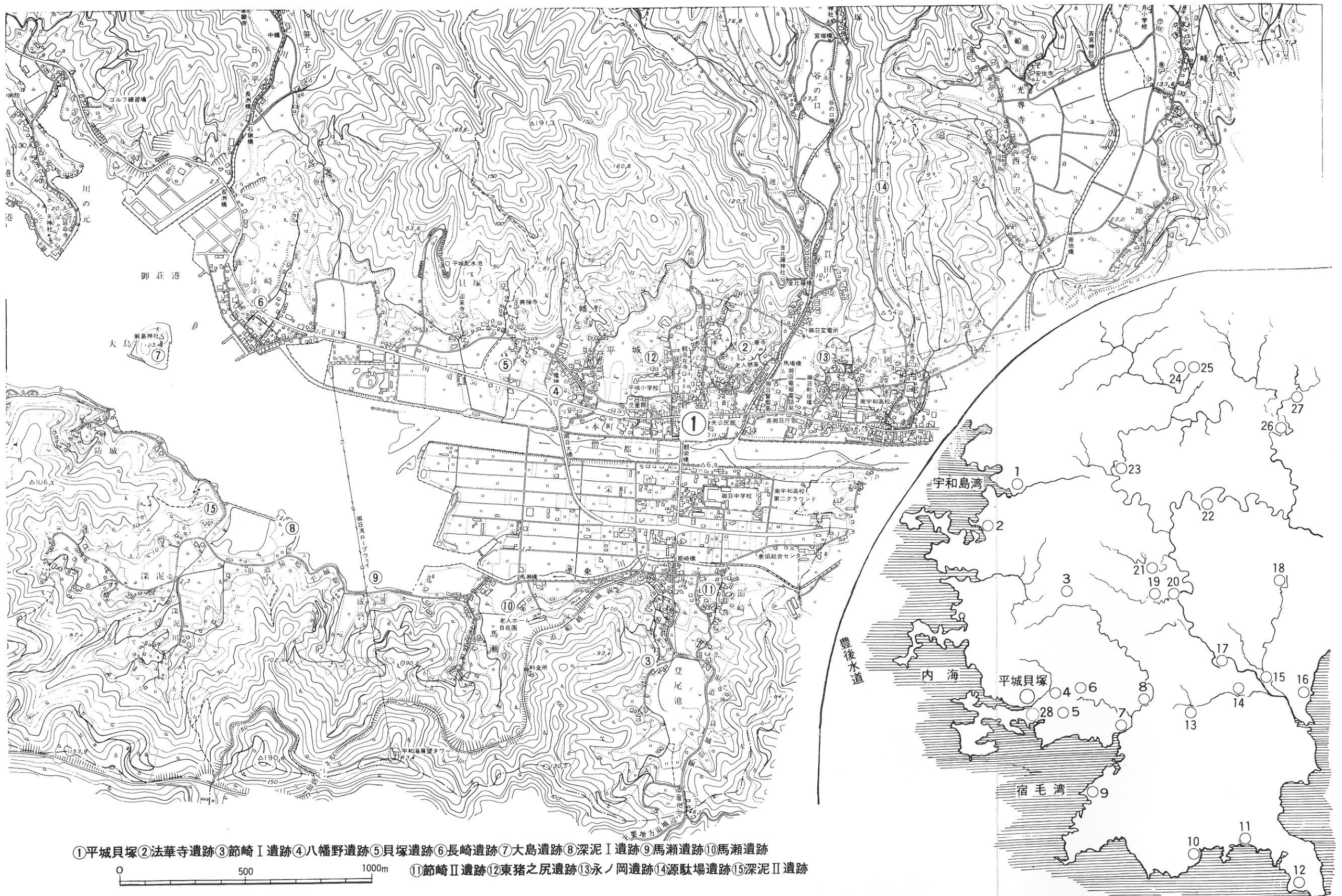
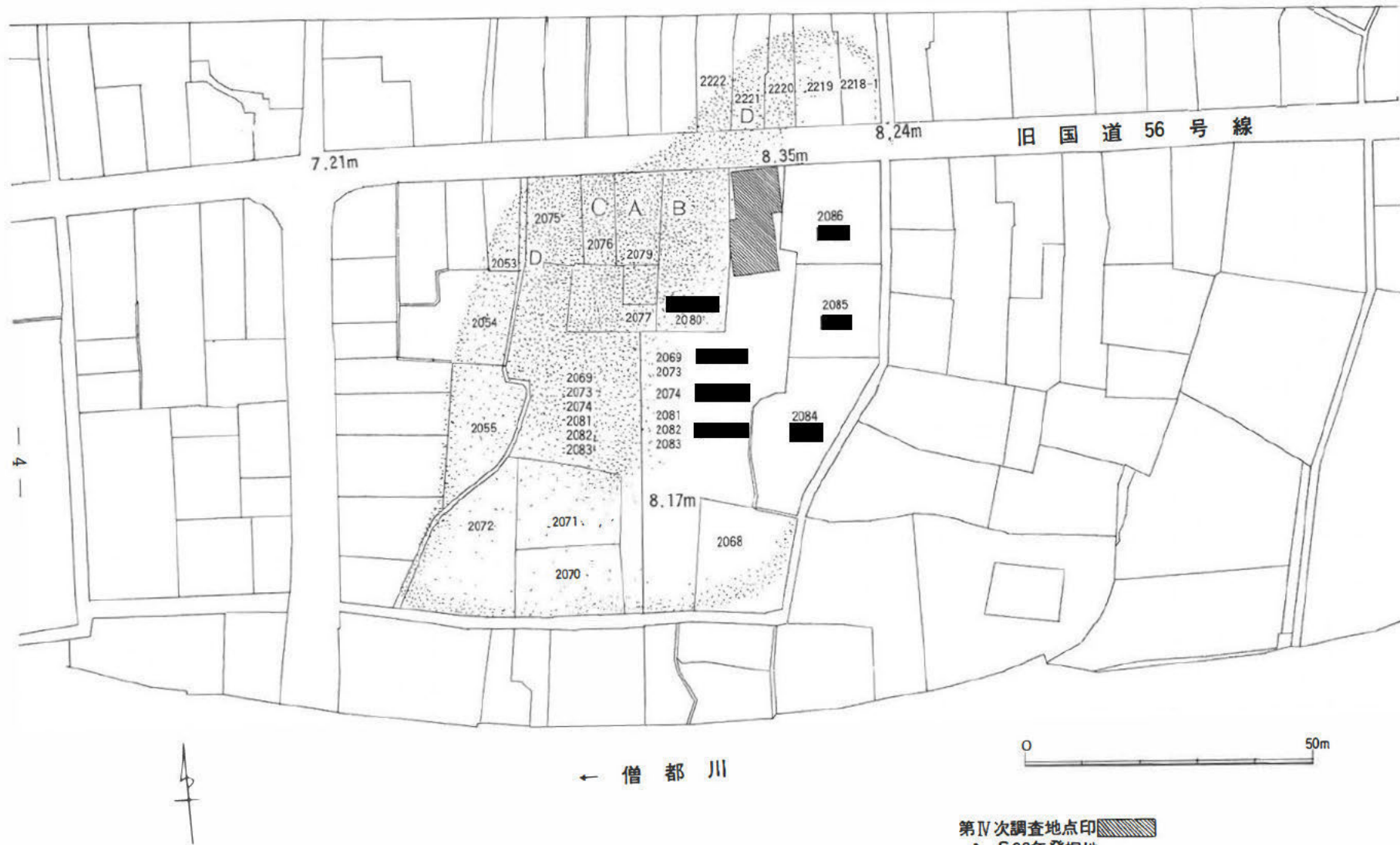


Fig. 1 平城貝塚の位置と周辺の遺跡分布図




- 第IV次調査地点印 
- A, S29年発掘地
- B, S37年発掘地
- C, S47年発掘地
- D, S52年片粕式土器発見地

Fig. 2 貝塚の分布範囲と第IV次調査位置図



目をもう少し広範に転じてみると、起点の平城貝塚を海岸沿いに約15km南下した地点には後期前葉宿毛式で知られる国史跡指定宿毛貝塚が、さらに四国西南端の足摺岬へと下ると、そこには姫島産黒曜石製石鏃出土で四国最大をほこる唐人駄場遺跡があって、その道程には後期後葉片粕式や、その初頭下益野式土器の標式遺跡、下益野・片粕が所在している。少し内陸部へ入ると後期後葉伊吹町式を主とする広見遺跡や、このあたりでは類例の少ない瀬戸内系の前・中期土器を出土する踊り駄場遺跡、さらにその対岸には前期初頭九州系の轟B式土器を単純に出土する茶堂遺跡や松田川流域の晩期後半橋上遺跡等が点在する。

内陸奥深い山岳地帯では、松田川、岩松川が上流点で接する分水嶺あたりで早・前期の姫島産黒曜石製石鏃を多出する池の丘遺跡がみられる。

次に起点から海岸線を48km北上した地点の宇和島では、後期後葉伊吹町式土器を標式とする伊吹町遺跡が所在し、その道程には前期初頭の無月遺跡がみられる。

以上の様に平城貝塚を起点とする遺跡の分布は、南北に拡散し、それも特に海岸部で後期の大規模遺跡がみられる。平城貝塚は、ちょうどそれら遺跡群のほぼ中心に位置するものである。

第1表 平城貝塚周辺の主要縄文遺跡一覧

| 遺跡番号 | 「遺跡」所在地           | 主体時期 | 文 献                                    |
|------|-------------------|------|--|
| 1    | 愛媛県宇和島市「伊吹町」      | 前期後半 | 西田栄「宇和島市伊吹町出土の後期縄文土器」愛媛大学紀要等3巻2号, 昭32年 |
| 2    | 愛媛県宇和島市「無月」       | 前期前半 | 犬飼徹夫「愛媛県宇和島市無月出土の前期縄文土器」西四国第4号, 昭48年。  |
| 3    | 愛媛県北宇和郡津島町御内「池の丘」 | 前期前半 | 木村剛朗「池の丘遺跡」姫島産黒曜石の交易, 土佐考古学叢書2, 昭53年。  |
| 4    | 愛媛県南宇和郡城辺町緑「梶郷駄場」 | 前期前半 |  |
| 5    | 愛媛県南宇和郡一本松町奈路「茶堂」 | 前期前半 | 木村剛朗「茶堂遺跡」姫島産黒曜石の交易, 土佐考古学叢書2, 昭53年。   |
| 6    | 愛媛県南宇和郡一本松町「広見」   | 後期後半 | 木村剛朗「愛媛県南宇和郡広見の縄文遺物」古代文化24巻6号, 昭47年。   |
| 7    | 高知県宿毛市「宿毛貝塚」      | 後期前半 | 岡本健児「宿毛貝塚出土縄文土器の再検討」高知小津高校研究誌5号, 昭41年。 |
| 8    | 高知県宿毛市「橋上」        | 晩期後半 | 木村剛朗「高知県宿毛市橋上遺跡とその遺物」古代文化26巻6号, 昭59年。  |
| 9    | 高知県幡多郡大月町「竜ヶ迫」    | 前期前半 | 岡本健児『高知県史』考古編, 昭43年。                   |
| 10   | 高知県土佐清水市下川口「片粕」   | 後期後半 | 岡本健児・広田典夫・木村剛朗「高知                      |

|    |                    |      |   |
|----|--------------------|------|---|
| 11 | 高知県土佐清水市「下益野」      | 後期前半 | 県片粕遺跡」高知県文化財調査報告書第19集, 昭50年。<br>片岡鷹介「高知県土佐清水市下益野出土の縄文土器」あるかいあ, 第2号, 昭38年。 |
| 12 | 高知県土佐清水市松尾「唐人駄場」   | 前期前半 | 木村剛朗「高知県松尾遺跡」考古学ジャーナル38, 昭44年。  |
| 13 | 高知県中村市「有岡」         | 晩期後半 | 岡本健児『高知県史』考古編, 昭43年。  |
| 14 | 高知県中村市「国見」         | 後期中葉 | 木村剛朗「高知県国見遺跡とその遺物」西四国第3号, 昭45年。   |
| 15 | 高知県中村市山手通り「中村貝塚」   | 晩期後半 | 岡本健児『高知県史』考古編, 昭43年。  |
| 16 | 高知県中村市「双海」         | 早期中葉 | 木村剛朗「双海遺跡」姫島産黒曜石の交易, 土佐考古学叢書2, 昭53年。                                      |
| 17 | 高知県中村市「三里」         | 後期中葉 | 岡本健児・広田典夫・木村剛朗『三里遺跡』中村市教育委員会, 昭53年。                                       |
| 18 | 高知県中村市「大用」         | 早期中葉 | 木村剛朗「高知県大用遺跡と出土石器」土佐史談52号通刊131号, 昭47年。                                    |
| 19 | 高知県中村市「勝間」         | 後期中葉 | 木村剛朗「勝間発見の大形尖頭器とその遺跡」土佐史談54号, 通刊133号, 昭47年。                               |
| 20 | 高知県中村市「踊婆山」        | 後期中葉 | 木村剛朗「勝間踊婆山縄文時代遺物の紹介」土佐史談58号, 通刊137号, 昭47年。                                |
| 21 | 高知県幡多郡西土佐村「広井駄場」   | 早期中葉 | 木村剛朗「広井駄場遺跡とその石器」土佐史談50号, 通刊129号, 昭46年。                                   |
| 22 | 高知県幡多郡十和村「広瀬」      | 後期後半 | 岡本健児・広田典夫『高知県広瀬発掘調査報告書』十和村教育委員会, 昭和48年。                                   |
| 23 | 愛媛県北宇和郡広見町「岩谷」     | 後期中葉 | 『岩谷遺跡』岩谷遺跡発掘調査団, 広見町教育委員会, 昭54年。  |
| 24 | 愛媛県東宇和郡城川町「中津川洞」   | 前期前半 | 大山正風『中津川洞』第3次発掘調査概報, 城川町教育委員会, 昭53年。                                      |
| 25 | 愛媛県東宇和郡城川町「穴神洞」    | 早期中葉 |   |
| 26 | 高知県高岡郡梶原町「ショウジガイチ」 | 後期前葉 | 木村剛朗『高知県梶原の縄文遺跡と遺物』土佐考古学叢書1, 昭53年。  |
| 27 | 高知県高岡郡梶原町「影野地」     | 前期前葉 | 木村剛朗『高知県梶原の縄文遺跡と遺物』土佐考古学叢書1, 昭53年。  |
| 28 | 愛媛県南宇和郡御荘町「深泥」     | 前期前半 | 木村剛朗「愛媛県深泥縄文遺跡の紹介」西四国第2号, 昭和43年。  |

### 第3章 遺跡及び調査の経過

平城貝塚は、冒頭に記したように店舗改築に伴っての発掘調査を過去に3度にわたりなされている。今回もそれにもれず、四国銀行御荘支店仮店舗跡地（現銀行東隣）を同店が駐車場とするのに先だつての緊急発掘調査である。調査区域は、県道（旧国道56号線）に接した東西8.5m南北18mの172.8㎡で、当貝塚地北西部の段丘頂部にあたる南側緩斜面である。（Fig. 2・Fig. 3）

調査期間は、昭和56年9月25日から10月5日までの11日間をそれにあてた。

調査団の構成は次のとおりである。



Fig. 3 四国銀行御荘支店仮店舗跡地

調査主体 御荘町教育委員会・御荘町文化財保護審議委員会

- |       |      |                |
|-------|------|----------------|
| 顧問    | 永井茂盛 | 御荘町長           |
| 調査団長  | 中平留義 | 御荘町教育委員会教育長    |
| 調査副団長 | 野平啓真 | 御荘町文化財保護審議会委員長 |
| 調査指導  | 阪本安光 | 愛媛県教育委員会文化振興局  |
| 〃     | 草地牲自 | 松山市内宮中学校教諭     |
| 調査担当  | 木村剛朗 | 日本考古学協会員       |
| 調査員   | 猪石広明 | 日本考古学会員        |
| 〃     | 岩上庄八 | 御荘町文化財保護審議会委員  |
| 〃     | 谷脇治久 | 〃              |
| 〃     | 尾崎賢夫 | 〃              |
| 〃     | 本多保博 | 〃              |
| 〃     | 向田荘作 | 〃              |
| 〃     | 大西吉蔵 | 〃              |
| 調査事務局 | 辻内 功 | 御荘町教育委員会       |
| 〃     | 片山一正 | 〃              |
| 〃     | 高江 学 | 〃              |
| 〃     | 中尾重隆 | 平城公民館          |



Fig. 4 発掘調査風景

- |       |             |
|-------|-------------|
| 調査事務局 | 楠木憲一        |
|       | 長月公民館       |
| 〃     | 浅海宏貴        |
|       | 中浦公民館       |
| 作業員   | 二宮キミエ 浜田マスマ |
|       | 蓮本 チヨ 城谷 サナ |
|       | 都築サトル 橋本ヨネ子 |
|       | 野平ミユキ 板倉 一枝 |

調査区北西隅の試掘で、貝層は地表面に一部露出している部分からは、幾らも層厚を持っていないことが確かめられたため、一応、計画としては全面発掘を目標としそれにのぞんだ。

調査区を2m×2mのグリッド36個を設定し、貝層表面から深さ5cm～10cm刻みで順次掘り下げ、遺物は総て平面図と垂直レベルを記録し、それを明確とした。

グリッドは、県道に接した北東隅を起点

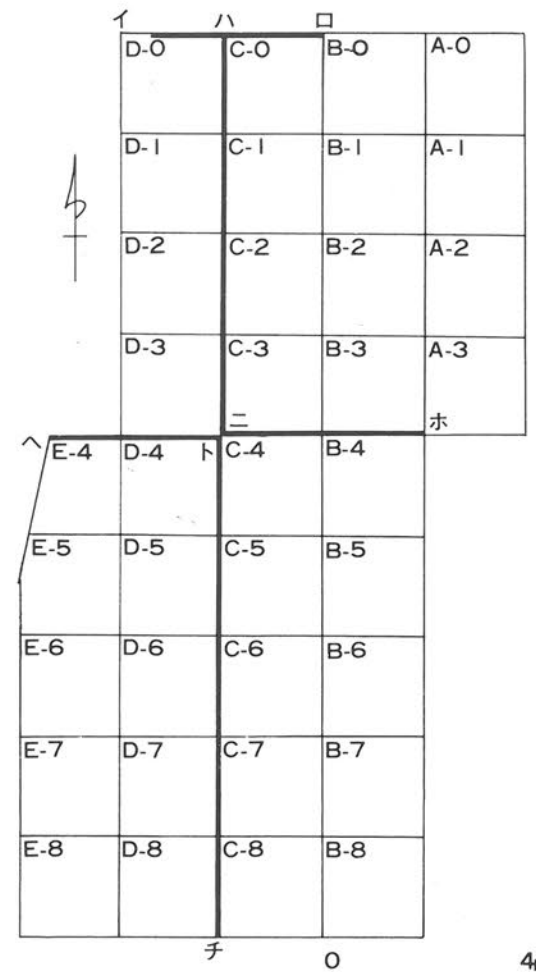


Fig. 5 調査区グリッド配置平面図

に、西方へA・B・C・D・Eとし、南に0区から8区まで区画を設けた (Fig. 5)。

調査の着手にあたり、まずその打ち合わせ会を昭和56年9月21日に御荘町教育委員会、同町文化財保護審議委員会、木村剛朗をまじえ、御荘町中央公民館にて開催した。

9月25日、調査指導者阪本安光同席のなかで2回目の打ち合わせ会を同公民館にて午前中を行い、午後、小雨降る中を調査区の中央部を幅広く被う建物基礎のセメント剥ぎ取り作業着手。風雨の強まった16時に現場を引き上げる。

9月26日、前日の作業続行のなかでグリッドの杭打ちを午前中終了。午後から発掘作業開始。まず貝殻散布の最も顕著なC-0区~C-3区までと、貝殻のまばらなB-3区、A-3区を地表から深さ5cm掘り下げる。C-2区で平城式第2群 (Fig. 38-20) の口縁部が出土し、C-3区では土師質糸切り底杯 (Fig. 46-3) の出土があった。A-3区では早くも不完全ながら第1号人骨の出土をみた (Fig. 6)。各グリッドに出土の土器は、どれも細破片で良好なものは少ない。

9月27日、前日の調査区を、さらに10cmの深さで下部へと掘り下げる。貝層はC-0区に最も厚くC-3区に向うにしたがいその層厚も薄くなり、A-3区、B-3区では基盤の茶褐色粘質土層が現われている。当日もC-2区に保存状態は悪いものの第2号人骨を確認し、(Fig. 7)それに密接し片粕式土器口縁部 (Fig. 45-2) が出土した。C-3区では姫島産黒曜石剥片も出土している。B-3区では大形石皿 (Fig. 50) の出土があった。これら遺物の他に、堅くしまった茶褐色粘質土層に柱穴をC-3区で1個、

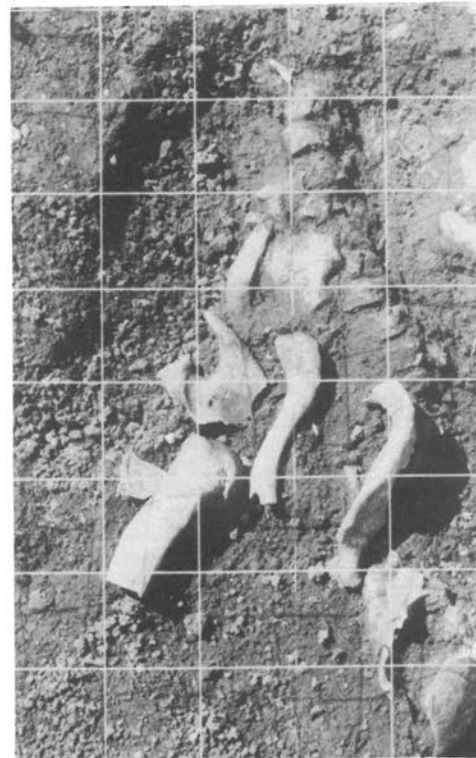


Fig. 6 第1号人骨出土状態



Fig. 7 第2号人骨出土状態

B-3区で3個確認した。なお、この日は、これらに平行しD-4区~D-8区までと、E-4区を第1回目の掘り下げ作業を開始した。

9月28日午前中、A-3区第1号人骨を石膏で現形のまま取り上げるのに先だって、その図取りを完了する。午後、人骨周辺を墓壇に平行し約30cm掘り下げ、石膏流し込み完了。掘り下げ作業中、平城式第2群口縁 (Fig. 42-17) と頸部 (Fig. 37-6) を検出した。前日から掘り下げ作業続行のD-4区~D-8区とE-4区は、特にE-4区、D-4区、D-5区に遺物が集中し、D-6区~D-8区では、この地が元パチンコ店であったことから、その玉洗器の大きな鉄棒が現われるなど攪乱が著るしく遺物も皆無の状態であった。草地牲自來援指導。

E-4区では、器形の約2分の1をとどめる保存良好な平城式土器第2群深鉢 (Fig. 8) が出土している。またD-4区からE-4区にかけて直径約1mの円状に礫で囲む配石遺構の出土がみられた (Fig. 9)。これらの礫石は、遺構を将来に復原することを考慮し、総てにNoを記入し写真撮影後取り上げを行なった。D-5区からも平城式土器第2群口縁部 (Fig. 38-23) の良好なものが出土している。これらの調査区では、わずかな貝殻の出土を部分的に認めただけは、ほとんど貝層の分布をみず、全面が有機質の黒褐色土層で被われていた。当日は、A

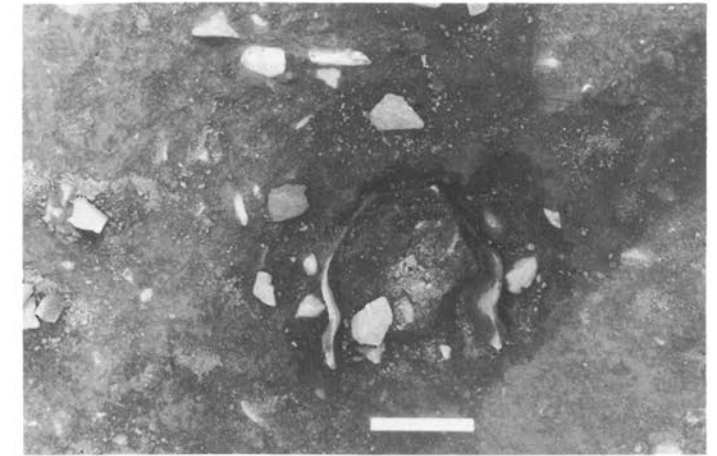


Fig. 8 E-4区平城式第2群土器深鉢出土状態



Fig. 9 D-4区及びE-4区に出土の配石遺構状態



Fig. 10 D-4区に出土の貯蔵穴遺構

ー6区, B-6区, C-6区を, ユンボを使用して表土を深さ10 cm削除した。

9月29日, 攪乱の明らかなD-6区~D-8区まではそのまま残し, 第2回目の掘り下げを遺物の集中するD-4区, D-5区, E-4区にしぼりそれを進行させた。

礫石は前日同様, 多くの出土を見たが, 並びが不規則で遺構らしきものは確認されなかった。それでもD-4区, E-4区で良好な獣・魚骨の出土が見られた(Fig. 12)し, E-4区では石錘(Fig. 47-8)も出土している。D-4区東隅では貯蔵穴の存在が明らかとなった(Fig. 10)。この中からは炭化種子, 平城式第2群土器片多数が検出されている(Fig. 11)。なお貯蔵穴の泥は黒褐色の泥砂質で, 明らかに周辺の土質とはそれを異にしていた。これらの泥は総て水洗し, 炭化物, 微細な遺物を一つ残らず採取した。

B-6区, B-7区, C-6区の第1回目の掘り下げも併行し進めた。この地区は, 西側に接続するD-6区, D-7区で大幅な攪乱が確認されていたことから, 本地区も当然それが予見されたため当初から茶褐色粘質土層の基盤まで深さ約20 cm掘り下げている。わずかな平城式土器片の出土を確認したのみであった。C-0区~C-1区に残された貝層を最終的に基盤まで掘り下げ作業も行なった。平城式土器の細片少量と, C-1区で, グリッドを深さ約15 cmの断差をもって斜めに緩や



Fig. 11 貯蔵穴床面に出土の平城式第2群土器片状態



Fig. 12 E-4区に出土の魚骨出土状態



Fig. 13 C-0及びC-1区の竪穴住居址

かな曲線で横ぎる住居址の一部かと思わせる遺構の確認がなされた(Fig. 13)。第2号人骨の取り上げ完了する。

9月30日, 第1号人骨の取り上げ完了。取り上げ後, 墓壙内の泥を総て取り除き, 黄褐色粘質土層の床面に木の根跡と, その痕跡に石器剥片, 平城式土器片, 近代瓦片の流れ込みを確認(Fig. 14)。また, 床面調整中, 層中に張り付いた状態で出土の縄文前期轟B式土器口縁部(Fig. 36-1)を検出した。墓壙内の泥は大粒砂を多く混えた黒褐色泥砂土で, 中に破碎された貝殻の混入が認められた。

貝殻散布の多いD-0区, D-1区の第1回目掘り下げ着手。遺物の多量出土を期待していたが, 建物跡の基礎コンクリートや, ガラス, タイル片などが見られ, この地区がほぼ全面攪乱されていることを確かめた。遺物の出土は少ない。またC-1区からの落ち込みをD-2区に追ったが, そこでは確認されていない。

B-1区, B-2区の第1回目の掘り下げ着手。この調査区は, 表土の荒れ具合から攪乱が予測されたため, 一挙基盤の茶褐色粘質土層まで掘り下げた。B-1区ではほとんど遺物をみなかったが, B-2区東隅では良好な遺物の出土に恵まれた。(Fig. 15)。B-2区グリッド中央部に柱穴1個を確認し, その東隣りに宿毛式土器(Fig. 36-5)が出土している。またA-

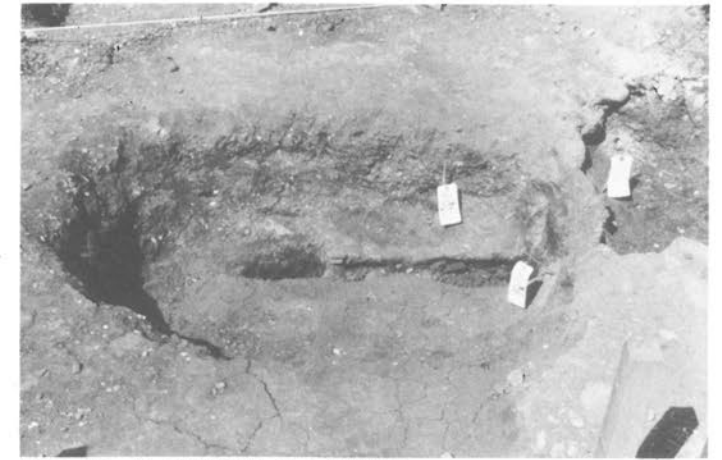


Fig. 14 A-3区第1号人骨墓壙



Fig. 15 B-2区柱穴と遺物出土状態



Fig. 16 B-4区及びC-4区に出土の集石遺構

2区とB-2区境界線に平城式土器第1群胴部土器(Fig.36-19)も出土した。その近くに獣骨(猪下顎)の出土をみた。これら遺物の集中する小範囲は、わずかな落ち込みとなっていて、一面、貝層で被われていた。この貝層を追ってA-2区に拡張したが、このグリッドは攪乱著しく貝層はなく遺物の出土を全くみなかった。

B-4区, C-4区の第1回目掘り下げ着手。両グリッドのほぼ中央部に組石状集石遺構の出土をみた(Fig.16)。この集石の一部礫は、地表面に露出していたものである。礫石の中には石核(Fig.47-6)も含まれていた。C-4区では、不規則に並ぶ多くの礫石が出土している。礫石に混在し多くの石器剥片もみられた。土器は一般的に無文のものを出土している。B-4区では平城式第3群土器(Fig.42-30)が出土している。貝殻の混入は少なく黒褐色有機層をなしていた。

10月1日, C-4区, B-4区を2回目の掘り下げ開始。礫石の分布を追ってC-5区, B-5区へ拡張。この調査区からは建物の基礎コンクリート壁がグリッドを東西方向にさえぎっていることが分り、かなりの攪乱が予測された。それでも掘り下げが進むにつれ土器, 石器剥片, 獣・魚骨片, 礫石の出土を増すと共に、ほぼ楕円形に続く落ち込み部が確認され、これらが一種の竪穴住居址である可能性を得た。落ち込み部は、茶褐色粘質土層をほぼ直角に下げたもので、その輪郭は明瞭であった。(Fig.17)。C-4区からは片粕式胴部片(Fig.45-10)が出土した。B-4区, B-5区の境界に柱穴1個が検出された。この柱穴内には、破碎された貝殻が詰まっていた。B-5区南隅より伊吹町式土器口縁部(Fig.46-6)が出土している。総体的に、この調査区からの土器は、平城式から伊吹町式までの時間的に幅をもった出土状態が目撃された。本区域の調査は10月3日まで続行し、10月4日に日程の都合上から住居址床面を確認せずじまいで作業を打ち切った

10月2日, D-0区~D2区を2回目の掘り下げ着手。D-

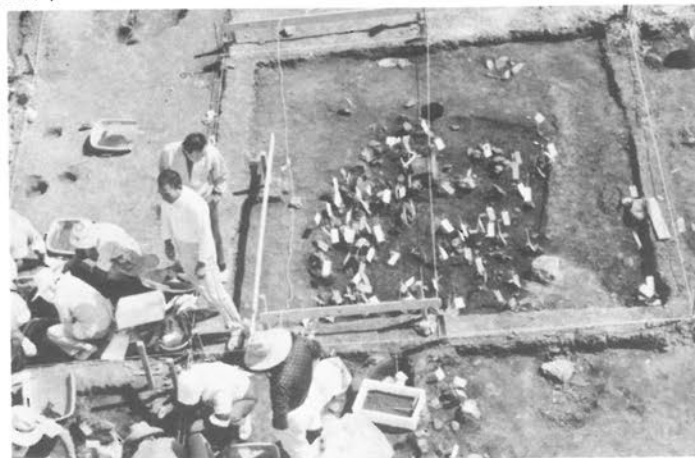


Fig. 17 C-4・B-4・C-5・B-5区にまたがる竪穴住居址



Fig. 18 第3号人骨上半身の上部を被う礫石出土状態

4区で第3号人骨(頭部)の露出があったことにより、その下半身を追ってD-3区を1回目の掘り下げ開始。D-3区グリッド中央部に礫石の集中出土を確認(Fig.18)。これに混在し平城式第3群(Fig.42-27)が出土した。

第2回目の掘り下げも当日完了した。初回とほぼ同じ個所に重複し礫石, 遺物の出土がみられた。平城式第3群土器(Fig.42-25)が出土している。またグリッドの東北隅で柱穴1個が検出された。C-2区第2号人骨墓壇内の泥を取り除く作業終了。泥は大粒砂質で黒褐色をなし、周辺の土質とはそれを異にするものであった。

10月3日, D-3区の第3号人骨を被う泥の最終的剥ぎ取り作業終了(Fig.19)。泥は総て水洗した。その作業で小形の石鏃1点と姫島産黒曜石剥片1点を検出した。また細片となった魚骨も多数得た。左胸部に密着したスクレイパー(Fig.49-7), 平城式第4群胴部(Fig.43-10)も検出された(Fig.20)。当日は、犬飼徹夫氏・草地牲白両氏の応援があった。

10月4日, 第3号人骨の頭蓋骨のみ取り上げ、この作業では森光晴氏の積極的な指導を受けた。頭蓋骨直下に枕石と思われる扁平自然礫を確認。地層断面図作成のため、C-0区~C-3区までの8mを幅50cmで地山まで掘り下げた。その作業で早期押型文土器片を黄褐色粘質土層中にて、佐賀県腰岳産の墨色黒曜石剥片を茶褐色粘質土層で検出した。この個所の地層断面図と貯蔵穴の図取り完了。午後、D-4区~D-8区までの東壁地層断面作図のため地山まで掘り下げ作業着手。D-5区東壁面に黄褐色粘質土層を基底部とする落ち込み部を確認。



Fig. 19 第3号人骨の全身出土状態

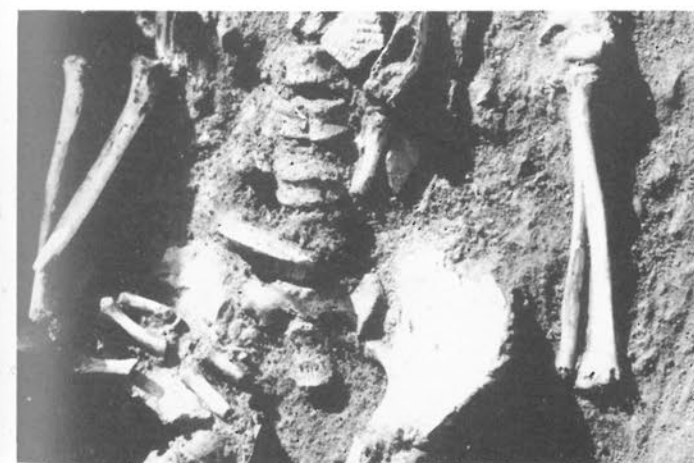


Fig. 20 第3号人骨に密着のスクレイパー, 平城式第4群土器出土状態

この落ち込みはC-5区からの連続と認められた。この個所に平城式第2群(Fig.37-1)を検出する。なお当日は、以下の先輩, 諸先生方の来援があった。

西田栄・長井数秋・大山正風  
清家直英・十亀幸雄・重松佳久

10月5日, D-3区第3号人骨の取り上げ総て完了。墓壇内の泥取り出し作業着手。茶褐色

粘質土層を基底部とする床面に平城式第5群土器、石器剥片、若干の礫が出土した。C-0区~D-0区北壁面とD-4区~D-8区までの東壁地層断面図作成終了。午後から全調査区の埋めもどし作業着手。各遺構とグリッド床面には、将来、再調査のされることを考慮し、浜砂でたっぷり被い、その上面を掘りおこしの土で敷きつめ全作業を終了する。

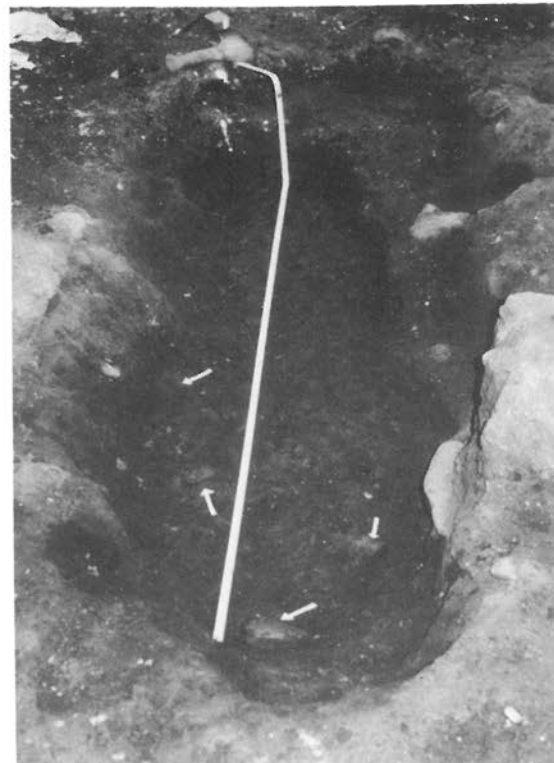


Fig. 21 第3号人骨墓壙



Fig. 22 第2号人骨墓壙

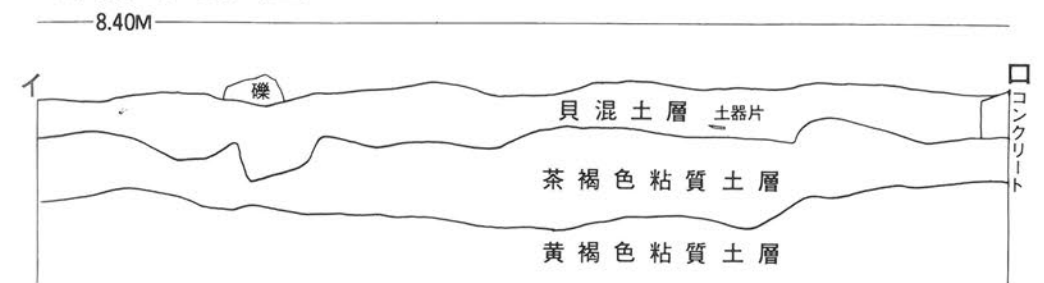


Fig. 23 調査終了風景

## 第4章 層位と遺構

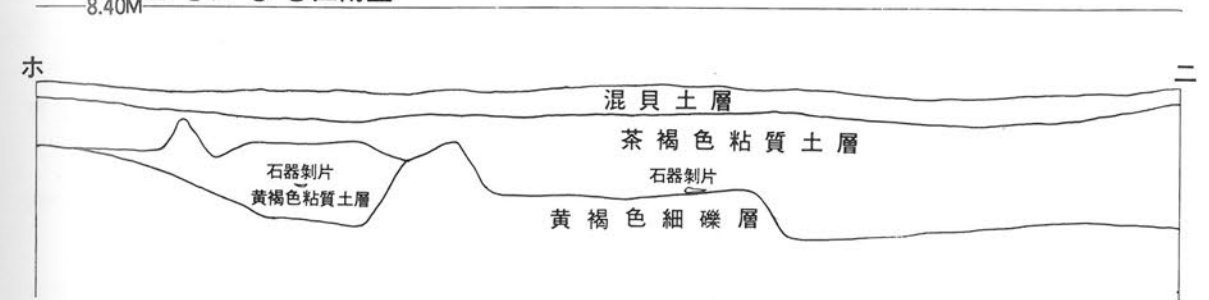
今回の調査区域は、人家の密集する商店街の中心地に位置し、過去に数度の建築が重ねられていたところである。したがって表土は、その度に深く削除され、地均らしされていたらしく平坦化している。貝層が地表面に露出し縄文遺物がわずか数cmの深さで出土するなどがそれを如実に語るものである。幸い貝層の下部に堅く締まる茶褐色粘質土層の分布があったことから、遺構の検出は比較的容易であった。

C-0区・D-0区北壁



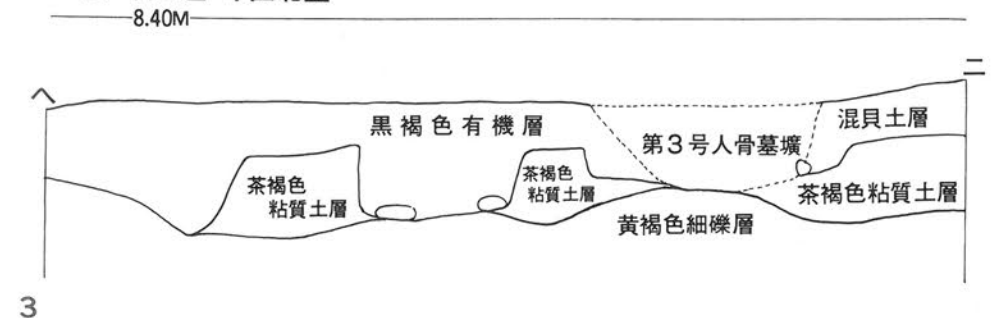
1

B-3区・C-3区南壁



2

D-4区・E-4区北壁



3

0 1m

Fig. 24 C-0及びD-0区北壁, B-3及びC-3区南壁, D-4及びE-4区北壁地層断面図

## 第1節 層位

調査地点の標高は、南端8.25m、北端8.17m、中央部で8.10mを測り、南北で若干高く、中央部で緩く下がっている。表土は、既に削除されて無く地表からそのまま貝層となり、あるいは遺物包含層となっている。貝層のみられるのは、C-0区とD-0区の北端から南に8mのB-3区からD-3区をむすぶ調査区のほぼ中央部にかけての範囲で、4区から南端の8区にかけての大半は、遺物包含層となっている。

Fig. 24-1は、北端のC-0区からD-0区にかけての北壁地層断面図である。約20cmの層厚をもつ貝混土層を最上部におき、その下に15cm~30cmの茶褐色粘質土層が続き、黄褐色粘質土層を最下層として、漸次地山へと移行する。後期土器は、貝混土層にのみ出土する。なお、今次の調査では、この北壁が最も貝層が厚く、その密度の高い地点である。北に接する国道下にも貝層は分布するものと考えられるが、東に続くB-0区では、それも極端に薄く、東端のA-0区では全く見られない。これからして東側には、貝層の分布はまずないとみてよいであろう。

Fig. 25-1は、C-0区からC-3区までの西壁断面と、その遺物層位を示したものである。貝層は北に厚く、南に薄くなっている。厚い個所で約20cmを測り、貝の密度も高く、いわゆる貝混土層を形成している。南の薄い部分は、貝の密度も弱く、混貝土層となり、厚さは8cm内外である。貝層下は、茶褐色粘質土層で、厚さ30cm~40cmがみられる。この土層は、層厚が貝層の場合と逆で、南に厚く北に薄くなり、その傾斜も南に高く北へ向うにしたがい緩く傾斜し低くなっている。この低くなったベース上に最も厚く貝層が堆積している。

茶褐色粘質土層下は、地山へと移行の黄褐色粘質土層である。この地層は、北側で細礫を混えぬが、南側では、それを多く混入する。

貝層からの土器は、後期中葉平城式第2群土器、同第5群土器を主体に、後期後葉片粕式や中世の土師質土器を若干混入する。土師質土器は貝層の最上部にのみ出土し、一定したベース上にはない。茶褐色粘質土層の上部、標高7.87mからは縄文中期前葉船元式土器が出土し、下部7.80mからは使用痕を認める腰岳産墨色黒曜石剥片が検出されている。この黒曜石は、第1号人骨墓壙床面に出土の前期初頭轟B式土器層位にほぼ平行するものであり、その時期に該当しよう。さらに下層の黄褐色粘質土層上部では早期中葉押型文土器の出土をみた。

Fig. 25-2は、Fig. 25-1から連続するD-4区~D-8区までの東壁地層断面と遺物の層位的な出土点を示したものである。

最上部に暗褐色細礫層10cm~20cmをのせ、その下に茶褐色粘質土層平均20cm、その下が黄褐色細礫層である。ほぼ水平な堆積状態を示すが、この地区は、前述したとおり、既に攪乱の明らかな所であって、その状態が断面図中央部に幅広く示され

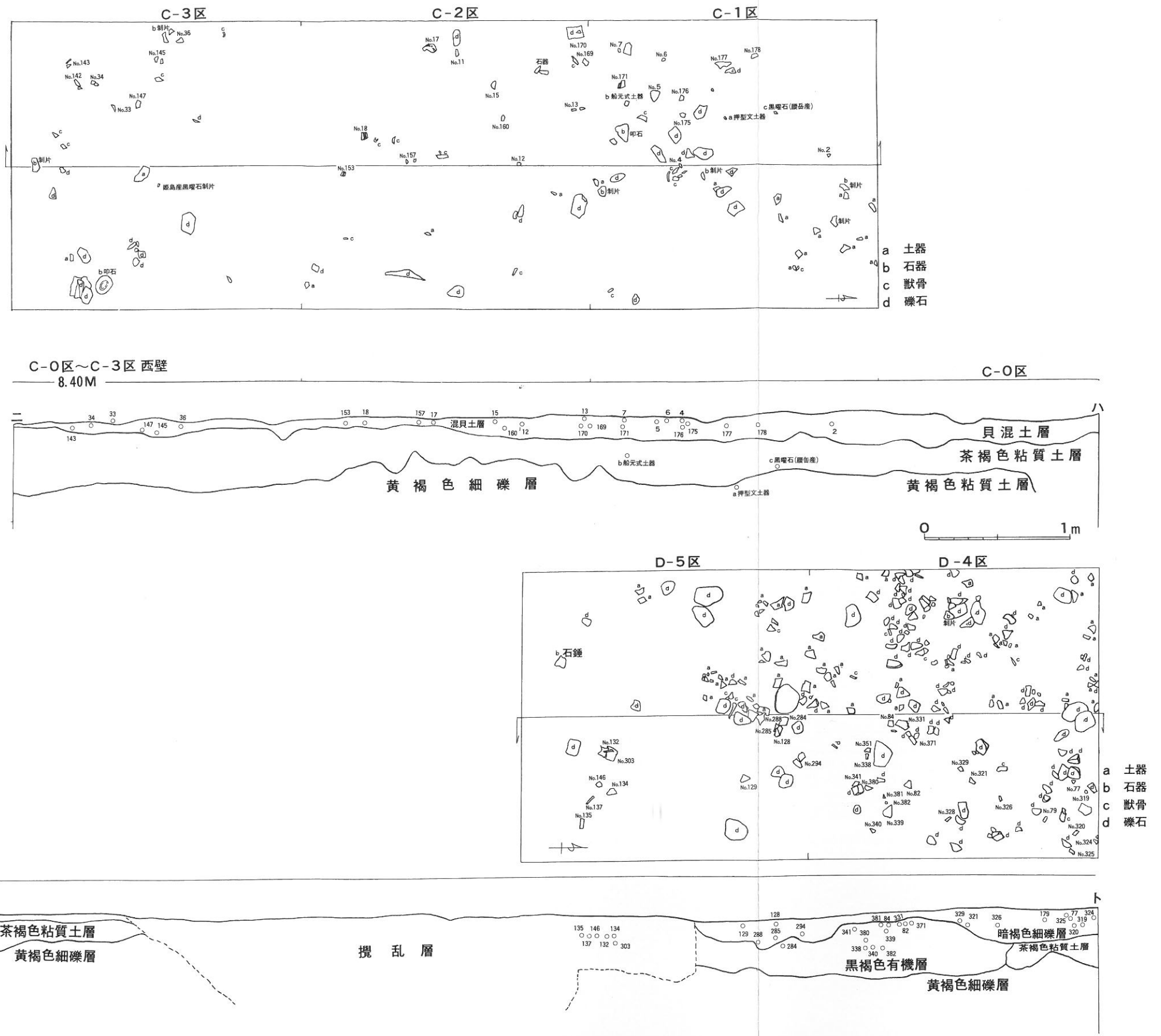


Fig. 25 C-0区~C-3区西壁, D-4区~D-8区東壁地層断面図と, 遺物の層位的出土状態



第2表 D-4区~D-5区, C-1区~C-3区に出土の土器類とそのレベル

| 調査遺物No. | 土 器      | レベル  |
|---------|----------|------|
| 324     | 平城式第5群胴部 | 8.10 |
| 319     | 平城式第5群胴部 | 8.05 |
| 77      | 平城式底部    | 8.10 |
| 320     | 平城式第5群胴部 | 8.04 |
| 325     | 平城式第5群胴部 | 8.11 |
| 79      | 平城式第5群胴部 | 8.08 |
| 326     | 平城式第5群胴部 | 8.04 |
| 321     | 平城式第5群胴部 | 8.04 |
| 329     | 平城式第5群胴部 | 8.05 |
| 82      | 平城式第5群胴部 | 8.05 |
| D-4     |          |      |
| 371     | 平城式第5群胴部 | 8.05 |
| 331     | 平城式第5群胴部 | 8.05 |
| 84      | 平城式第5群胴部 | 8.05 |
| 339     | 平城式第5群胴部 | 8.01 |
| 382     | 平城式第2群口縁 | 7.87 |
| 381     | 平城式第5群胴部 | 8.05 |
| 340     | 平城式第5群胴部 | 7.90 |
| 380     | 平城式第5群胴部 | 7.93 |
| 341     | 平城式第4群胴部 | 8.02 |
| 338     | 平城式第5群胴部 | 7.92 |
| D-5     |          |      |
| 294     | 平城式第5群胴部 | 7.99 |
| 284     | 平城式第2群口縁 | 7.92 |
| 285     | 平城式第2群胴部 | 7.97 |
| 128     | 平城式第5群胴部 | 8.07 |
| 129     | 平城式第2群口縁 | 8.04 |
| 288     | 平城式第5群胴部 | 7.94 |
| 135     | 平城式第5群胴部 | 7.99 |
| 137     | 平城式第2群胴部 | 7.98 |
| 146     | 平城式第5群胴部 | 7.98 |
| 134     | 平城式第5群胴部 | 7.98 |
| 303     | 平城式第5群胴部 | 7.94 |
| 132     | 平城式第5群胴部 | 7.98 |

| 調査遺物No. | 土 器      | レベル  |
|---------|----------|------|
| 2       | 平城式第5群   | 8.09 |
| 178     | 平城式底部    | 8.08 |
| 177     | 平城式第5群   | 8.08 |
| 175     | 平城式第4群   | 8.09 |
| 4       | 平城式第5群   | 8.14 |
| 176     | 平城式第2群   | 8.08 |
| C-1     |          |      |
| 6       | 平城式第5群   | 8.14 |
| 5       | 平城式第5群   | 8.13 |
| 172     | 平城式第5群   | 8.08 |
| 171     | 伊吹町式土器   | 8.09 |
| 7       | 平城式第5群   | 8.14 |
| a       | 押型文土器    | 7.67 |
| b       | 船元式土器    | 7.87 |
| c       | 黒曜石(腰岳産) | 7.80 |
| C-2     |          |      |
| 169     | 平城式第5群   | 8.10 |
| 13      | 平城式第5群   | 8.15 |
| 170     | 平城式第5群   | 8.10 |
| 12      | 平城式第5群   | 8.10 |
| 160     | 平城式第5群   | 8.08 |
| 15      | 平城式第2群   | 8.15 |
| 17      | 平城式第2群   | 8.12 |
| 157     | 平城式第5群   | 8.07 |
| 18      | 平城式第2群   | 8.10 |
| 153     | 片粕式土器    | 8.10 |
| C-3     |          |      |
| 36      | 平城式底部    | 8.10 |
| 145     | 平城式第5群   | 8.03 |
| 147     | 平城式底部    | 8.04 |
| 33      | 土師質杯底部   | 8.12 |
| 34      | 平城式第2群   | 8.11 |
| 143     | 平城式第5群   | 8.07 |

ている。最上部を被う暗褐色細礫層は、貝層に変わる後期中葉平城式期の遺物包含層である。D-4区では茶褐色粘質土層を下げた落ち込み部が黒褐色有機層となって現出しているが、これは東隣りに接するC-4区、C-5区の堅穴住居址遺構からの連続である。この落ち込み部は南側で攪乱層によって切れている。落ち込み部や、その上層にみられる土器は、共に平城式第2群土器、同第5群土器を主とし、同一時期のものである。また南端D-8区では、片粕式を検出しているが、近くに近代瓦片を伴出していることから、ここも攪乱が明らかである。

Fig. 24-2・3は、発掘区の中央部を東西方向におさえたもので、後者は、D-4区～E-4区の北壁、前者は、B-3区～C-3区南壁の地層断面図である。

北壁の周辺は、後述するが第3号人骨を伴う土壙墓、配石遺構、貯蔵穴など多くの遺構を検出した地区である。したがって断面図にも、それに付随する遺構の一部が黒褐色有機層の落ち込みとなって現出している。落ち込み部は、茶褐色粘質土層を約40cm梯形に下げて下層の黄褐色細礫層でとまっている。床面に砂岩円礫2個の露出がある。また、落ち込みで切られた茶褐色粘質土層は、厚さ約30cmでブロック状となっている。第3号人骨墓壙東側には、D-3区から続く混貝土層が約20cmの厚さで堆積している。遺物は、黒褐色有機層から平城式第2群土器(胴部無文)を主に出土している。

南壁は、上部に厚さ約10cmの混貝土層を水平に堆積し、その下に茶褐色粘質土層平均30cm、次に黄褐色細礫層と続いている。茶褐色粘質土層は、西に厚く、東側で黄褐色粘質土層がレンズ状となって形成する上に乗って薄くなっている。混貝土層も東側で層厚を薄め、貝の密度もきわめて減少するものである。

以上の様に、今回の調査区では、比較的水平的な自然地形(茶褐色粘質土層)の上に後期縄文文化層の形成が確められ、茶褐色粘質土層中上部に中期前葉、下部には前期初頭の文化層が、そして最下層の黄褐色粘質土層に早期中葉の文化層が判明した。

## 第2節 遺構

A-3区、C-2区、D-3区にそれぞれ人骨1体を伴う土壙墓3基と、D-4区～B-5区、C-4区～C-5区に堅穴住居址と柱穴、集石遺構をみた。さらにB-2区～B-3区、C-3区、D-3区で雑然と並ぶ柱穴と、D-4区、E-4区に配石遺構と貯蔵穴を検出している。これらの遺構は、調査区のほぼ中央部の北半部に集中し、南側にいたってはその検出は皆無であった。

### I. 集石遺構 (Fig. 26・Fig. 28)

当地に多い粗粒質砂岩礫を乱雑にはあるが、ほぼ円形に配置したもので、C-4区及びB-4区とB-5区で1基ずつ検出している。

C-4区及びB-4区の遺構(Fig. 26)は、直径50cmで、一部の礫石を地上に現わしていたもので、いたって浅い部分からの出土である。これを取り上げた下部からは、後述する堅穴住居址が現われている。礫の多くが、長径15cm前後の河原石で、その形状も分

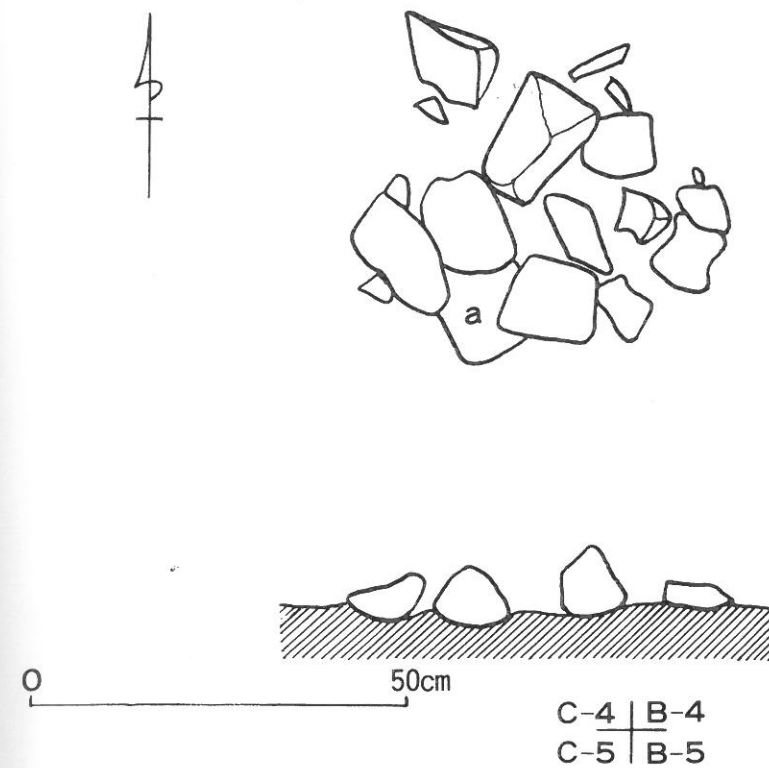


Fig. 26 B-4区・C-4区 集石遺構実測図 (a)石核

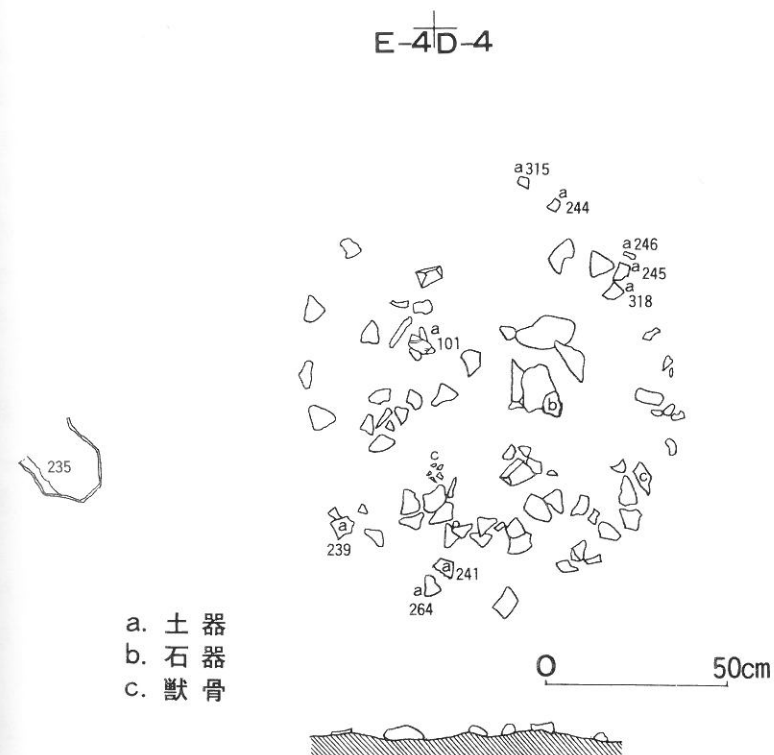


Fig. 27 E-4区及びD-4区に出土の配石遺構実測図

厚なものから扁平なものまでさまざまである。小礫はほとんど含まれてない。ただ中に1点硬質頁岩を素材とする長さ12cm、幅12.9cm、厚さ4.5cmの見事な石核(Fig. 47-6)が組み込まれている。その標高は8.08m。すぐ近くに出土の胴部縄文施文(Fig. 43-17)の土器や、口縁刻み目文土器(Fig. 42-30)は共に標高8.08mで、これと同位レベル上にある。

B-5区の集石(Fig. 28)は、茶褐色粘質土層を皿状に浅く掘り凹めた土壙内に長さ15cm～20cm前後の厚味あるやや大形の礫を配し、それとしたものである。石質は総て粗粒質砂岩を用いている。直径5cm前後の小礫も、これらの中心個所に数個認められた。皿状土壙の長径は55cmを測る。なお、この遺構は、堅穴住居址に近接するものである。

### II. 配石遺構 (Fig. 27)

D-4区及びE-4区グリッド境界線を中心に直径1mの円環状に礫石を配したものである。礫は、表面の滑らかな河原石から、角ばった割石な

どで、中心部に直径15cm~20cm前後の大き目の礫を置いて、周辺に拳大礫を配置している。石質は砂岩が最も多く、他に花崗岩や頁岩の円礫も含まれている。この遺構中には、土器片、獣、魚骨、石器剥片もかなりの数出土した。また細片となった木炭も散在的にその出土が確かめられているが、ただ礫石が火気をうけた形跡は認められてない。

獣骨は、猪と鹿で細片となったものである。土器は、平城式第1群土器胴部片(Fig. 36-13)や、平城式第3群土器口縁(Fig. 42-29)などで、他は粗製無文胴部片である。前者の標高は8.05m、後者は8.00mで、他の遺物も大体これに等しいレベルを測り、地表下約10cmの深さにその埋没を示している。本遺構の西70cmには平城式第2群深鉢形土器(Fig. 37-14)が出土し、東北80cmの位置には第3号人骨が検出されている。

### Ⅲ. 竪穴住居址(Fig. 28)

B-4区、B-5区・C-4区、C-5区の2回目の掘り下げで、この遺構を地表下約10cmの所で検出した。堅く締まった茶褐色粘質土層をほぼ直角に掘り込み、落ち込み部の土質は貝殻の破砕片を少量混えた黒褐色有機土で、その輪郭は容易につかみ得た。落ち込みは、C-4区・B-4区・B-5区へと連続し、C-5区南隅で建築物の基礎コンクリート壁によってそれが切れるが、内部に遺存する多数の土器・獣骨・石器及び剥片などの遺物のあり方から、これが一種の竪穴住居址であると判断された。西隣のD-4区には貯蔵穴がある。またB-5区北隅には、本住居の壁に接して直径約20cm、深さ37cmの柱穴が検出されている。この柱穴は、茶褐色粘質土層を直角に掘り込んだものである。

落ち込み内部の遺物は既述のように多種みられるが、特に土器に限っては平城式を主体としながらも後期後葉片粕式や伊吹町式までが混在し、時間的な幅が看取される。またその標高レベルも平城式第2群胴部(Fig. 42-16)が8.03m、片粕式胴部(Fig. 45-10)は7.93m、伊吹町式口縁(Fig. 46-5)が7.99mを測り、そのレベルにばらつきがみられ、文化層の攪乱を示している。この遺構については、落ち込み部を15cmほど掘り下げたのみで、平面形状、壁高、床面の柱穴など未確認のまま日程の都合上で調査を打ち切った。

本住居址の北側では、柱穴と、雑然と並ぶそれらしきピット5箇所が検出されている(Fig. 29)。これらのピットは、茶褐色粘質土層をほぼ垂直に穿ったもので、その直径は20cm~25cmまでで、深さは浅いものと深いものとに分けられるが、B-2区のもの最も深く35cmを測り、B-3区北隅のもの20cmの深さを持ち、共に柱穴とみなされる。他の3個は、10cm前後で浅く、柱穴とは認め難いが一応、これも住居に関連する建物遺構の一つにみなされよう。

B-2区の柱穴には貝殻が充満していたもので、近くには遺物の集中出土がみられた。この個所は、不整楕円形となって径1m、深さ約7cmの浅い落ち込みがみられた。もちろん、この個所にもみ貝殻が多く、遺物の全面を約10cmの貝層で被っていた。

B-2区柱穴横の遺物には土器・獣骨共に良好なものが多く、土器は後期前葉宿毛式胴部(No. 610・Fig. 36-5)や、同式蓋形土器(No. 608・Fig. 36-6)がみられる。その標

高は前者が8.03m、後者が8.05m。またA-2区境界上に平城式第1群胴部(No. 620・Fig. 36-19)も出土しているが、この標高は7.98mである。

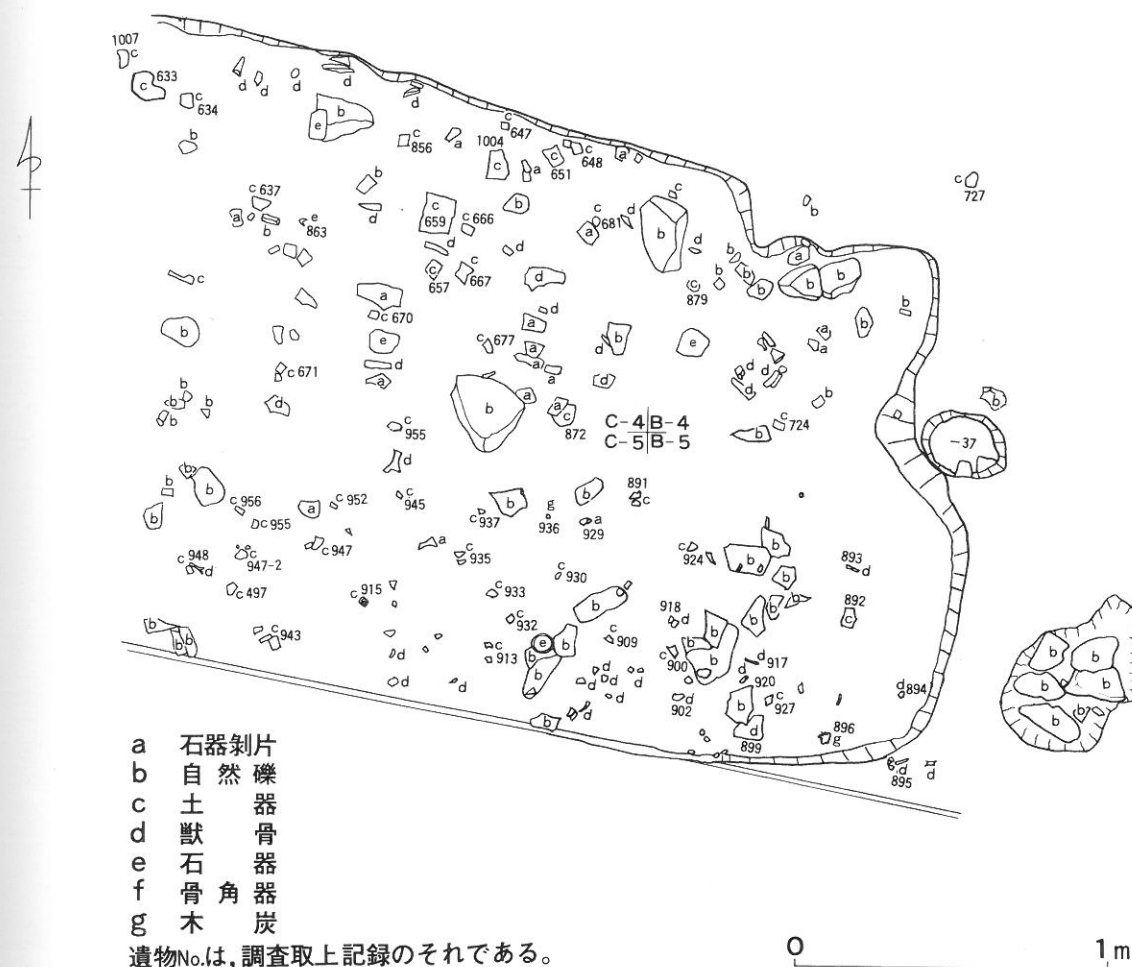


Fig. 28 竪穴住居址と集石遺構平面図

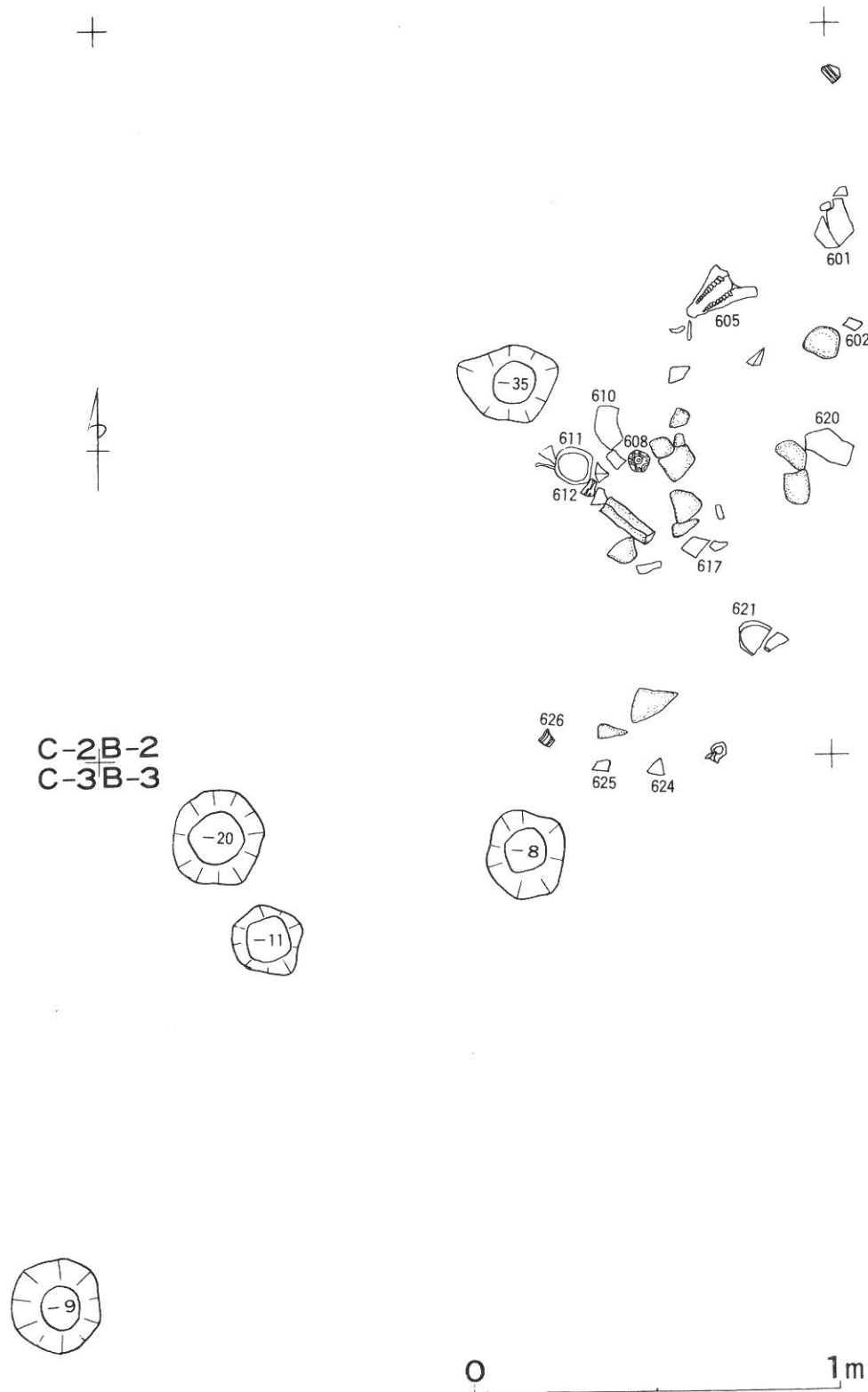


Fig. 29 B-2・B-3・C-3区柱穴とB-2区に出土の遺物出土状態

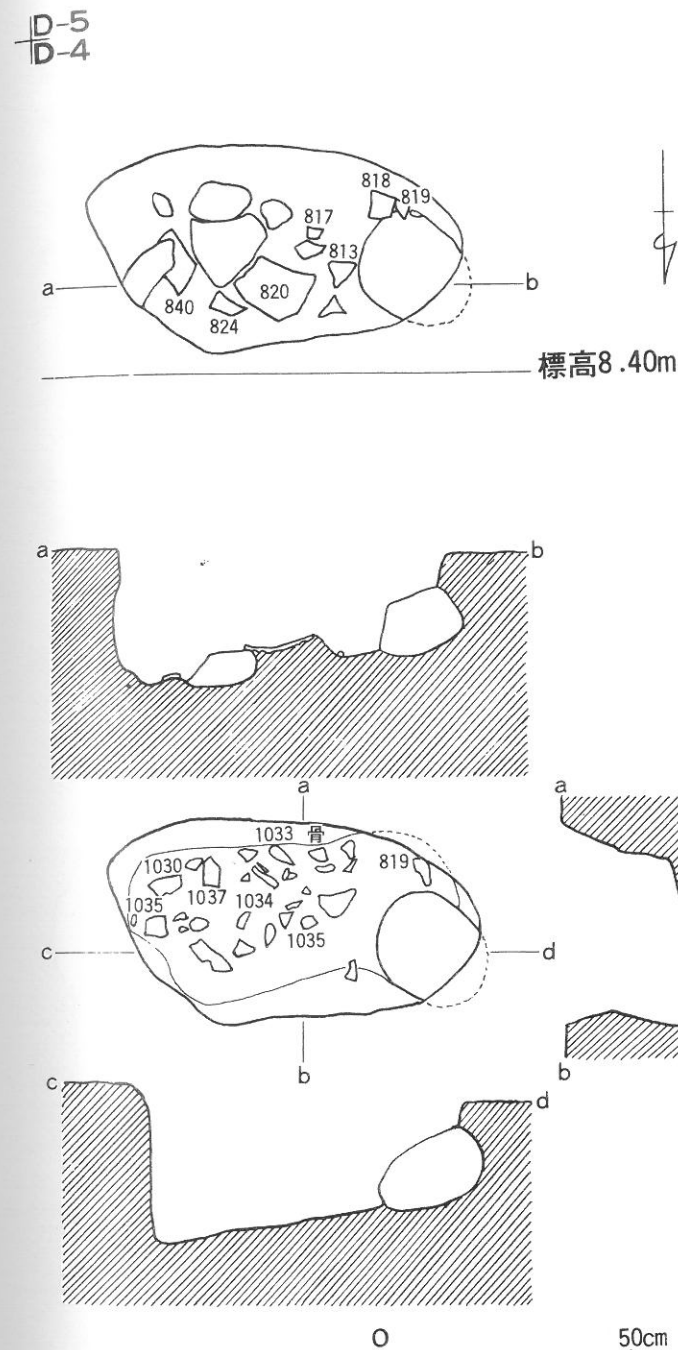


Fig. 30 D-4区に出土の貯蔵穴実測図

第2群鉢形口縁部(No. 840・Fig. 42-3)と(No. 818・Fig. 42-15)は共に平城式第2群土器深鉢形で推定口径は前者が38cm, 後者が30cmである。

V. 土墳墓と人骨出土状態

A-3区, C-2区, D-3区で各1体の人骨を伴う計3基の土墳墓を検出した。

IV. 貯蔵穴 (Fig. 30)

本調査地域において発見された貯蔵穴は, D-4区南隅に検出の1個である。西に配石遺構, 北に第3号人骨, 東に堅穴住居址など各遺構が約70cmの距離にあつて, これらに囲まれた位置にある。

地表下約5cmの所で確認されている。長径76cm, 短径41cmを測る不整楕円を呈し, ほぼ垂直に近く掘り下げている。床面は平坦で, 西側に浅く, 東に傾斜して深くなっている。最も深い個所で地表下31cm, 浅い個所で18cmである。床面西隅には人頭大の砂岩円礫の露出がある。貯蔵穴内部の泥は黒褐色泥砂質で, 周辺の土質とはそれを異にする。内部からは炭化種子20個(P L 31)を出土した。なお, これを乗せた床面には拳大の円礫と多数の土器片が重なり敷き並べられた状態で出土した。土器片は, 口縁, 胴部に限られ, 比較的扁平なものが多く, 中には長さ17cm, 幅10cmの大形片が少数含まれている。総ての土器片は裏向きである。

大形片 (No. 820・Fig. 38-11)は推定口径40cmの平城式

A-3区第1号人骨 (Fig. 31)

貝殻の破砕片をまばらに混える混貝土層を約5 cm掘り下げた個所で人骨1体が検出された。保存状態は悪く、椎骨以外の骨格は、一部現位置を大きく移動している。現存する下顎骨、上腕骨、大腿骨は、その破片となった一部分で、それらは左胸部周辺にかき集めた状態で出土した。側頭部破片2点のみで、ほぼ現位置にある。8個の椎骨体は緩く弯曲した位置で出土した。頭蓋の位置、椎骨の向きからいって、第1号人骨の方位は、東方に頭を向けた埋葬であったことが知られる。ただし、それが伸展葬であったものか屈葬であったかについては、この出土状態からは明らかにし得なかった。

本人骨は、周辺の土ごし石膏で固め取り上げを行なったもので、墓壙は、その作業で本来の形状を少し広めたものとなっている。Fig. 31がその実測図である。長径1.42m、短径1.14mで楕円形を呈し、茶褐色粘質土層を貫いて黄褐色粘質土層を床面としている。

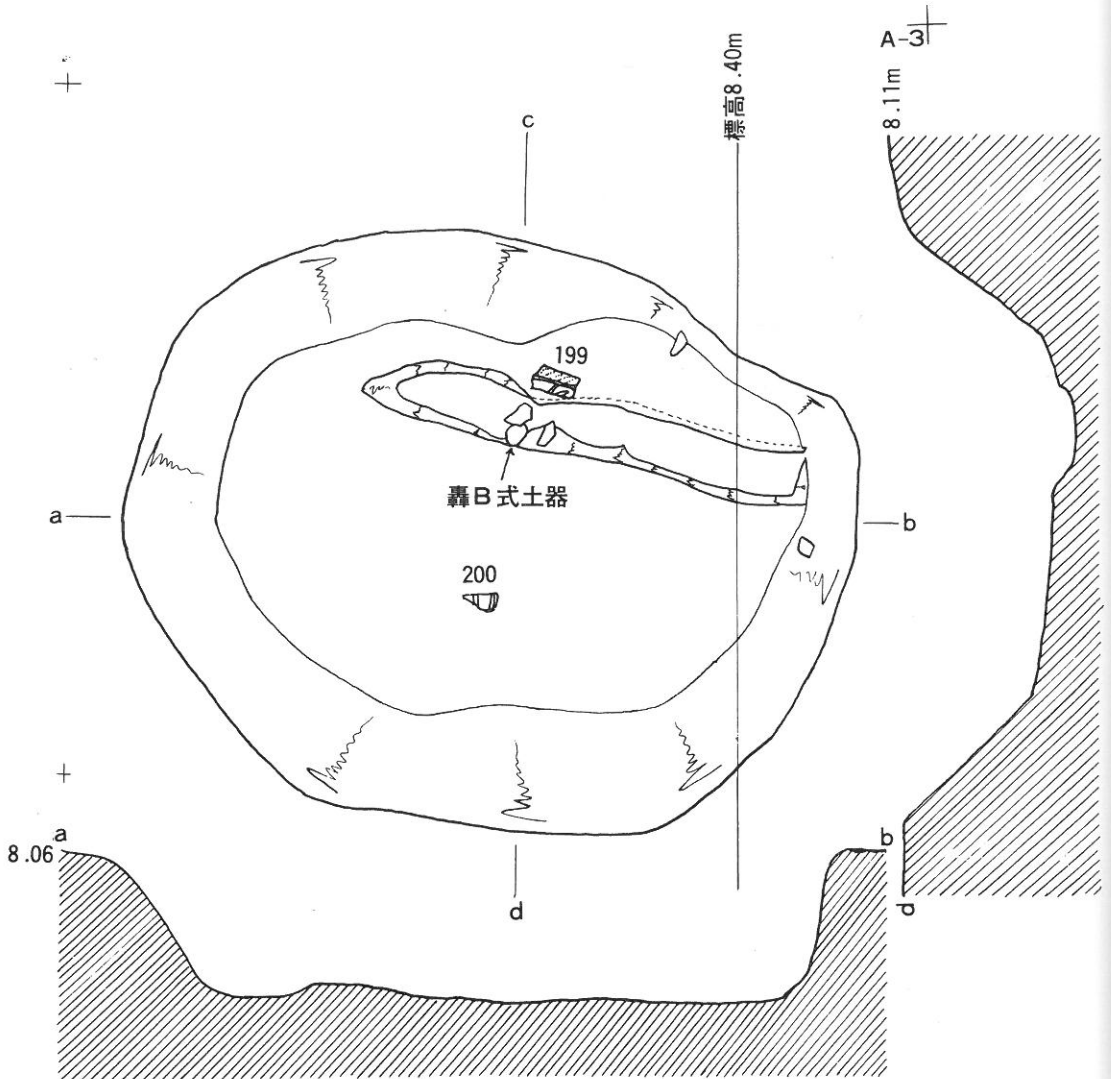


Fig. 31 第1号人骨とその土壙墓及び墓壙内遺物出土状態

A-3区第1号人骨 (Fig. 31)

貝殻の破砕片をまばらに混える混貝土層を約5 cm掘り下げた個所で人骨1体が検出された。保存状態は悪く、椎骨以外の骨格は、一部現位置を大きく移動している。現存する下顎骨、上腕骨、大腿骨は、その破片となった一部分で、それらは左胸部周辺にかき集めた状態で出土した。側頭部破片2点のみで、ほぼ現位置にある。8個の椎骨体は緩く弯曲した位置で出土した。頭蓋の位置、椎骨の向きからいって、第1号人骨の方位は、東方に頭を向けた埋葬であったことが知られる。ただし、それが伸展葬であったものか屈葬であったかについては、この出土状態からは明らかにし得なかった。

本人骨は、周辺の土ごし石膏で固め取り上げを行なったもので、墓壙は、その作業で本来の形状を少し広めたものとなっている。Fig. 31がその実測図である。長径1.42m、短径1.14mで楕円形を呈し、茶褐色粘質土層を貫いて黄褐色粘質土層を床面としている。

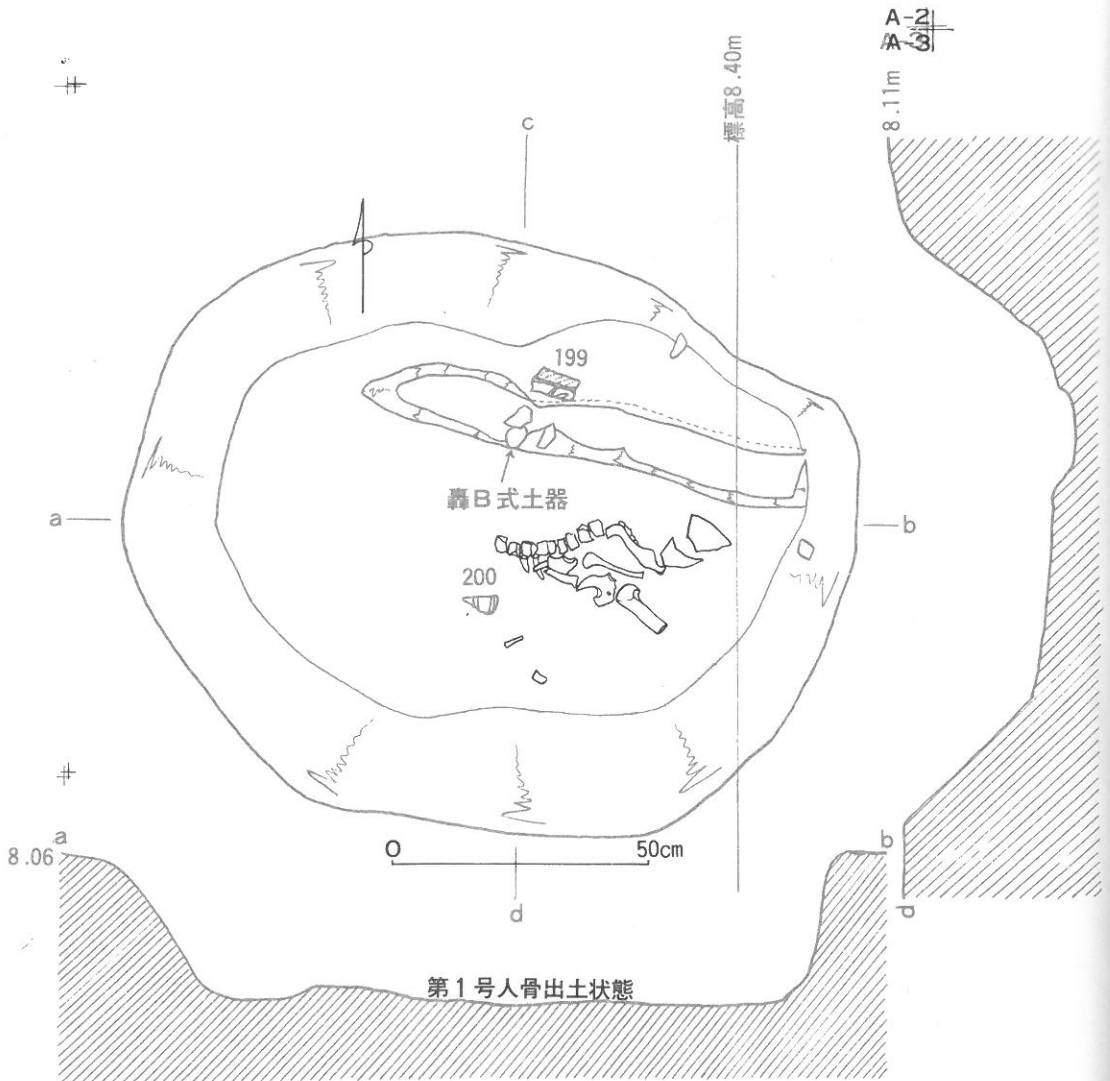


Fig. 31 第1号人骨とその土壙墓及び墓壙内遺物出土状態

B-2/B-3  
C-2/C-3

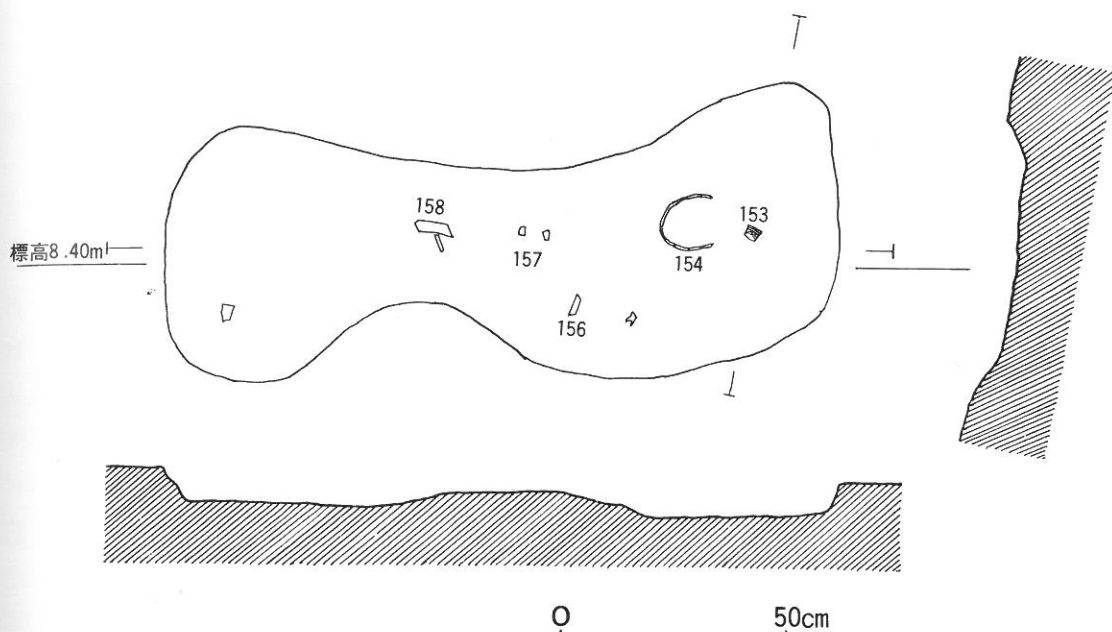


Fig. 32 第2号人骨とその土壙墓及び墓壙内遺物出土状態

深さは約45cmである。墓壙内には大粒砂を混えた黒褐色泥砂土が充満していた。人骨は、その泥に埋没していたものの床面からは約30cm上部に出土し、ちょうどこの泥に乗せた状態で出土している。礫の混入はほとんど見られなかった。墓壙内に平城式第2群口縁(No.200・Fig.42-17)、同頸部(No.199・Fig.37-6)2点を検出した。両者の標高は7.85mで、墓壙の25cm下部である。また床面を長軸方向に走る木の根跡に接し、縄文前期初頭轟B式口縁(A・Fig.36-1)の出土にも恵まれた。この土器は黄褐色粘質土層床面に張り付いていたものである。木根跡の溝には平城式土器片、石器剥片、現代瓦片、本人骨の一部であろう肋骨残片などがみられたが、これらは総て上部からの流れ込みと判断された。

#### C-2区第2人骨 (Fig.32)

第2号人骨は、保存状態が極めて悪く、最も形状をとどめる頭蓋すら約3分の1を欠失する。C-2区グリッド中央部に出土し、下向きとなった頭蓋骨を南側に、北に細破片となった大腿骨をまばらに出土した。

頭蓋は、右頭蓋冠のみを残した状態で出土し、その断面形が明らかであった。顔面の

保存は比較的悪く、上・下顎骨はほとんど原形を保っていない。頭蓋の標高は8.08m、他の骨片もこれに順じ、混貝土層下約5cmからの出土で、すぐ下の茶褐色粘質土層5cm～7cmを掘り下げて土壌としている。長径1.48cm、短径30cmを測り、平面形は中央部でくびれた瓢箪形を呈する。長軸両端が深く、中央部で最も浅い。土壌内部の泥は、黒褐色泥砂質で、礫、土器片の混入は見られなかった。なお、頭蓋の南に接し片粕式口縁部(No.153・Fig.45-2)が出土しているが、その標高は8.10mで、混貝土層からの出土である。

#### D-3区第3号人骨 (Fig.33-1~3・Fig.34-4・5)

今回発見の人骨では埋葬体位の最も整った保存良好なものである。本人骨は、南に接するD-4区の掘り下げで、頭蓋(頭頂部)を幸い最初に発見したことから、胴部のD-3区における検出は事前に予測でき、その出土状態と遺構についてを詳細に記録することができた。

Fig.32-1は、D-3区グリッドを地表から約5cm下げた事点での出土状態である。下半身の上部に若干の獣骨を含む礫、土器片が集中的に出土した。土器片は大小合わせ21点。礫は拳大のものを主とし、12個が出土している。土器は、その多くが平城式無文胴部片である。No.567は、口縁に縄文帯を持つ平城式第4群(Fig.43-36)。No.590は、口縁端刻み目文の平城式第3群(Fig.42-27)である。前者の標高は7.97m、後者は8.05mを測る。礫は角のとれた川石で、石質は粗質砂岩である。礫の標高は8.00mを前後するが、その平均は7.98mを測る。自然遺物・土器は、7.99mの平均値を持ち、微差ながら礫が沈んでいる。なおFig.33には最初に発見のD-4区頭蓋骨出土状態も示している。頭蓋を7個の礫が囲んでいる。総て砂岩で、拳大のものからその倍の大きさまでで一定はしてない。形状は楕円形をなす扁平なものを用いている。この個所の礫の標高は、平均7.95mで、頭蓋最高部で7.97m、基底部7.81mを示す。

2回目の掘り下げで大腿骨、脛骨、腓骨を含む両足を露出した。膝関節、足関節の右膝蓋骨、足根骨も現存する。また右脛骨の北東約50cmの所では柱穴1個検出した。礫、土器片、獣骨は、初回と異なり胸部に集中出土している。

Fig.32-2は、その出土状態である。足元で出土のNo.686口縁端刻目文土器(Fig.42-28)右脛骨そばのNo.688胴部無文土器片は、共にその標高が7.90m、7.91mと低い。両足の標高は7.85mで地表より約25cm下っている。刻目文平城式第3群土器No.689(Fig.42-25)の標高は7.97m、獣骨の標高平均7.95m、礫7.98mで、初回とあまり変化をみせてない。土器の平均標高は7.95mで初回からはマイナス4cmである。礫の石質は多くが粗質砂岩、中に一個花崗岩の円礫が含まれていた。なお、柱穴は、平面形が円形を呈し、直径22cm、深さ18cmである。

Fig.33-3は、3回目の出土状態である。左上腕骨桡骨、尺骨を出土している。体軸に平行して伸展位である。標高は、上腕骨頭で7.89m、尺骨頭で7.84mを測り、5cmの落差で肩の付根から手首方向に傾斜している。また、この回では右中足骨と少数の指骨



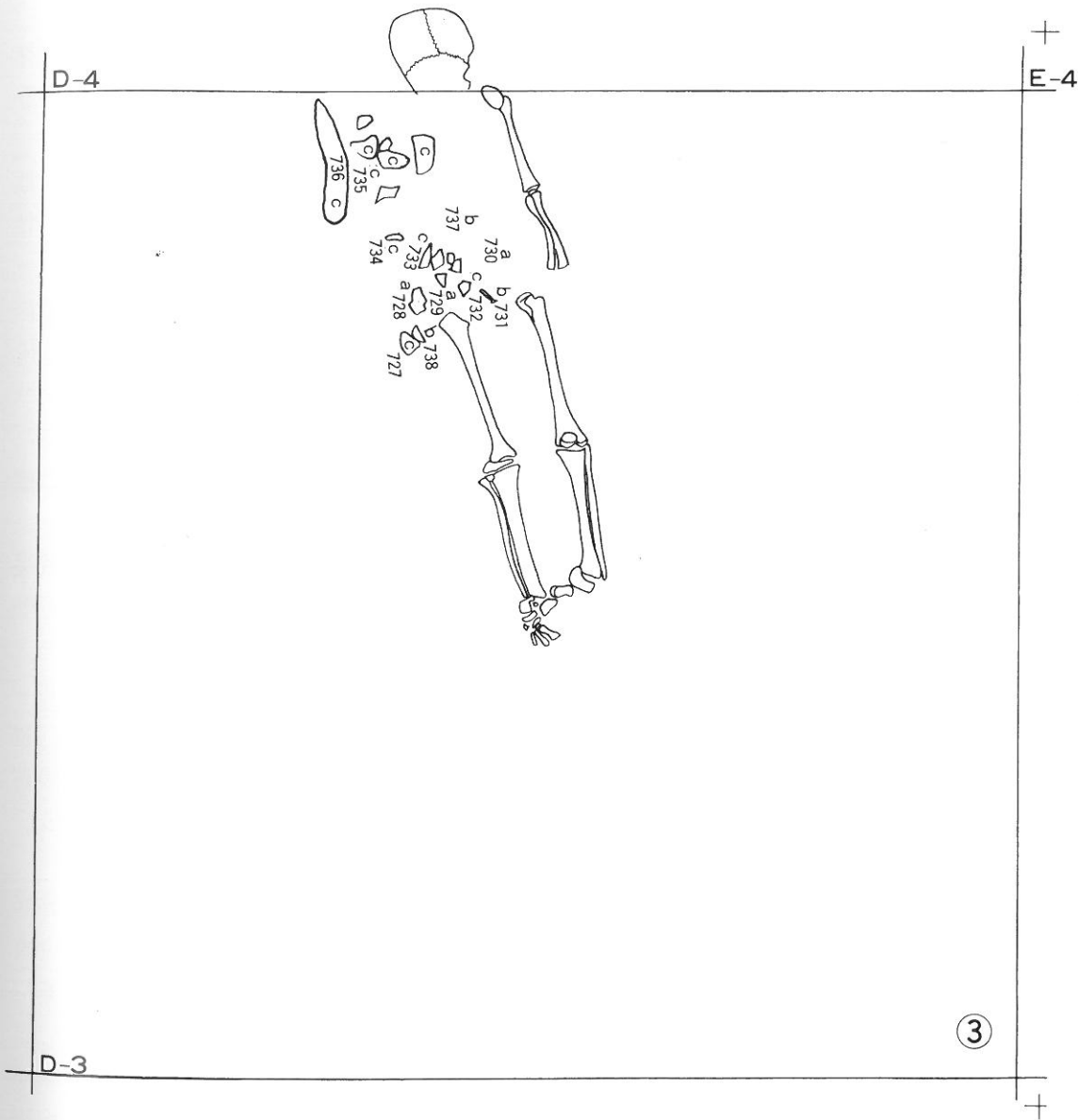


Fig. 33 第3号人骨とその上部を被う遺物及び礫石出土状態

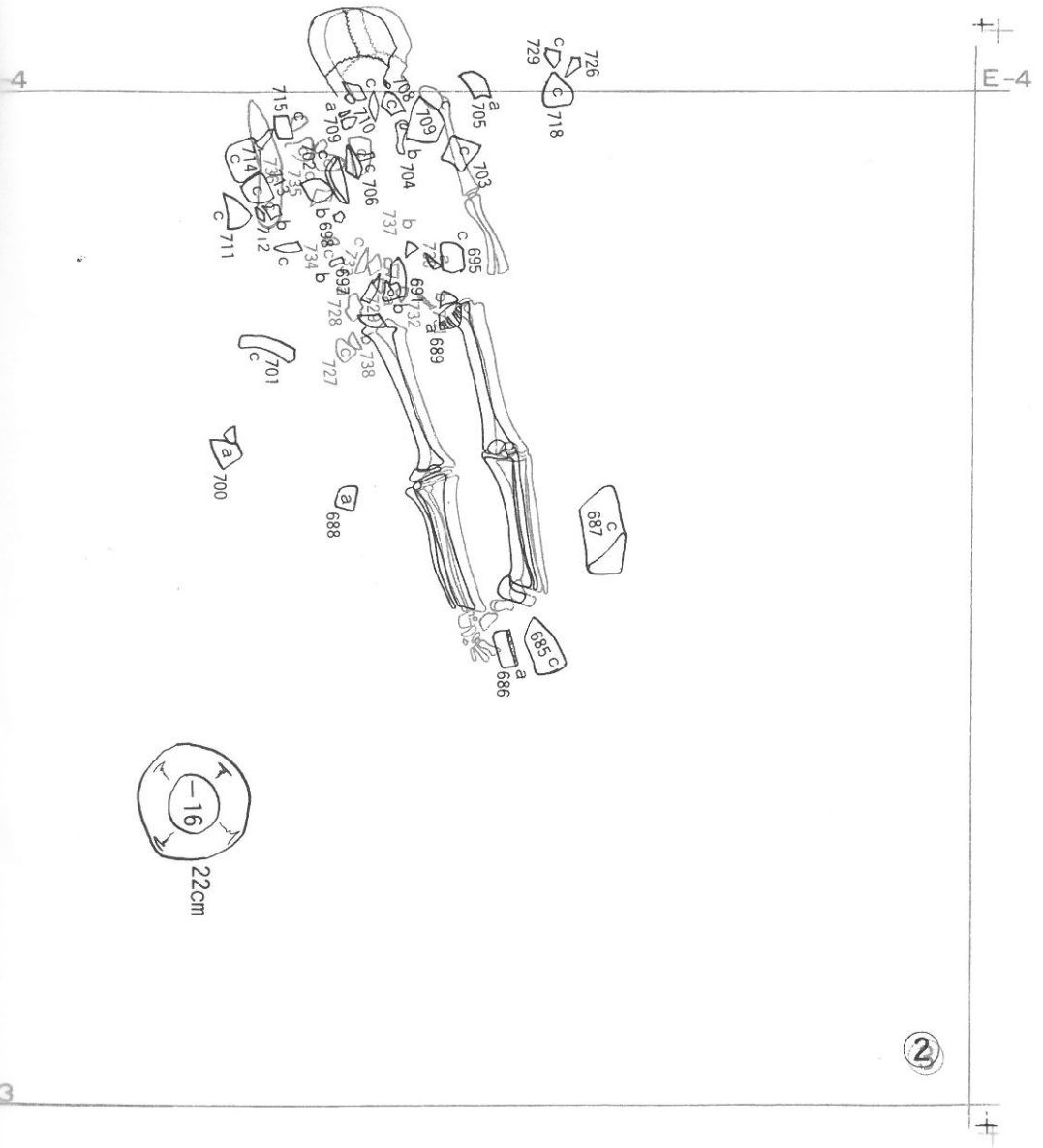


Fig. 33 第3号人骨とその上部を被う遺物及び礫石出土状態

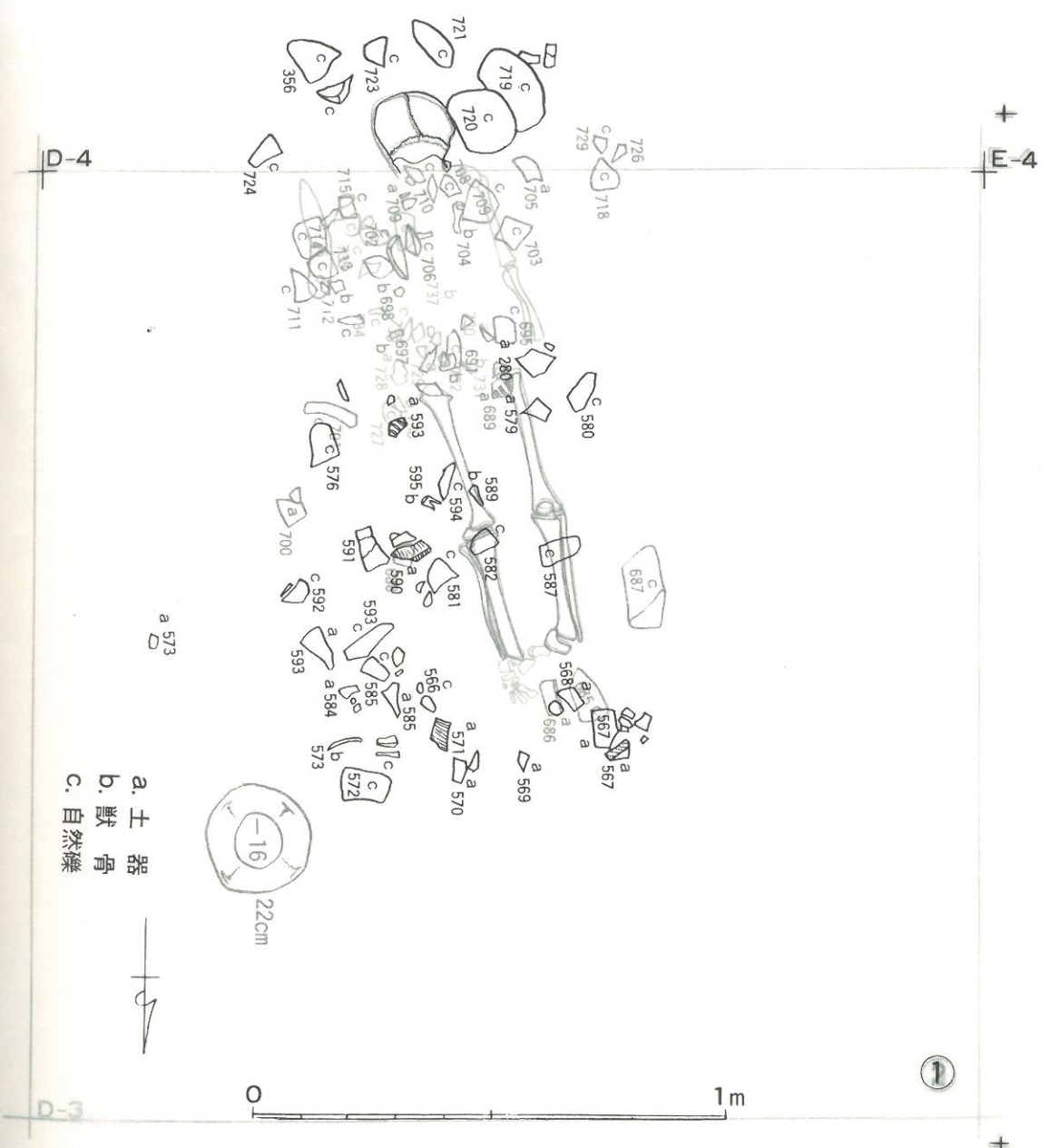


Fig. 33 第3号人骨とその上部を被う遺物及び礫石出土状態

も出土している。

土器片、礫、獣骨は、右腕上部に集中するが、数量は、礫12個、土器片、獣骨共に3点と前回に比べ減少している。礫は拳大のものと、その半分の大きさのものが折半し、割石も見られる。No.736礫は、長さ25cm、幅5cm、厚さ6cmの長楕円形を呈し右上腕骨9cmそばに据えられている。標高は7.91mで、砂岩である。

土器は、どれも細片で、有文はなく総て平城式胴部無文である。獣骨(猪)も小さな破片となっている。これらの遺物は、標高7.90mを前後し、平均は7.91mである。

4回目の掘り下げで、右上腕骨、橈骨、尺骨、肋骨、骨盤寛骨部を表出し、ほぼ全身骨格が出揃った。頭位を南東においた上肢ともに直伸を示す完全な仰臥伸展葬である(Fig.34-4)。肋骨、骨盤が最も傷みがひどく、前者は殆どが破損し、重なって出土している。両手骨と左足骨が欠損するが、この部分は、3・4回目の泥洗浄作業で指骨数点の検出があることから、これらがその欠損部の大部分を補うものとみている。顔面骨は破壊しているが、上・下歯とも正常で、保存状態は極めて良好である。

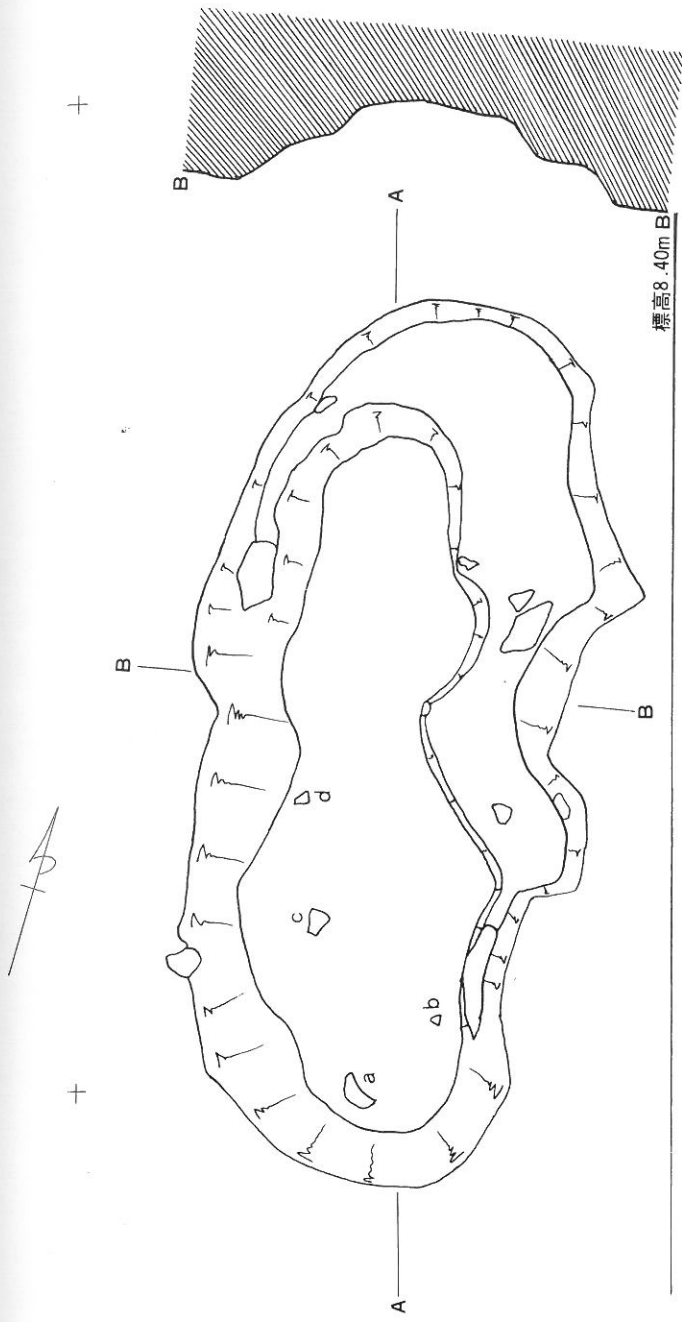
遺物は、2点の土器片と1点の石器が出土している。土器は、胴部縄文平城式第4群(a・Fig.43-10)と胴部無文(b)で、前者は、肋骨と腰椎の間に密着していたもの、後者は、右上腕骨そばのNo.736礫に接して出土したものである。石器は、打製スクレイパー(c・Fig.49-7)で、左側肋骨の最下位に貼り付いていたものである。土器の標高7.84m、石器7.87mで、平均7.85mを測り、地表からマイナス25cmの所にある。人骨の標高もこれに順ずる。

Fig.34-5は、人骨取り上げ後の土壙墓の状態。人骨直下を平均3cmの泥削除で黄褐色粘質土層を基底部とする床面に達した。人骨を被う泥は大粒砂を混入する黒褐色泥砂質で、粘りは強くない。

床面には1点の礫と3点の平城式胴部無文第5群土器片が出土した。礫(a・Fig.49-8)は、長さ7.3cm、厚さ2.7cm、幅4.2cmの扁平な上面観が三日月形をなすもので、頭蓋の後頭直下に接していたものである。土器(c・Fig.43-33)は、左上腕骨、(b)は右上腕骨頭直下にそれぞれ貼り付いていたものである。(d)は左手掌部で出土している。礫の標高7.84m、土器b・cは共に7.82m、dは7.83mである。

土壙墓は、平面形が不整楕円形を呈し、外・内周の二段の掘り込みが見られる。外周の長径1.94m、短径73cmである。内周は、外周にほぼ平行する輪郭を保ちながらも中央部で強く括れて、平面形が瓢箪形を呈し、第2号人骨土壙墓の形状と共通する特色を持つ。その長径154cm、短径23cmである。

掘り込みは、緩く傾斜したものであるが、足元の部分では垂直に、しかも極端に深く下げている。深さは北端で18cm、頭位をおく南側では約14cmを測り、やや浅く、平均18cmである。床面は一様に平坦に調整され断面形は船底形を呈している。なお、第3号人骨の調査では、前述したとおり掘り下げ2回目からの泥を総て水洗し、微細な遺物をも採取している。その中には、炭化種子1、打製石鏃1(Fig.49-3)と、多くの魚骨片



- a. 自然礫
- b. 平城式第5群土器
- c. 平城式第5群土器
- d. 平城式第5群土器

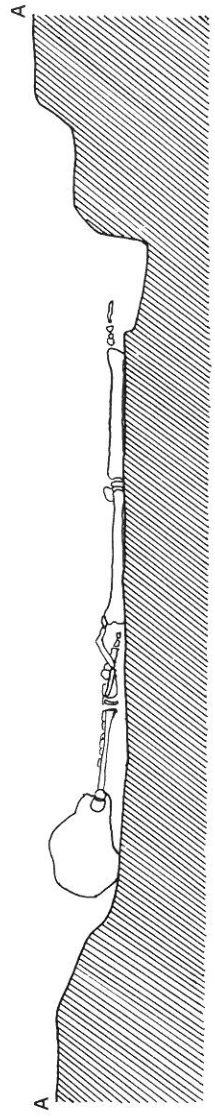
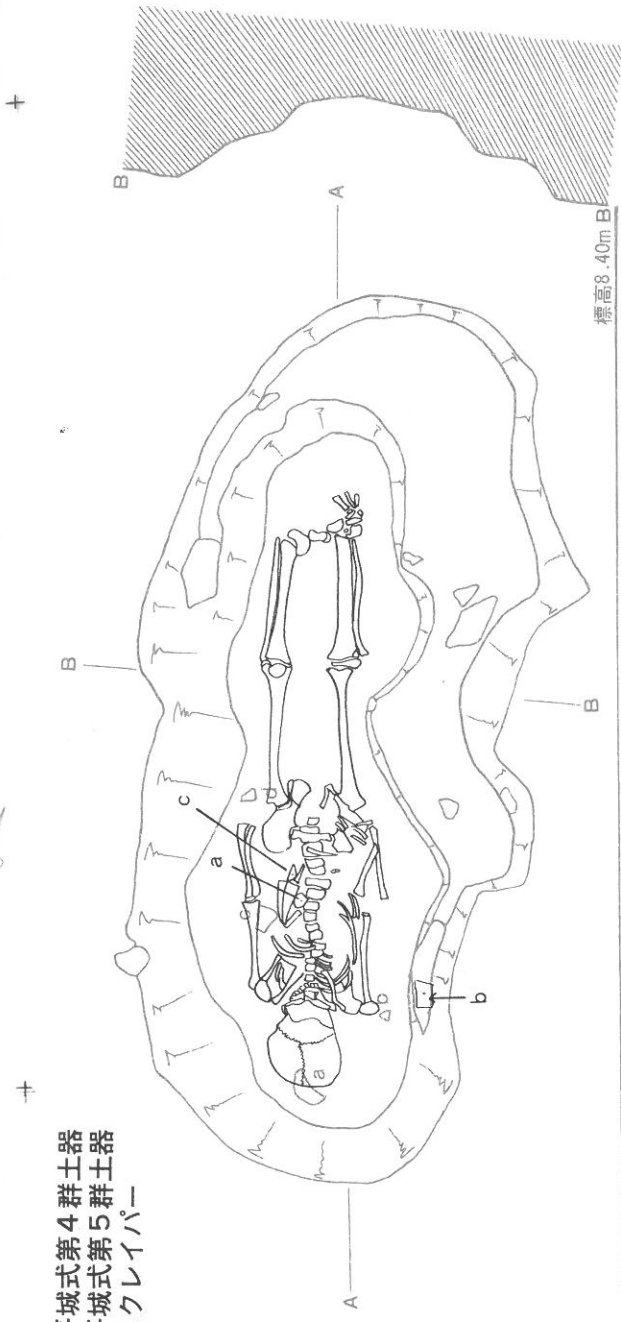


Fig. 34 第3号人骨とその土壌墓実測図

5



- a. 平城式第4群土器
- b. 平城式第5群土器
- c. スクレイパー

- a. 自然礫
- b. 平城式第5群土器
- c. 平城式第5群土器
- d. 平城式第5群土器

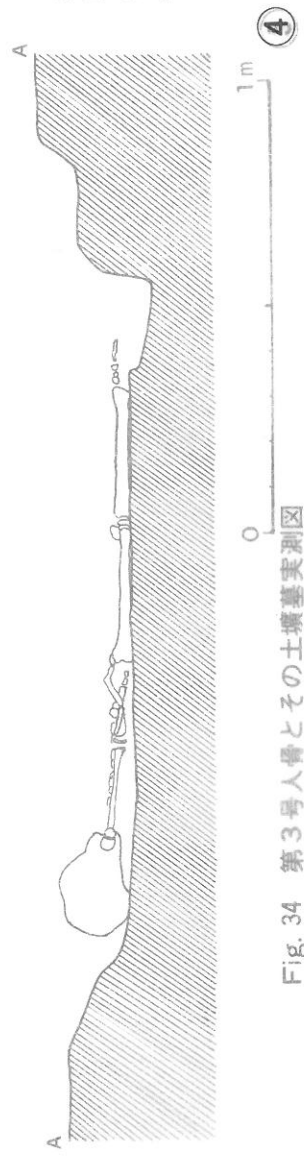


Fig. 34 第3号人骨とその土壌墓実測図

を得ている。

## 第5章 出土遺物

土器・石器・骨角器の人工遺物と、貝類・獣骨・魚骨・植物種子の自然遺物に分け、以下順を追って紹介していこう

### 第1節 人工遺物

#### I. 土器

土器は、約1500点出土しているが、その主体は縄文土器で、若干弥生、土師質土器が含まれている。縄文土器は後期中葉の平城式が中心をなし、それに瀬戸内の晩期後半黒土BⅡ式(岡山県笠岡市高島黒土遺跡標式)、西四国の後期後葉伊吹町式(愛媛県宇和島市伊吹町遺跡標式)、同広瀬上層式(高知県幡多郡十和村広瀬遺跡標式)、同片粕式(高知県土佐清水市片粕遺跡標式)、同後期前葉宿毛式(高知県宿毛市宿毛貝塚標式)、瀬戸内の中期前葉船元式(岡山県倉敷市船元貝塚標式)、九州の前期初頭轟B式(熊本県宇土市旧轟村宮荘貝塚標式)、早期中葉の押型文土器等を少量見る。

#### 押型文土器 (Fig. 35)

C-2区最下層の黄褐色粘質土層にて検出されたもので、平城貝塚に出土の縄文土器では現在最古を示す。長さ2.2cm、幅1.7cm、厚さ0.5cmの細破片で、緩く外反する断面形から口縁部付近の破片と思われる。器表には、縦位に押捺された山形文がかすかにみられる。山形文の波長は、若干間延びしたものである。色調茶褐色、焼成不良で器質は脆い。胎土に細砂と少量の金雲母粒を混入している。

#### 轟B式土器 (Fig. 36-1, PL13)

A-3区第1号人骨土壙墓床面の黄褐色粘質土層最上部に出土している。深鉢形の口縁部破片1点で、器厚0.5cmを前後し、口縁器形は平縁で直行に近い。器表には、本式で特徴の貼付細隆起帯文が口縁に平行し、1.5cm間隔で3段にわたり施されている。隆起帯文の上には、貼付けの際つまんだ指頭圧痕を明瞭に残している。色調茶褐色、焼成良好で器質は堅い。

#### 船元式土器 (Fig. 36-2~4, PL13)

3点の出土で、2はC-2区貝層下の茶褐色粘質土層上部からの出土、3はE-4区

で平城式に混在して出土し、4は表採である。

大粒で荒い斜行縄文を地文とする2は、低目の貼付け凸帯を曲線状に描いて、その上に爪形文の付けられたものである。本来の器形は、キャリパー状口縁の鉢形を呈していたものと考えが、本資料は、その口縁部付近の破片である。凸帯の曲線文は、口縁を波状にめぐらされていたものと思われる。器厚0.6cmで、断面形は緩く内弯を示している。3は、口縁が直行し、平縁となる深鉢の口縁部破片で、器表には、刻み目を持つ縦位に垂下する凸帯と、口縁に平行する3段の凸帯、それに凸帯の付けられてない面には数条の沈線が描かれるなど、中期土器として特異な様相を呈する。器厚は0.8cmでやや厚手である。4は、断面形が緩く内弯し、器表にはC字状の幅広な爪形文が連続して施され、爪形文の中にわずかな隆起を作るものである。

これらの船元式は、その特徴から厳密には2が船元Ⅰ式A類、3・4は、共に船元Ⅱ式A類に該当する。なお、これらの色調は、黄褐色、灰褐色、黒褐色で、胎土に大粒砂を含み、器質は堅緻。

#### 宿毛式土器 (Fig. 36-5・6, PL13)

深鉢の胴下半部と、蓋形土器の2点である。共にB-2区貝混土層下部からの出土で、その出土状態はFig. 29に示したとおりである。

5の胴下半部は、現存する資料からの復原によると、本来の器形が、胴張りの弱い単調なものであったことが知られる。器表には、宿毛式で特徴の2本沈線を基調とする文様が横位に流れるように描かれ、その文様帯は、底部近くまで及んでいる。沈線の末端では、入組文を形成するが、沈線の溝は浅く、筋も細い。沈線間の縄文帯幅も幅狭である。もちろん文様は磨消縄文手法である。縄文原体の撚りはRLで、器厚0.8cm、黒褐色で器質は堅い。宿毛式第1類に該当する。

6の蓋形土器は、本例外に、周辺地域では高知県片粕遺跡の後期初頭中津式(下益野式)に1例みるのみで、他遺跡からの出土はほとんどなく極めて稀な資料。上面観は、中央部で凹んだ円盤状を呈し、傘状に広がる部分との境いには1条の沈線がとり巻き、

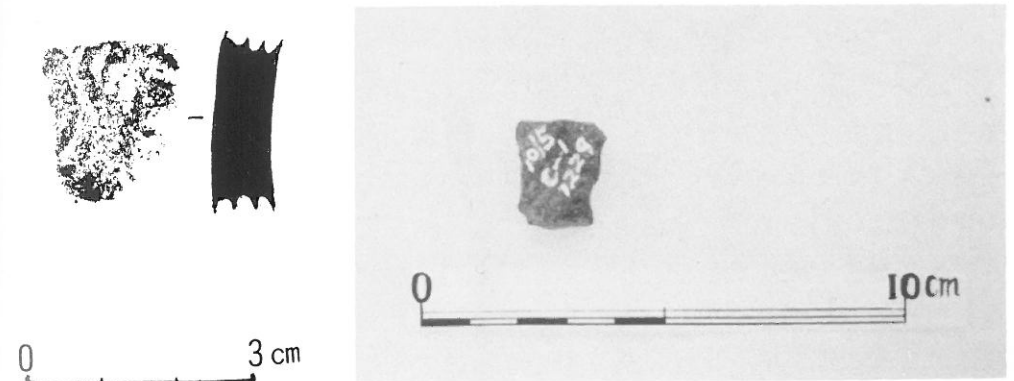


Fig. 35 押型文土器拓影

ちょうど、この部分がくびれて把手の摘み部を形作っている。文様は、把手上面の中央部に円文をおいて周辺を1条の弧線文を連続4条描き、さらに縄文帯の中を短直線でうめて構成する手の込んだものである。文様部は磨消縄文手法である。

傘の部分は、大方が破損し、大きさ形状とも明らかでないが、一部の残存個所からみて、この個所も2条単位の沈線文様と磨消縄文手法で、全面飾られていたことが推測される。把手部直径5.5cm、色調は茶褐色である。

#### 平城式土器 (Fig. 36~Fig. 44)

今回の出土縄文土器では数量が最も多く、全体の80%をしめる。それらは既述のように総てが僅か層厚10~20cmの混土貝層、混貝土層からの出土である。土器は従来のものと大きく変わるものではないが、ただ今回出土のものについては、平城式第2類土器と呼ばれていたものが半数以上をしめ、強い特色となっている。それらの平城式土器を器形、文様の特徴から第1群~第6群に分けて紹介する。

#### 第1群土器 (Fig. 36-7~20, PL13)

磨消縄文手法で、器面の研磨された精製品である。量は少なく、破片も従来のものに比べ小さい。主にD-0区~D-2区の貝混土層からの出土である。器形は、深鉢、浅鉢の二種がある。前者は、緩やかな波状で、頸部が大きく外反し、胴部のふくらむもの(a)、口縁が内斜し、肩部で「く」字状に内折する(b)、頸部が短かく口縁が「く」字状に強く外反するもの(c)などがある。

(a)・(c)は、共に頸部に橋状把手を持つものを多く見るが、後者は、口縁から緩やかに内曲して底部へと移行する単純形を呈し、平縁を原則とする。

文様は、深鉢では橋状把手を持つものと持たぬものとは、特に口縁でそれが若干異なる。把手を持たぬものでは、波状口縁の頂部にS字状文を描き、表面に短直線を縦位に数列めぐらすもの、それが弧状を描いて同心円状となるものなどであるが、その左右には一条の沈線が描かれる。また、それら文様直下の頸部には、胴部から連続する二条の沈線で半弧状に大きな入組文が必ず描かれる。把手を有するものでは、口縁に描かれる一条の沈線は、把手部へとそのまま流れて、その個所で入組文を形成する。中には縄文だけのもの、それに一条の沈線を加えたもの、竹管を押捺したものなどもある。ただし(c)タイプでは、口縁部の幅が狭くて、S字文のみで短直線は描かれてない。

胴部では、橋状把手を持つもの、持たぬもの、波頂部直下の位置で、左右からの2本沈線で大きな三角文を曲線的に描き、その区画中央部で渦巻入組文を形成する。Fig. 36-7・9~11は(a)タイプ、8は(c)タイプの深鉢口縁部の一部破片、12~16・19は、前者の胴部文様帯の破片である。Fig. 36-17は、深鉢(b)タイプは、今回初めての出土である。口縁形状が明らかでないが、文様帯を口縁から胴部へと幅広く持っている。その文様は、2本沈線を尾っぽ状に長く引いて、その末端で大きな渦巻入組文を描く構成をとっている。

Fig. 36-19は、三角状に曲線で描く区画内中央を大きな渦巻文で飾る構成をとるが、

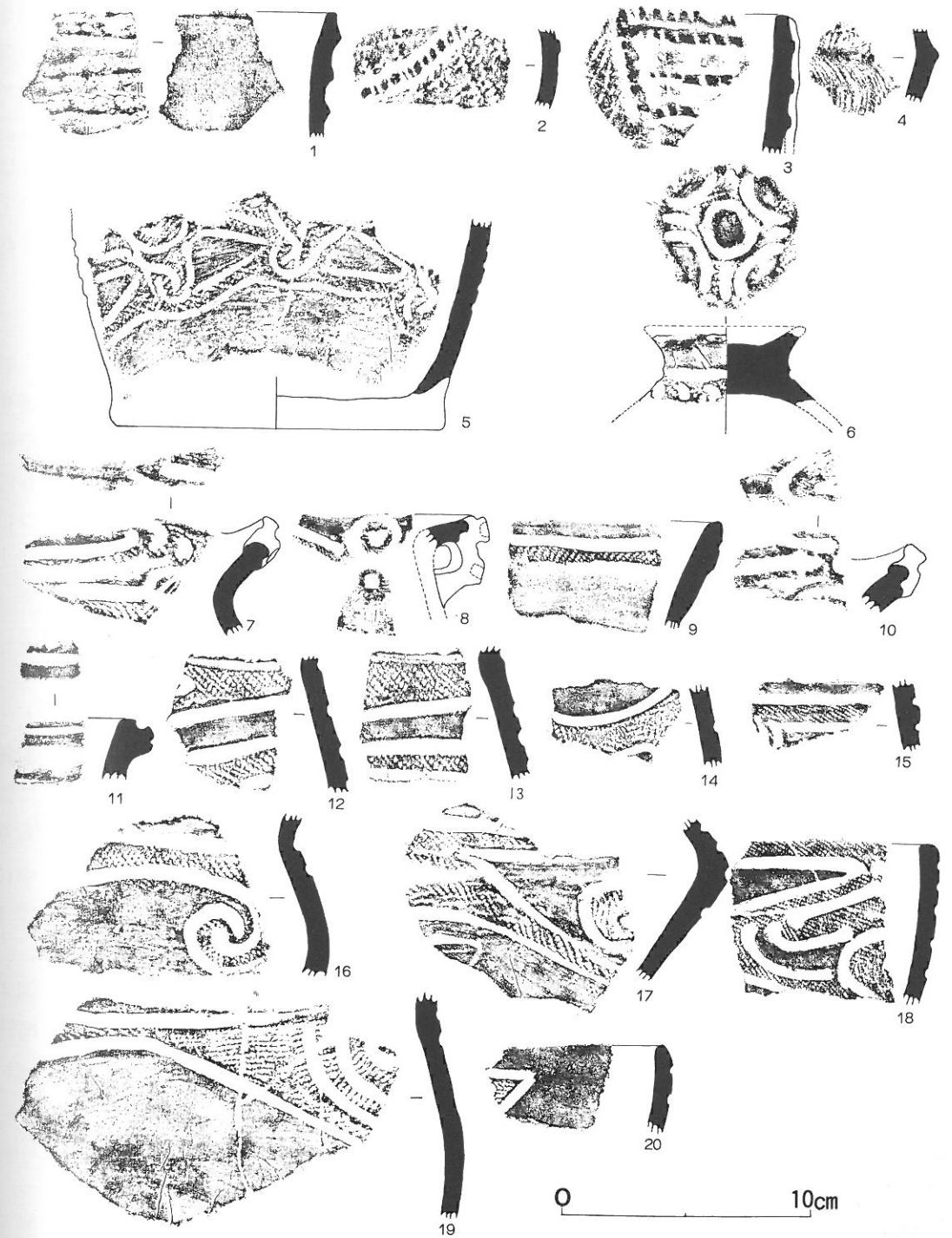


Fig. 36 轟B式・船元式・宿毛式・平城式第1群土器拓影



文様は、縄文地に直接描き、文様部外は研磨された、いわゆる次に記す第2群土器との折衷的な様相を呈している。

浅鉢の文様は、2本沈線で口縁部を幅広く展開している。比較的、複雑な文様構成をとるが、部分的には大きな渦巻入組文を描いている。Fig. 36-18・20は、浅鉢の口縁部分であるが、前者のように極めて単純な文様構成となるのが浅鉢文様の特徴である。今回の資料には見られぬが、口縁内面に一条の沈曲線文様の描かれるものもある。これらは、いずれも粒子の細かい粘土を用い、黒雲母粒を多く含むものもある。焼成は良好で、淡褐色、黒褐色、茶褐色を呈し、器厚は0.8cmを前後する。なお、7・11・14・20は、器面に赤色顔料を施している。縄文原体の撚り方向は、9がLRで、他は総てRLである。

#### 第2群土器 (Fig. 37, Fig. 38, Fig. 39-1~22)

縄文地に直接文様を描くタイプで、同心円、渦巻文など、文様を口縁、胴部に持つ、いわゆる縁帯文土器の仲間である。数量が最も多く、今回出土の平城式の中では主体を成す。出土は各区に見られるものの、特に良好な資料をD-4・D-5・E-4区で見ている。沈線の太さは第1群同様、宿毛式の倍ほどの大きさで、器面の研磨されたもの、橋状把手などは一切本群にはない。それらは細かな文様の特征からa類、b類の二つに分けられる。

#### a類 (Fig. 37-1~14, Fig. 38-1~12, PL14~17)

全体的な文様構成は、次のb類と大差ないが、ただ本類にはb類では見られぬ頸部に特徴的な文様を有する。

器形は、緩く外反する頸部から、胴上半部で膨らみ底部へと続く深鉢 (Fig. 37-1・3~14, Fig. 38-1~10) と、口縁から緩く内曲して底部へと接続する単純形の浅鉢 (Fig. 37-2・Fig. 38-11・12) がある。共に口縁形状は平縁と波状口縁があり、特に口縁外側を分厚く肥厚さす特徴を持つ。口縁端は尖がるものと平坦面を作るものがあり、深鉢、浅鉢とも口径は、直径30cmを越すものが多く、器形は総体的に大形である。中には直径19cmの小形品 (Fig. 37-14) もみられる。器厚は、口縁肥厚部で1.5cm、胴部で0.8cmを前後する。

文様は、深鉢では口縁肥厚部に同心円あるいは「く」字状に曲んだ曲線文を左右3個ずつ対向させて、やや幅広な文様集約部を作り、その左右には「c」状、ひしゃげた長楕円文を描き構成する。特徴的な頸部文様は、口縁集約文直下にそれを見る。頸部を縦位に5本並べ左右の1本ずつが、下端で隣の同じ頸部文様へと一条の沈線で連結している。中には、上端がそれとなる例 (Fig. 38-1~3), 短直線が曲線文となっているもの (Fig. 38-4・8~10) なども見られる。

胴部では、頸部との境いに一条の沈線を描いて、その下に二条の沈線で垂下する逆三角形文を描き、幅狭な中央区画をU字状文で埋めて、さらにその外周を一条の沈曲線で囲み連続波状文を構成している (Fig. 39)。



Fig. 37 平城式第2群a類土器拓影

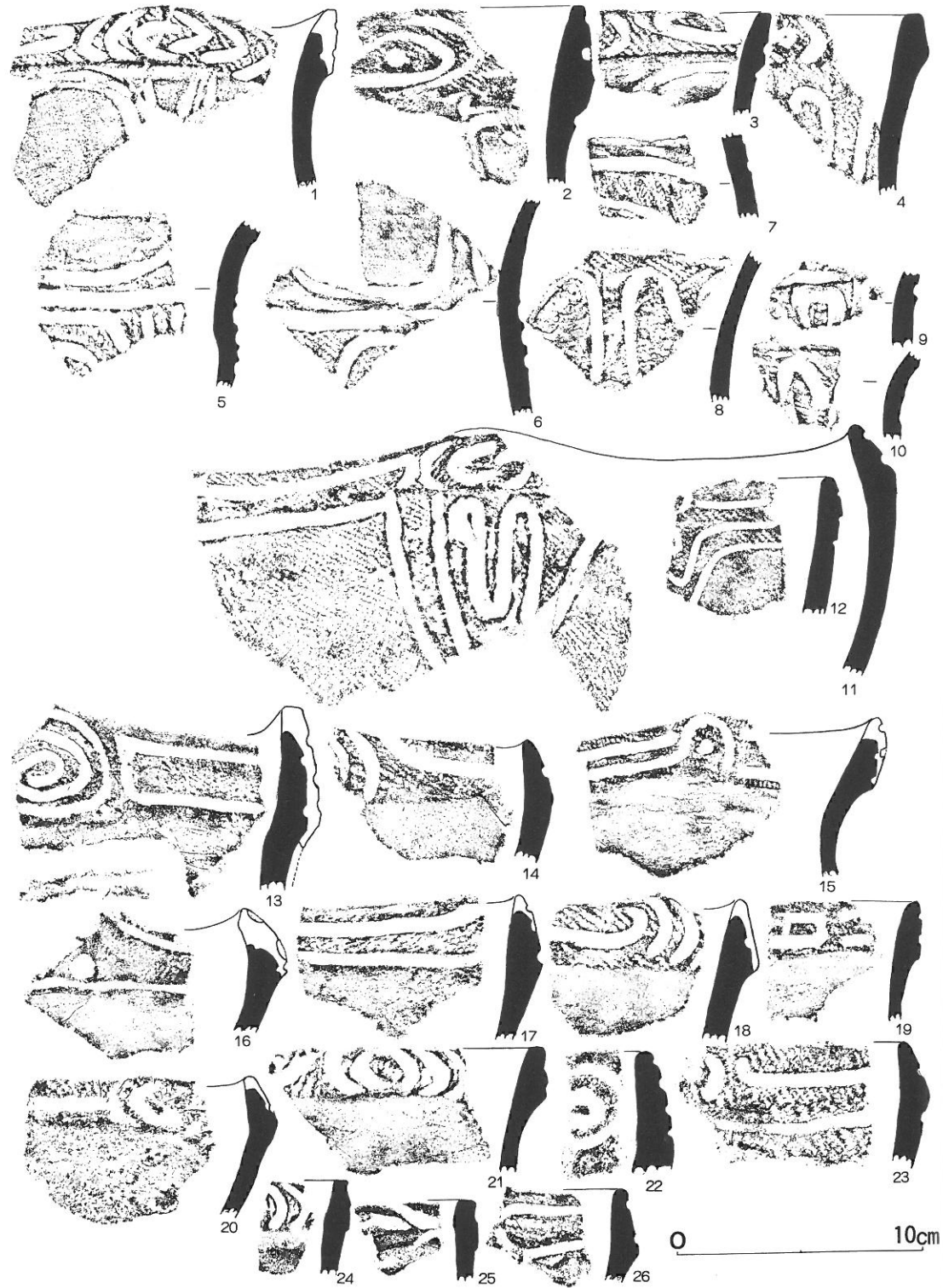


Fig. 38 平城式第2群a・b類土器拓影

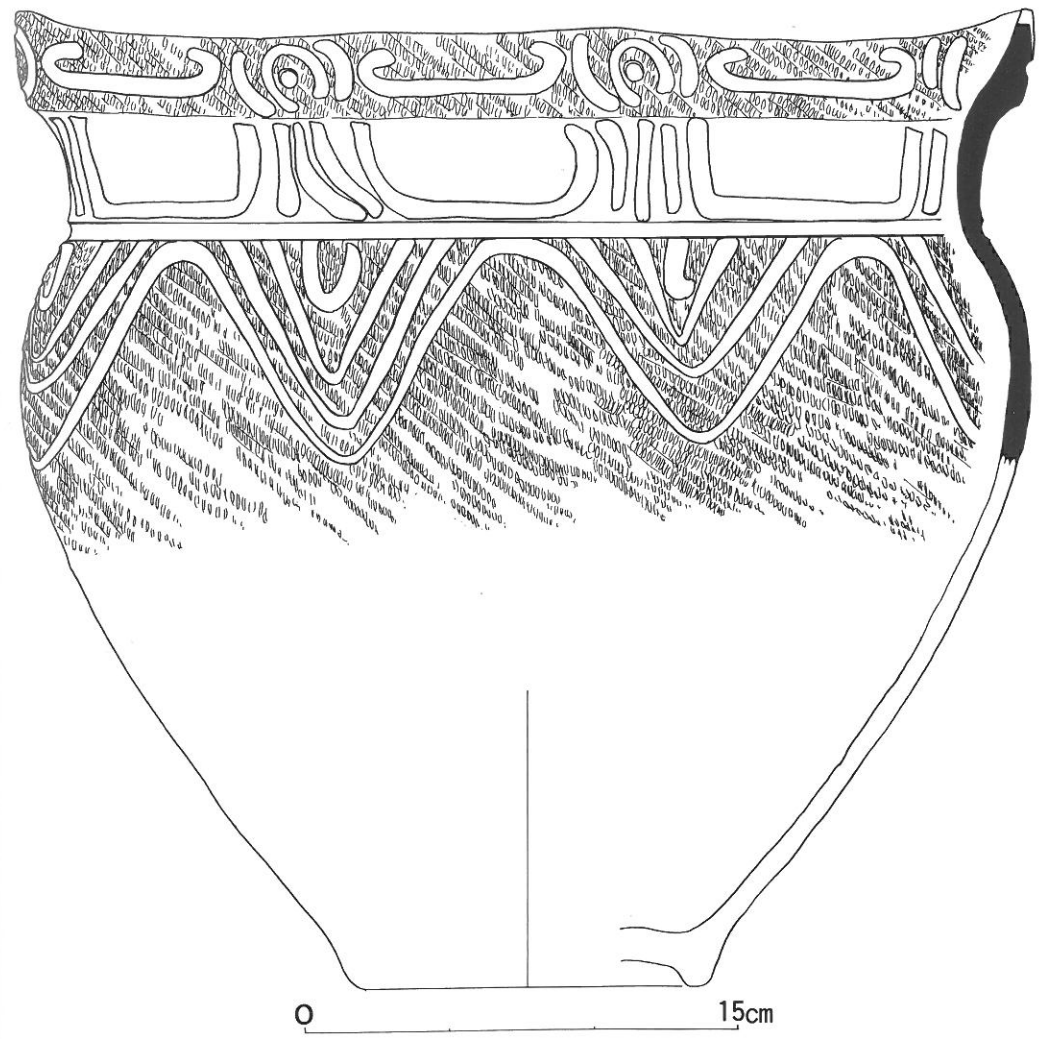


Fig. 39 平城式第2群a類土器深鉢実測図

Fig.37-14, Fig.40 深鉢は、頸部文様直下に大きな同心円文を描き、その左右に2段重ねの長楕円文を横帯状に描いて構成している。同心円文は、胴部の4個所に描かれ、波状口縁の頂部は、4個所の内、2個所が一段と背が高く、その部分での集約文様は、長楕円文の末端で釣り針状に描かれた文様と、その上下端に半円文を共に対向させてそれとしている。

浅針の文様(Fig.41-2)も、口縁部では深鉢同様、同心円文あるいは「く」字状曲線文を対向させて文様集約部とするが、その両側には口縁に平行する一条の沈線が末端部で鉤状となって描かれている。口縁の文様集約部直下には、二条の沈線で大きなU字状文が描かれ、その外周の沈線が口縁に平行する一条の沈線に連結して深鉢同様の連続波状文を構成する。中には、口縁に平行する二条の沈線が、口縁文様集約部の直下で、そのまま垂下して長目のU字状文を形作るものも含まれる(Fig.38-12)。

b類 (Fig.38-13~26, Fig.43-1~22, PL18)

口縁、胴部文様はa類に一致するものの、頸部は完全無文である。器種は深鉢のみで、平縁、波状口縁共にあり、口縁外側を肥厚させ、緩く外反する口縁端は尖るもの、平坦なもの両者がみられる。口縁文様帯には、同心円文、渦巻文、縦位の短直線対向文を文様集約部とし、その左右には二条の沈線が末端で直角に折れて長方形となるもの、一条の沈線が先端で鉤状に曲げられているもの、三条の沈線を描くものなど変化に富む。稀には、口縁内面に縄文帯を持ち、それに一条の沈線が描かれるもの(Fig.42-17)も見る。また口縁を幅の狭い縄文帯のみで飾るもの(Fig.42-15)なども含まれている。胴部文様は、a類深鉢同様、逆三角文様外周を一条の沈線で囲んで連続波状文を構成する(Fig.41-1)。口径は、24cmでやや小形である。Fig.42-21・22は、胴部文様帯の断片で、その文様の一部が見られる。

以上の第2群土器の縄文は、総体的に粒子が荒く、撚り方向はRLを主体とする。ただしFig.37-13・14, Fig.38-15・19は、第1群土器では見られぬヘナタリ貝による貝殻疑似縄文で、本群土器の特徴の一つにあげられる。色調は、茶褐色、黒褐色を呈し、胎土に砂粒、石英粒、金雲母粒を含み、焼成は良好である。

第3群土器 (Fig.42-23~31, PL19)

口縁に刻み目を有するものを一括した。その資料は少ない。器面は条痕仕上げのものを主体とし粗製である。

器形は、口縁が緩く外反する深鉢で、平縁が多くて波状口縁は少ない。胴部は無文である。刻み目は、幾分か肥厚された口縁端に施されるもの(Fig.42-24・27~29)と、外側を肥厚させた側面に施文される(Fig.42-23・25・26・30・31)の二種が見られ、後者の中には刻み目が長目に引かれる25のようなもの、口縁に平行する一条の沈線下に描かれる30、「ハ」字文を横位に連続的に描く23など変化に富む。これらの刻み目は、総て左側に傾斜する。暗褐色を主とするが、中に赤褐色のも少数見られる。

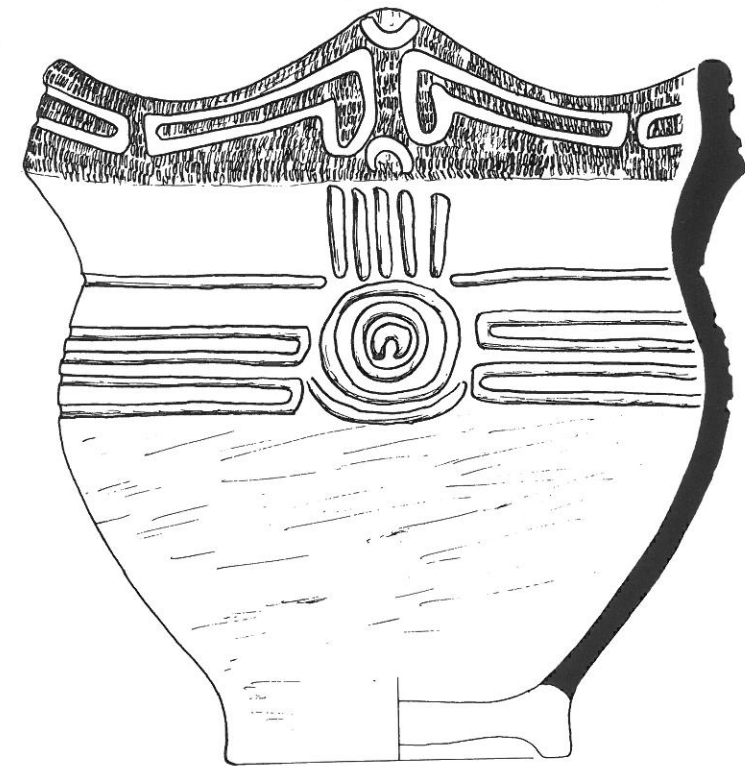
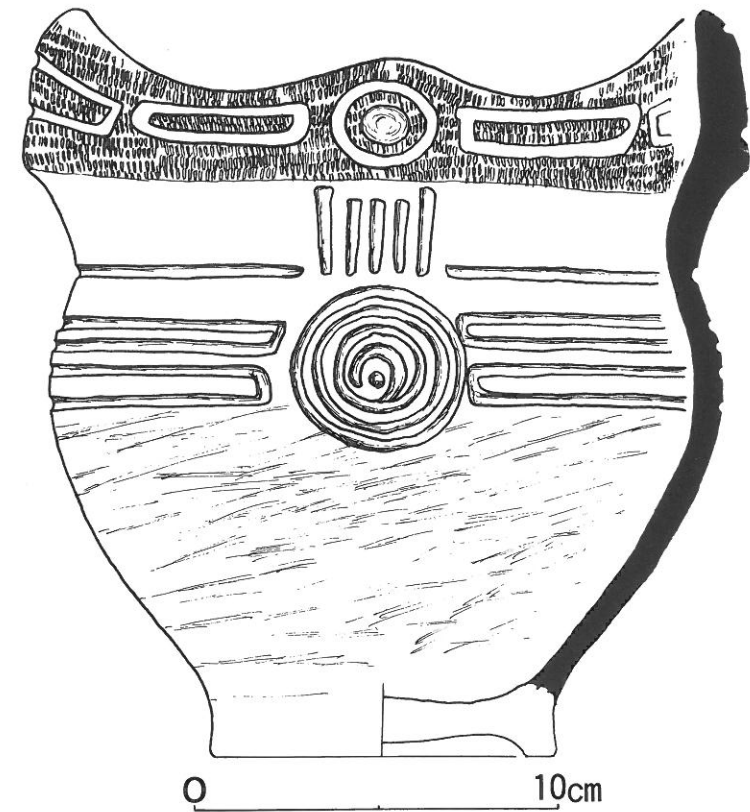


Fig. 40 平城式第2群a類土器深鉢実測図

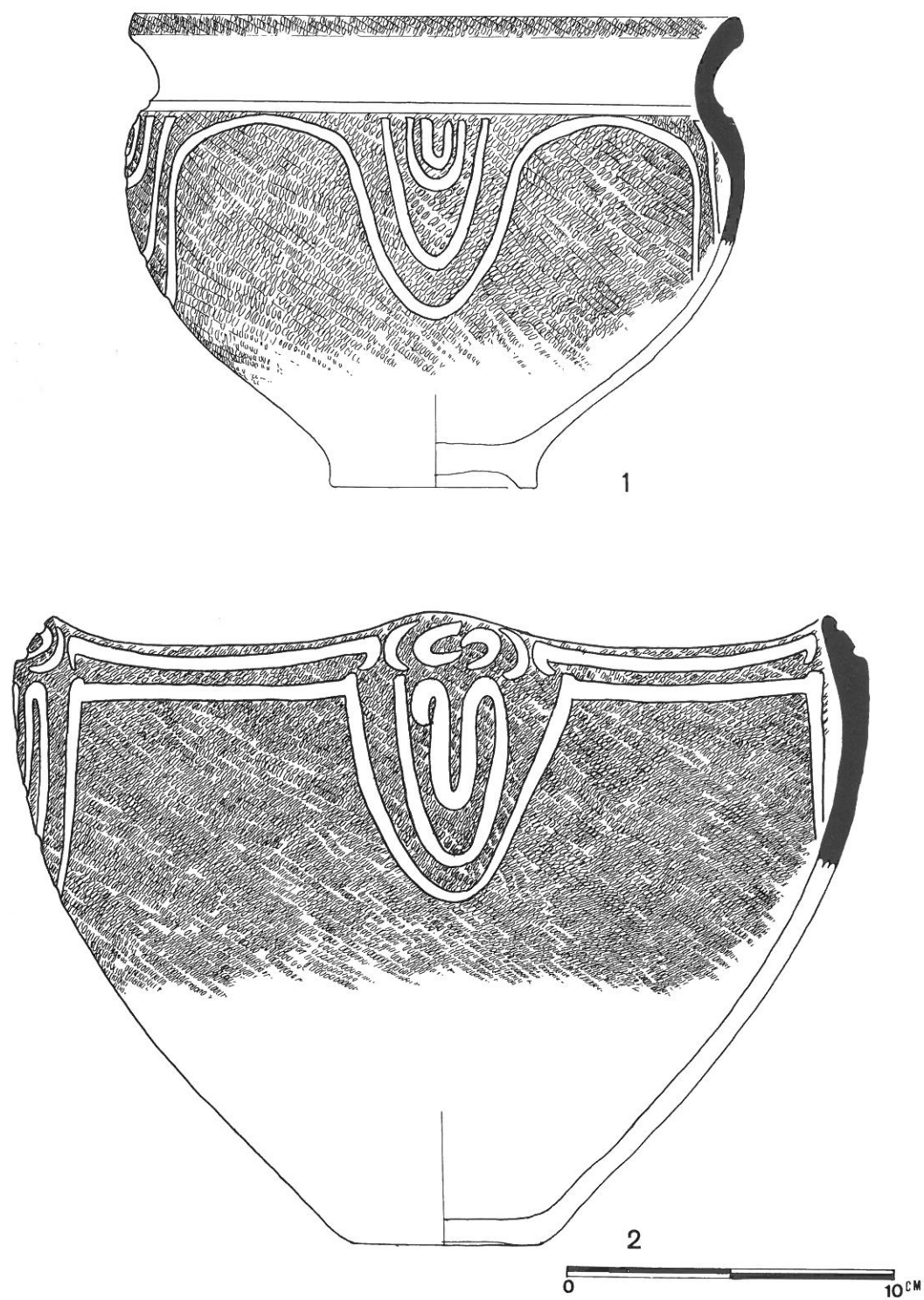


Fig. 41 平城式第2群土器a類淺鉢(下), b類深鉢(上) 実測図



Fig. 42 平城式第2群b類, 第3群土器拓影

第4群土器 (Fig.43-1~17, PL19)

縄文を口縁、胴部に横帯状に施文するものである。

器形は、外反する無文の頸部から胴上半部で幾分か膨らむ深鉢と、口縁が緩く内弯する浅鉢があり、口径は20cm前後の小形品が多い。口縁は平縁を主とし、波状口縁は極めて少ない。それらの口縁部外側は、若干肥厚する。縄文は、大粒のものと小粒があるが、その割合は前者が勝り、撚り方向はRLを優先する。羽状縄文となるもの、口縁内面に縄文帯を持ち、それに一条の沈線を加えて飾るもの、口縁端に縄文を加えるものなどがあり、貝殻疑似縄文となっているもの1・2も若干含まれる。口縁端は、丸味を持つものと平坦面を作るものがあり、黒褐色、赤褐色を成し、胎土に金雲母粒を混入するものを多く見る。

第5群土器 (Fig.43-18~34, Fig.44-1, PL20)

条痕・無文土器である。その数量は少ない。

器種は、深鉢と浅鉢があり、頸部は前者が大きく外反するもの、直行に近いもの、外斜するもの、緩く外反するものなどで、後者は、「く」字状となるもの、外斜するもの、緩く内弯するものなどである。口縁端は平坦面を作るものと丸味を持つものがあり、外側を心持ち肥厚さすものを多く含む。口縁器形は、平縁と波状口縁共にあり、口径30cmを越す大形品が数の上では勝る。貝殻条痕は、器表を浅く横走するもの、左上から右下に斜行するものなどで、それのないものには28に見るように研磨されたものを稀に見る。

34の浅鉢は、口径12cm、高さ6cm、底径5.5cmの小形品で、口縁端に山形の突起が作られている。表面は平滑、内面は整形時の指頭圧痕を部分的に残している。胎土に石英粒、金雲母粒を混入し、焼成は良好で器質は堅い。暗褐色、淡褐色を成す。

底部 (Fig.44-2~12, PL26)

合計11点出土している。表面の研磨されたものはなく、総て粗製で、上げ底を主体としそれに若干平底に近いものを混えている。

2・12は、共に底部の外周に角がなく、丸く曲線を描いて底面へと移行するが、底面中央部に向うにしたがいかすかに上げている。前者は、C-4区で出土をみたもので、今回出土の中では最大を示し、底径16cmを測る。たぶん本来の器形は浅鉢となるものであろう。表面は平滑で粒子の細かい粘土を使用し、色調は淡褐色である。

上げ底は、底径13cmを最大とし、10cmを最小としている。6・10は、高台を持たぬが、底面中央部は明らかに上げている。以上の底部は、その色調、土器質、粗製であることなどから、その大方が第2群土器に伴うとみて大過ないであろう。なお、平城式土器片の中に円盤状に調整された用途不明の土器片1点 (Fig.44-13, PL26) がE-4区に出土している。大きさは長径4cm、短径3.7cm、厚さ0.6cmで薄手の無文である。表裏とも平滑で色調黒褐色である。表面の2箇所不整形の浅い圧痕が残されている。外周は、打ち割った面をそのまま残すものである。

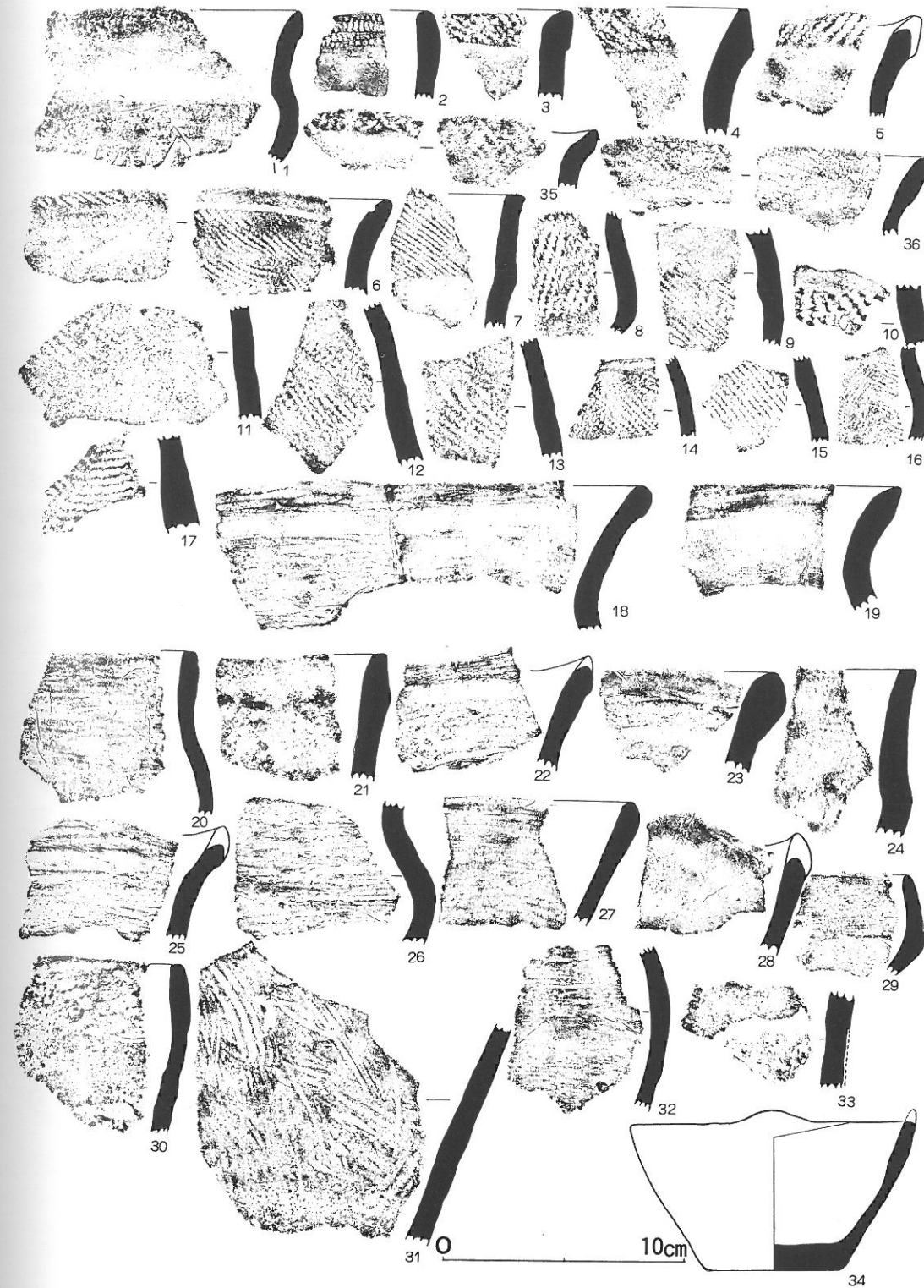


Fig. 43 平城式第4群, 第5群土器拓影

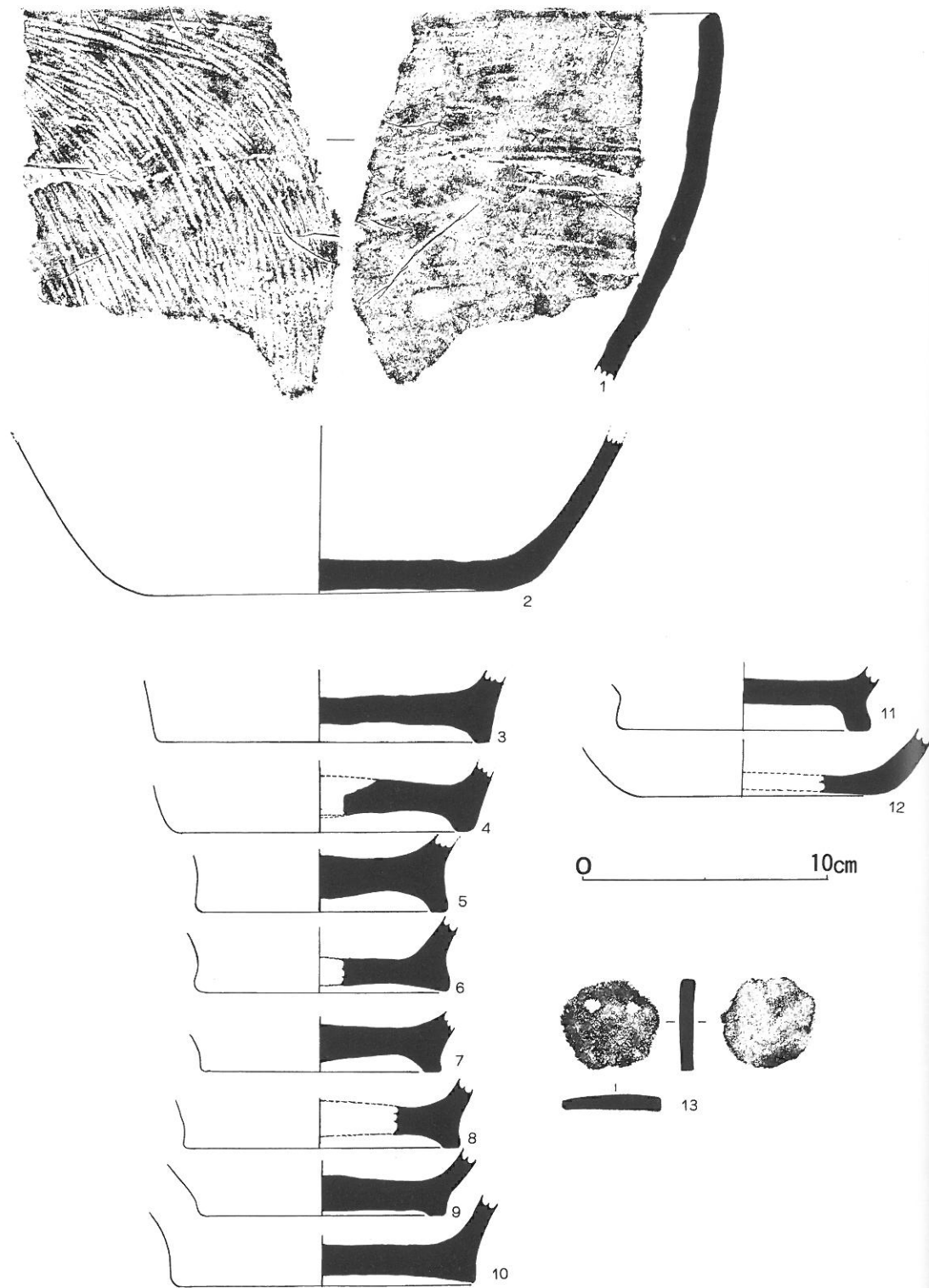


Fig. 44 平城式第5群土器拓影及び底部，円盤状土器片実測図

以上の平城式は，第1群が従来の分類で第1類に，第2群が第2類に，第3群が第4類，第4群が第5類になされていたものである。

片粕式土器 (Fig. 45-1~11, PL22)<sup>註4</sup>

今回の発掘地域からの片粕式土器の出土は極めて少ない。図示している資料は，C-2区・C-4区・C-5区に出土のわずかなもので，土器片も小さく良好なものはない。

本式土器は，口縁に平行直線と波状文を，胴部は数条の斜行沈線を三角形状に描き，その区画内中央にはS字文をアクセントとし，波状口縁頂部には横S字状，蛇行状の粘土紐貼布文を見る。特に文様手法は，縄文地に直接描くのを特徴とし，縄文の撚りはR，L，LR共にあるものの割合は後者が勝る。色調は，赤褐色，黒褐色をなし，胎土に金雲母粒を多く混入する。器形は「く」字状口縁から無文の弓状に外反する頸部と，胴上部で緩く膨らむ深鉢を主体とし，少数の浅鉢が伴う。口径30cmを越す大形品から，高さ10cm未満の小形品まであり，口縁形状は平縁，波状口縁共にある。

1~5・7は深鉢の口縁部片で，その中の1は，波状口縁となる器表の縄文地にS字文を中央に大きく描き，左右の沈線末端には縦位の短直線を描いている。口縁頂部には粘土紐貼布文がある。片粕式b類に該当する。

2~4は，平縁をなすもので，前二者は，三条描かれた沈線の内一条が波状となり，後者は，二条の内一条がそれとなっている。口縁端は肉厚く丸味を持っている。これら

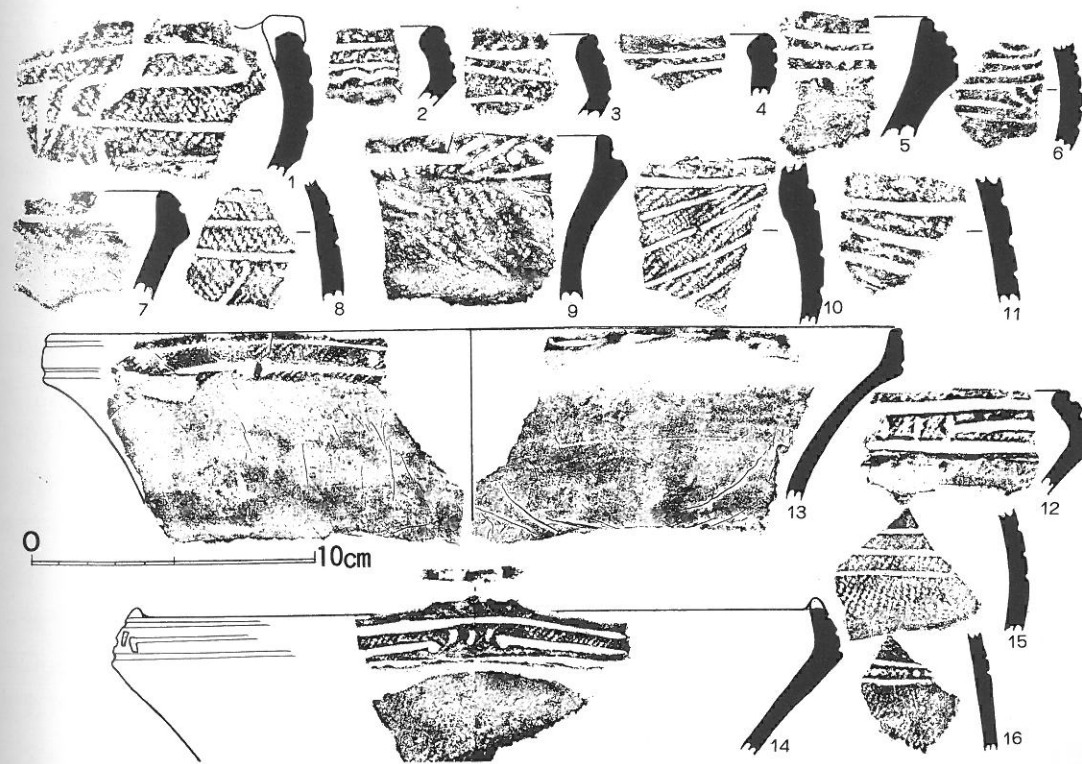


Fig. 45 片粕式・広瀬上層式・伊吹町式土器拓影

は片粕式 a 類に該当する。9 は、縄文地に直接文様を描き、縄文は頸部にまでわたっている。平城式第 2 群とすべきものかもしれない。ただ弓状に外反する頸部と「く」字口縁の形状からはこの時期のものと考え、ここで取り扱った。8・10・11 は、胴部文様帯片で、縄文地に三角形となる斜行沈線の一部が見られる。

#### 広瀬上層式土器 (Fig. 45-12~14)

表採品で数は少ないが、その資料は良好である。本式土器は、片粕式と伊吹町式土器の中間に編年位置付けられ、器形、文様構成には両者の要素を随所に見る。全体的には伊吹町式に近接するものである。

資料は総て深鉢の口縁部片で、器肉は 0.5cm を前後し薄く、「く」字状口縁は片粕式に比べ小さく華奢にまとまり、頸部は長く弓状に外反する。12・13 は、平縁で、器表には二~三条の平行沈線を縄文地にそのまま描き、沈線末端では、縦位の短直線 3 本を対向させて文様集約部を作っている。前者の口縁内面には、片粕式で特徴とする横に長い列点文が付けられている。後者は、口縁端が丸味をなし片粕式の器形を残存する。14 は、緩い波状口縁で、その頂部には横 S 字状のくずれた粘土紐貼布文を見る。器表には三条の平行沈線が描かれるが、これもその末端で縦位の短直線 3 本を対向させて文様集約部としている。その位置は波頂部直下である。色調は赤褐色、黒褐色、表裏は平滑で研磨されたものも多い。胎土は粒子の細かい粘土が使用され、砂粒、金雲母粒を混入し、器質は堅い。縄文は小粒で総て LR である。なお、本式土器の胴部は、上半部で緩く膨らみ、その部分を文様帯として、平行横直線と傾斜の緩い山形文を描いて構成するものである。

#### 伊吹町式土器 (Fig. 45-15・16, Fig. 46-5~7, PL22)

深鉢と浅鉢があり、前者の形状は口縁が「く」字状に内折し、弓状の頸部から上胴部で緩く膨らむものである。後者は、口縁が曲線を描き強く内折するものと、緩く内曲し、そのまま底部へと移行する単純形のものである。深鉢は、平縁と波状口縁の両者があり、浅鉢は平縁のみである。

波状口縁の頂部は V 字状の切れ込みを有し、口縁端は尖り気味となる。文様帯は口縁と胴上部に平行直線を主に横帯状に描いて構成する。縄文地に直接描くものが多く、磨消縄文手法のは極少。また無文となるものもある。文様帯の中には、C 字文や、それを背中合わせとした X 文、小粒、長目に引かれた列点文、沈線末端で縦位の短直線を対向させるなどの文様が描かれる。短直線対向文は口縁部に、列点文は頸部と胴の境目や、沈線の溝の中、X 文は、胴部文様帯の中にその多くが施されている。

Fig. 46-5~7 は、平縁の口縁部片で、5・7 は薄手で口縁の立ち上がりは小さい。器表には三条の細い平行沈線が描かれ、沈線末端では短直線対向文が見られる。この短直線も広瀬上層式からは一段と小さく萎縮している。文様は磨消縄文手法となり光沢を有する。口径 16cm 前後を測る小形品。6 は、黒褐色を呈し、器面がザラザラで無文。口径 24cm である。Fig. 45-15・16 は、器厚 0.6cm の胴部文様帯で、縄文地に筋の細い線で

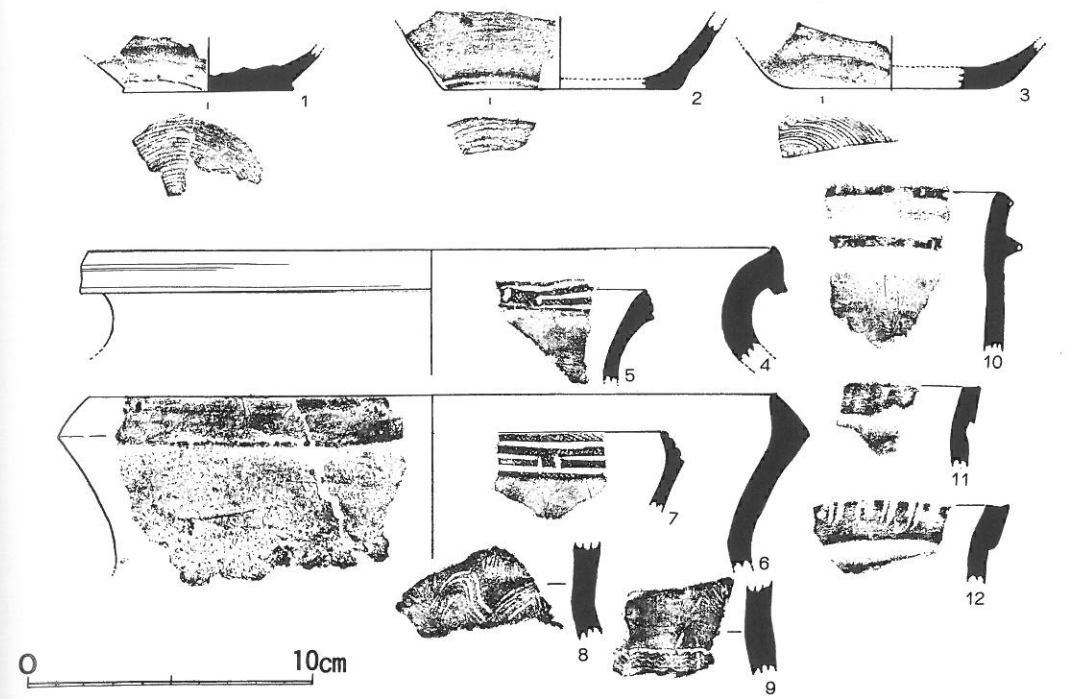


Fig. 46 伊吹町式・黒土 B II 式・拝鷹山式・石丸式・土師質土器・常滑陶器拓影実測図

平行横直線文が描かれ、16 には沈線間に列点文を加えている。

#### 黒土 B II 式土器 (Fig. 46-10, PL22)

貼り付け凸帯文を有する深鉢の口縁部破片である。D-5 区でただ 1 点表採されている。口縁は直行に近く、凸帯は断面三角形で背が高く、その位置も口縁端から少し下った部分に設けられている。表面の刻み目は、凸帯上と口縁端側面に小さく施文されている。色調黄褐色で、焼成はあまりよくない。器厚 0.6 cm である。なお本土器は、今の所平城貝塚における縄文土器中、最も時期の新しいものである。

#### 弥生式土器 (Fig. 46-8・9・11・12, PL22)

後期前半の土器片で、D-5 区にて 4 点表採されている。8・9 は甕形の頸部片。器表には細密な刷毛目痕と、その上に楕円波状文が波長の大小変化をつけて横位に描かれている。淡黄色で焼成は良好。宇和島市拝鷹山式に該当するものである。

11・12 は、共に甕形の口縁部片で、口縁を二重に折り返した複合口縁である。11 は無文、12 は篋による刻み目が施されている。色調黒褐色で焼成は不良である。高知県西南部に本拠を置く石丸式である。

#### 歴史時代遺物 (Fig. 46-1~3・4, PL22)

土師質土器と常滑陶器片を出土している。前者は 3 点の出土で、1 は B-3 区、3 は C-3 区で混貝土層から、2 が D-0 区混貝土層に出土し、総てその上部からである。

1 は小皿、2・3 は坏で、口縁部を破損している。器面は平滑に仕上がっているが、1 のみ内面に回転ナデの痕が残っている。なお、底部の切り離しは、1・3 が糸切り、

2は篋切りである。共にその痕を底面に明瞭にとどめている。後者は1点で、甕の口縁部。器面は、本来の色調を失ない灰色にさらされている。口縁器形から、その時期を室町初期と考えてよいであろう。

## II. 石器

石器は、土器の出土割合に比べ少なく、わずか22点の出土にとどまる。これを名称別に分類すると、打製石斧4、円盤状石器1、石材核1、石錘3、叩石7、スクレイパー2、石鏃3、石皿1となる。磨製石器は1点も含まれてなく、叩石が数量の上で最も多い。姫島産黒曜石剥片4点の出土にも恵まれているが、特に今回の調査では、従来みられなかった九州佐賀県腰岳産の墨色を呈する黒曜石製石器1点が見られる。これらの出土地区、層位については第3表にまとめたとおりである。

### 打製石斧 (Fig. 47-1~4, PL23)

形態別には短冊形のもの、刃部が扇状に幅広くなった撥形の二つに分けられる。短冊形1は、側面に打瘤を残す大形、分厚な横剥ぎ剥片から作られたもので、打ち欠きによる調整は周辺部のみで、中央部に第一次剥離面を幅広く残す粗製品。刃部に使用痕は認められない。長さ9.5cm、幅7.3cm、厚さ1.9cm。

撥形は、2が分厚な剥片から、3・4は大形円礫を素材とする。前者は、長さ7.4cm、幅6.6cm、厚さ1.9cmの小形品で、調整加工は、周辺全面にわたっており、大きな剥離痕を表面いっばいに残している。刃部は鋭利である。

後者は、母岩の少し尖り気味となった頂部を1回の打撃で剥取した極めて分厚な、大形剥片利用のもので、剥片は形状が三角形となり定形化している。刃部は、幅広い鋭利な縁辺をそれとする。なお、これらは形状、大きさからして柄を付けての使用を考えると、手持ちで使われた握斧とみなされるものである。共に片面に礫皮を、一方の面には第一次剥離面をそのまま残している。3の刃部は使用によって丸味をなし、鈍端となっている。長さ8.4cm、幅10.2cm、厚さ2.2cm。4は、刃部が片面加工で、鋸歯状に作られ鈍端である。長さ8.8cm、幅10.9cm、厚さ3.6cm。

### 円盤状石器 (Fig. 47-5, PL23)

自然の扁平礫から作られたもので、打ち欠きは周辺部のみ認められ、確かに円形に調整されている。縁辺部は、打製石斧一般にみられる刃部と同様の形状を呈している。片面は、自然礫の緩やかにふくらむカーブを中央に残すが、一方の面は剥離加工が行きとどき水平となっている。表面は風化が目立ち、肌も荒れている。直径9~9.5cmで、厚さ1.8cmである。

### 石核 (Fig. 47-6, PL24)

B-4・C-4区境いの集石遺構に組み込まれていたものである。硬質頁岩で、長さ12.2cm、幅12.9cm、厚さ4.5cmの楕円形を呈する大形自然礫を素材とするもので、剥片剥離は、母岩の片面に集中し、その縁辺には強度な打撃痕をとどめている。表面には、縦位に走る複雑な剥離痕を観察できるが、その痕跡からは、剥取された剥片が幅3cm前後

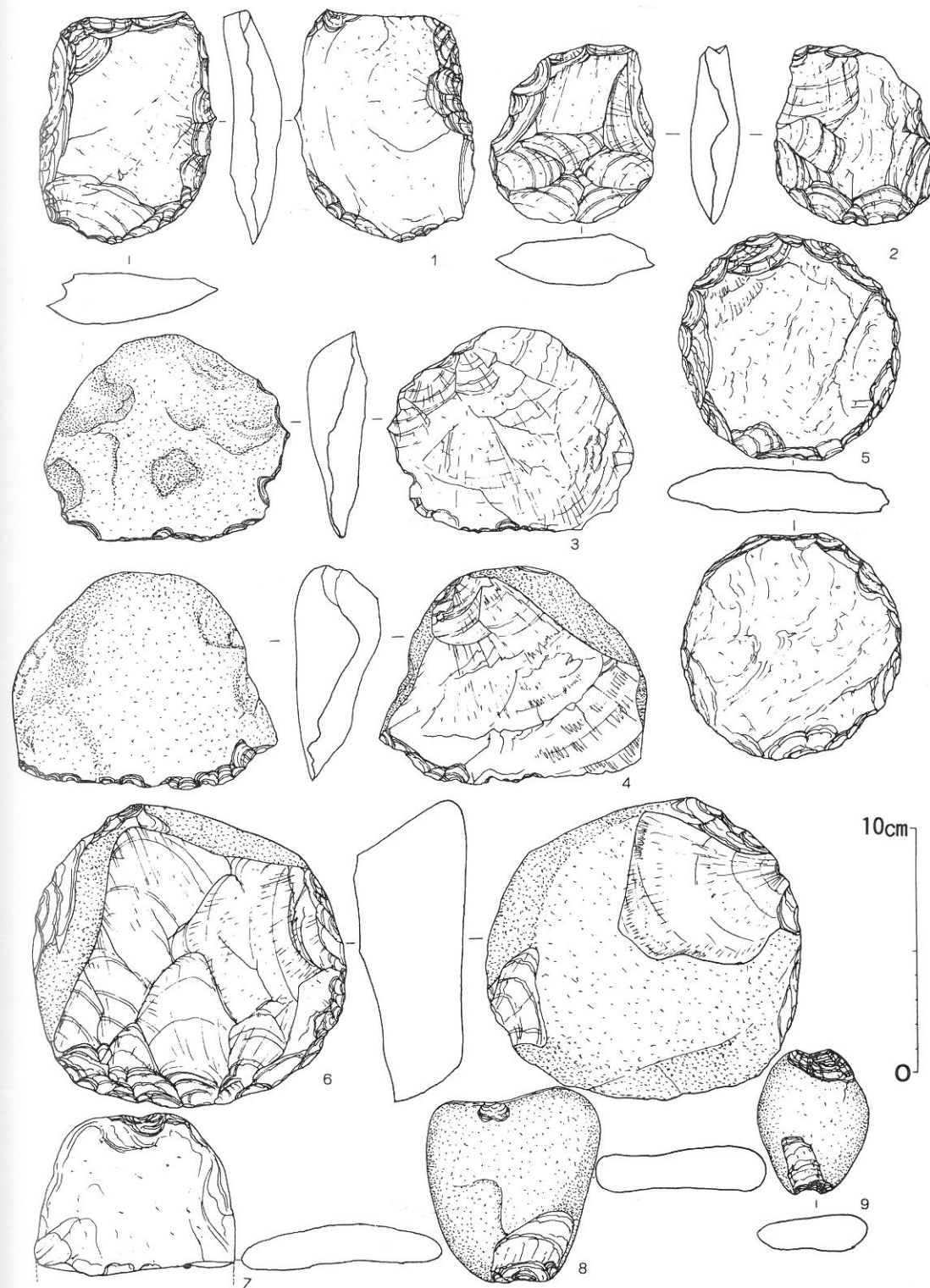


Fig. 47 打製石斧・円盤状石器・石核・石錘実測図



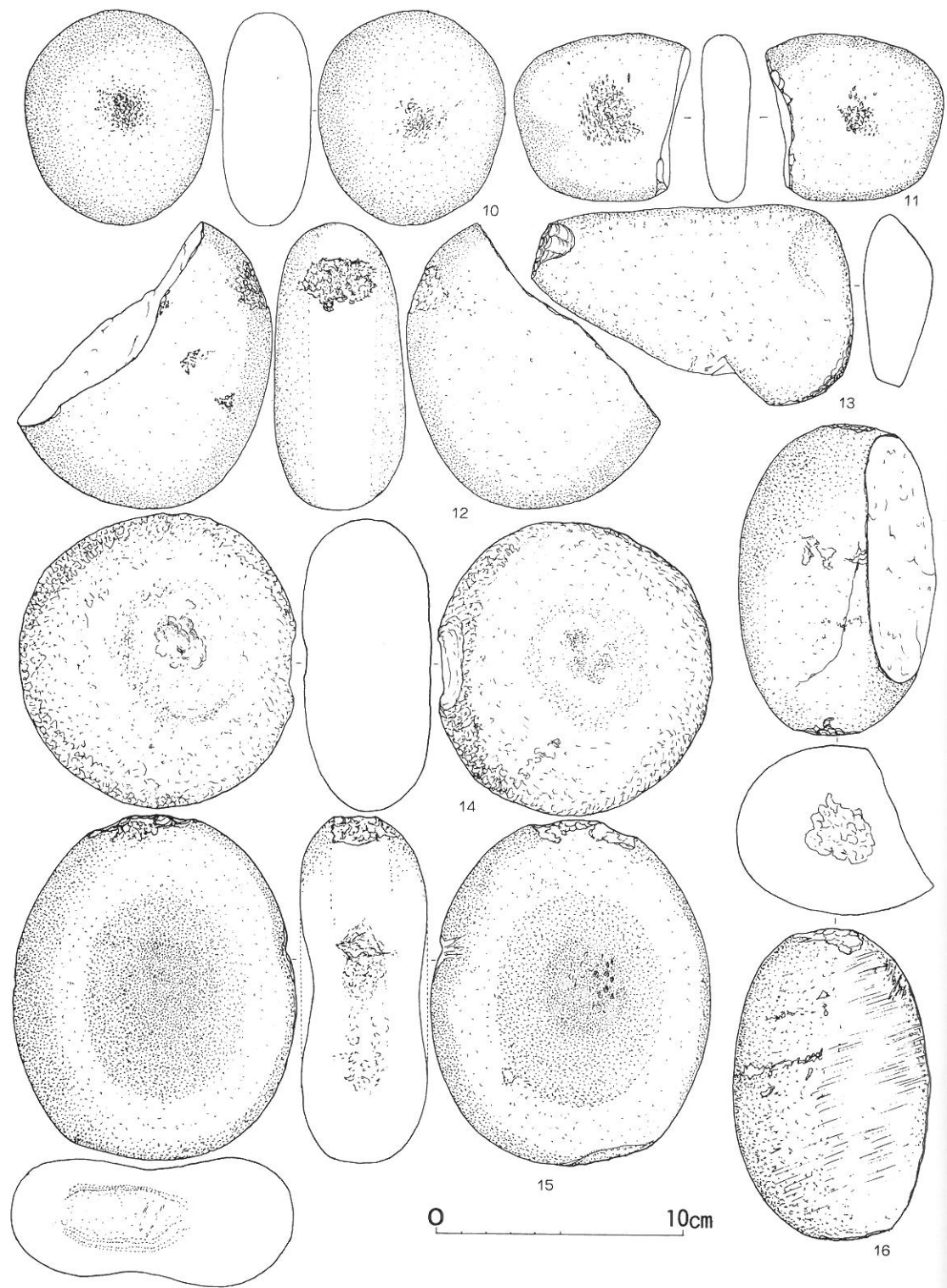


Fig. 48 叩石実測図

の縦長のものであったことが知られる。一方の面は、わずかな剝離痕を見るのみで、大部分が母岩の自然面を残している。

石錘 (Fig. 47-7~9, PL23)

楕円形を呈する自然礫の長軸両端に簡単な打ち欠きを加えただけの粗製品。7は、幅1.7cm、厚さ1.5cm、長さ6.5cmを計る全体形の約半分をとどめる残片で、重量160gを示すが、本来の大きさは、その輪郭から長さが10cm、重量300gを前後する大形石錘であったことが知られる。8は、長さ8cm、幅6.8cm、厚さ1.9cmの完形で、大きさ、重量からは河川型石錘に含まれる。9は、長さ6cm、幅4.5cm、厚さ1.4cm、重量60gを計り、本石錘中、最も小形、軽量で河川型石錘とみなくてはならないものである。

叩石 (Fig. 48-1~16, PL24)

7点を数える叩石の石質は、4が砂岩で、他は花崗岩と粘板岩が一点ずつである。形状は楕円形が最も多く、円形のは少ない。大きさは、長さ1.4cm、幅11.5cm、厚さ5.3cm、重量1,360gの15が最大で、長さ7.2cm、幅6.8cm、厚さ1.9cm、重量60gの11が最小である。使用痕は、楕円形を呈するものが長軸両端、あるいはその一端に持ち、痕跡がアバタ状となるもの、平坦に摩滅した状態で残されているものなどである。これらの上面中央部には凹みを両面に作る11・15がある。前者は、それがかすかに見られ、後者は、0.5cmの深さで幅広く凹んでいる。16には凹みがなく摩石として兼用されたらしく、表面は使用によって光沢を有し、その面に細密な線条痕を残している。なお側面に長く破損した個所の周辺角は、手擦れによって滑らかに摩滅している。円形を呈する10・14は、両者とも中央両面に叩打痕を残すが、その痕跡は前者が浅くかすかに見られるのみで、後者はやや深く、滑らかに凹んでいる。これらの縁辺には使用痕を持っていない。

石鏃 (Fig. 49-1~3, PL26)

3点の石鏃は、総て基部に抉入を持つ二等辺三角形鏃で、一辺の長さが1.7cmを前後する比較的小形なものである。

基部抉入は18が最も深く、両脚が長くて鋭い。押圧剝離の加工も入念である。19は身が少し分厚く、押圧剝離の加工は雑で、抉りも浅い。20は、最も小形で一辺の長さが1.6cmで、石質がアズキ色チャートである。扁平で肉の薄い剝片から加工したもので、押圧剝離は先端部に入念で、中央両面には第一次剝離面を幅広く残している。全体的には形態に曲みがあり、基部抉入も浅く粗製品。これらは後期中葉平城式に伴うものと解して大過ないであろう。

スクレイパー (Fig. 49-4・7, PL26)

縦長剝片利用の17と、半月状を呈する剝片に加工を施し、それとした21の2点である。前者は、腰岳産の良質黒曜石で、薄墨色を呈し、半透明である。長さ4.2cm、幅2.7cm、厚さ0.5cmで、片面は大まかな剝離痕を全面に残し、一方の面は第一次剝離面とその表面にバルブ、リングを残すものである。使用痕は、縁辺に小さな刃こぼれとなって部分的に認められる。

後者は、硬質頁岩製で、半月状に外弯する縁辺に押圧剥離が両面から加えられ鋭利な刃部を作り出している。長さ4.5cm、幅1.8cm、厚さ0.9cm。なお本資料は、第3号人骨胸部に密着出土したものである。

姫島産黒曜石剥片 (PL26)

4点の出土であるが、大きさは直径1cm前後で、肉の薄い細片である。重量は4点合わせてもわずか5.2gである。出土地区は、C-3区で1点D-3区第3号人骨上部の泥洗浄で1点、他の2点はD-4区貯蔵穴内泥洗浄で検出されている。

焼け花崗岩礫

D-5区に1点出土したもので、直径12cm、厚さ6cmの円形を呈するもので、全面火熱を受け赤褐色に変色している。石質は、そのため芯まで脆くなり、表面は手で握っただけでボロボロに崩れ落ちる状態である。出土した時点で、既に表面の一部は崩れ本来の形状を少し変えていたが、さらに水洗の際にも若干その個所が剥げ落ち、もとの状態からは、その表面が少し大きめとなっている。

剥げ落ちた表面での観察では、金雲母粒の含有密度が頗る高く、特徴的である。縄文土器胎土に混入の金雲母粒は、この様なものが素材となっているのではないかと考えられるし、火熱を受けているのも砕きやすくすることを目的とした意識的な行為であったと解したい。これと同じものを片粕遺跡にも出土している。  
註7

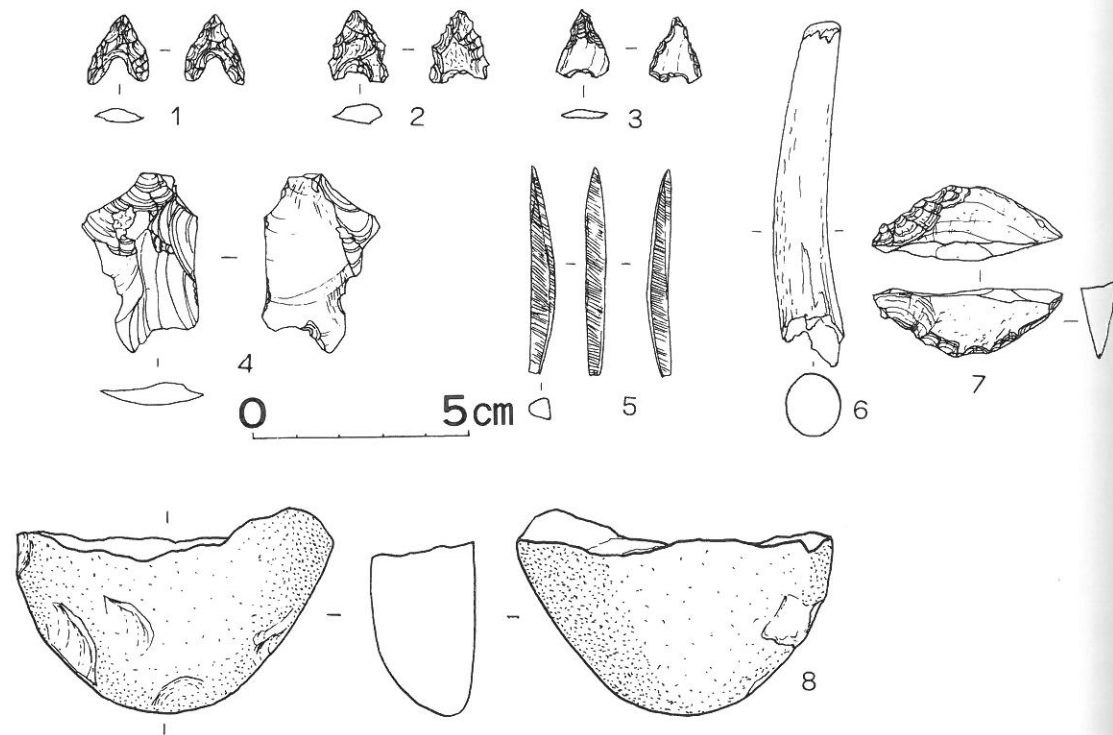


Fig. 49 石鏃・スクレイパー・骨角器及び第3号人骨頭蓋直下の自然礫実測図

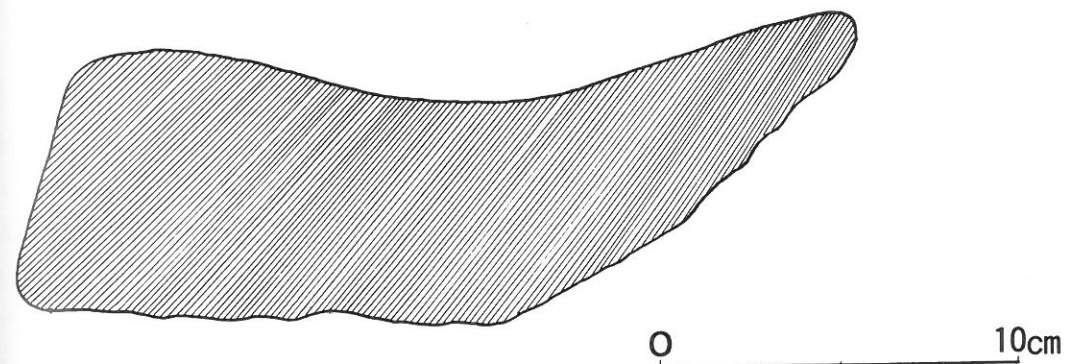


Fig. 50 石皿実測図

第3表

出土石器一覽表

|            | 名称     | 出土地点                  | 石質      | 重量(g) | 備考   |
|------------|--------|-----------------------|---------|-------|------|
| Fig. 47—1  | 打製石斧   | D—3区混土貝層              | 頁岩      | 170   | 完形   |
| 2          | 打製石斧   | C—4区混土貝層              | ホルンフェルス | 110   | 完形   |
| 3          | 打製石斧   | D—1区貝混土層              | 頁岩      | 210   | 完形   |
| 4          | 打製石斧   | C—5区混土貝層              | ホルンフェルス | 400   | 完形   |
| 5          | 円盤状石器  | C—5区混土貝層              | 粘板岩     | 215   | 完形   |
| 6          | 石核     | C—4区混土貝層              | 頁岩      | 970   | 完形   |
| 7          | 石錘     | E—4区混土貝層              | 粘板岩     | 160   | 半欠   |
| 8          | 石錘     | D—5区混土貝層              | 砂岩      | 150   | 完形   |
| 9          | 石錘     | E—4区混土貝層              | 砂岩      | 60    | 完形   |
| Fig. 48—10 | 叩石     | C—4区混土貝層              | 砂岩      | 340   | 完形   |
| 11         | 叩石     | E—4区混土貝層              | 粘板岩     | 160   | 完形   |
| 12         | 叩石     | C—4区混土貝層              | 砂岩      | 670   | 半欠   |
| 13         | 叩石     | C—1区貝混土層              | 砂岩      | 370   | 完形   |
| 14         | 叩石     | B—2区貝混土層              | 花崗岩     | 1,080 | 完形   |
| 15         | 叩石     | C—3区混土貝層              | 砂岩      | 1,360 | 完形   |
| 16         | 叩石     | D—3区混土貝層              | 砂岩      | 1,000 | 一部破損 |
| Fig. 49—4  | スクレイパー | C—2区茶褐色粘質土層           | 腰岳産黒曜石  | 4.28  | 完形   |
| 1          | 石鏃     | C—4区混土貝層              | 安山岩     | 0.45  | 完形   |
| 2          | 石鏃     | C—0区貝混土層              | 安山岩     | 0.7   | 完形   |
| 3          | 石鏃     | D—3区混土貝層              | チャート    | 0.35  | 完形   |
| 7          | スクレイパー | D—3区混土貝層              | 頁岩      | 5.82  | 完形   |
| Fig. 50    | 石皿     | B—3区混土貝層              | 粗粒質砂岩   | 8,000 | 完形   |
| PL 26      | 姫島産黒曜石 | C—3区・D—3区<br>D—4区混土貝層 |         | 5.2   | 剝片   |

石皿 (Fig. 50, PL25)

不定形な粗粒質砂岩の巨大礫を利用したもので、底部は約2分の1までが平坦面を持つが他は上面に向かって斜めに大きく剝落し不安定である。

使用痕は、平坦な上面中央部に幅16cm、長さ20cmの長楕円形となって滑らかに摩滅した状態で残され、その最も深い個所では、本来の表面から約1.5cmも損耗を示している。側面観は、断面図に示されるとおり弓状に弯曲している。なお、片側の角に打製石斧の刃で付けられた様な長目の叩打痕が見られる。長さ35.5cm、最大幅28.2cm、最大厚7.5cmである。

### Ⅲ. 骨角器

ヤスと刺具とみられるもののわずか2点である。

ヤス (Fig. 49—5, PL26)

B—4区混土貝層に出土したもので、完形である。鹿角製で、長さ4.8cm、幅0.6cm、厚さ0.4cmを計り、全体形はペン先形に近い形状を呈する。軸は、いくらか外側にそりを見せ、その背部は平坦である。表面には細密な線条痕が全面に残り、作りは入念で先端部は鋭い。

刺突具 (Fig. 49—6, PL26)

鹿角の先の部分を長さ8.0cmに折り取ったもので、先端部に滑らかに摩滅した使用痕を残すが、その部分は丸味をなし鈍端となっている。C—4区混土貝層の出土である。

## 第2節 自然遺物

多種の貝類と獣・魚骨ならびに植物種子などである。特に獣・魚骨は膨大な量で、貴重なものを数多く含んでいる。これらの資料は現在、東京国立博物館古生物第三研究室(上野輝彌室長)に依頼し、専門的鑑別を受けている。ここでは取り急ぎ鑑定いただいた若干の資料のみを紹介するとどめ、総合的には、後日それを報告する次第である。

なお、この項については、猪石広明君の助力を得ていることを記しておく。

軟体動物 (PL27)

今回の調査では既述したとおり貝層がわずか20cmと薄く、しかも、それが純貝層ではなく、貝混土層で、その個所が限られた小範囲にあったこと、また混土貝層にしても貝の含まれる密度は極めて低いものであり、全体的に貝の量は貧弱である。それらで得た貝種は以下の14種である。なお、表にはD—0区・C—0区で試みた40cm×40cmの貝層ブロックサンプルの内容も掲げている。

[斧足綱]カキ・ハマグリ・サルボウ・ハイガイ・カガミガイ・シオヤガイ・アサリ・ナミマガシワガイ〔腹足綱〕イボウミニナ・フトヘナタリ・スガイ・レイシガイ・アマノオブネ・マガキガイ。

第4表・第5表に見る限り、従来の調査で主体をなしていたハマグリは稀少で、カキ、ウミニナ、イボウミニナが最も比重をしめているのは注目される。ただハマグリに限っ

ては、その調理（干し貝）加工の場を別の所に持っていたことも充分考えられよう。第3次の調査地点では、約1mの堆積を示す純ハマダリ貝層を筆者は確認している。これなどは、それを示教するもののように思われる。

第4表 D-O区貝層サンプル(貝殻比)

| 種類         | 個体数 | 個体比%  | 総重量g | 重量比%  |
|------------|-----|-------|------|-------|
| カキ         | 90  | 57.69 | 80   | 47.06 |
| ウミニナイボウミニナ | 46  | 29.49 | 50   | 29.41 |
| スガイ        | 15  | 9.62  | 15   | 8.82  |
| ハマグリ       | 3   | 1.92  | 5    | 2.94  |
| マガキガイ      | 1   | 0.64  | 14   | 8.24  |
| レイシガイ      | 1   | 0.64  | 6    | 3.53  |
| 合計         | 156 | 100   | 170  | 100   |

完形のものを1とし、破損しているものも同じ殻厚と大きさの破片を合わせて、ほぼ1個体分とした。

第5表 C-O区貝層サンプル(貝殻比)

| 種類         | 個体数 | 個体比%  | 総重量g | 重量比%  |
|------------|-----|-------|------|-------|
| ウミニナイボウミニナ | 134 | 67.00 | 130  | 66.67 |
| カキ         | 58  | 29.00 | 40   | 20.51 |
| シオヤガイ      | 2   | 1.00  | 10   | 5.13  |
| ハマグリ       | 3   | 1.50  | 8    | 4.10  |
| カガミガイ      | 2   | 1.00  | 5    | 2.56  |
| スガイ        | 1   | 0.50  | 2    | 1.03  |
| 合計         | 200 | 100   | 195  | 100   |

#### 脊椎動物

##### 哺乳類 (PL28~29)

主体となるのはイノシシとニホンシカである。その割合は、前者が勝り約70%をしめるが、両者とも骨は破碎がひどく、同一個体のものの判定は不可能である。イノシシの良好な下顎骨の出土をB-2区貝混土層下部でみられたし、C-4区とD-4区ではシカ角が出土し、E-4区ではその下顎骨の出土があった。この他、若干の資料ではあるがイルカとキツネが明らかとなっている。

##### 魚綱 (PL30)

サメ類・マグロ類・サバ類・マダイ・アカエイなどである。これらの中で特に目立ったのはマグロ類とサメ類の大型魚である。共に外洋魚であり、前記のイルカ例とあわせ魚撈にみる行動圏の意外に広範であったことをうかがわせている。これらは骨角製モリ・ヤスを用いての漁法によるものであろう。

##### 爬虫類 (PL30)

ウミガメ類1例である。この資料は、本貝塚では初めての出土であり、前記キツネ・イルカの例もそれである。

##### 植物種子 (PL31)

カシ類の種子とみられるもので、D-4区貯蔵穴床面と、その内部の泥洗浄で約30個が検出された。これらは総て炭化している。原形を保つものは数少なく、ほとんどが半分に割れているか、その形状を崩した細片である。原形を保つ資料からの大きさは、長径1.7cm、短径1.0cm前後を計る。

#### 註

1. 間壁忠彦・間壁葎子『里木貝塚』倉敷考古館研究報7, 昭46年。
2. 岡本健児「宿毛貝塚出土縄文式土器の再検討」高知小津高等学校研究誌第5号, 昭41年。
3. 岡本健児・広田典夫・木村剛朗『高知県片粕遺跡』高知県文化財調査報告書第19集, 昭50年。
4. 鎌木義昌・西田栄『伊豫平城貝塚—縄文式土器を中心として—』愛媛県御荘町教育委員会, 昭31年。
5. 岡本健児「愛媛県宇和町深ヶ川の弥生式土器と宇和島市拝鷹山貝塚について」『西四国』第2号, 昭43年。
6. 岡本健児「高知県の弥生式土器型式編年論」『高知県史考古編』, 昭43年。
7. 拳大のもので、資料は現在筆者が保管している。

## 第6章 人骨の所見

徳島大学医学部第1解剖学教室

教授 山田正興

高知医科大学第1解剖学教室

教授 山本恵三

昭和51年9月25日～10月5日にわたる愛媛県南宇和郡御荘町平城貝塚の調査において、3個体の人骨が発掘された。同貝塚A-3区第1号墳から、破碎された側頭鱗を含む原型の不完全な1体分と思われる人骨(第1号人骨、頭位は東の方向)、および、同貝塚第2号墳C-2区から、風化破碎した頭蓋冠1個分の痕跡(第2号人骨、頭位は南の方向)、が発見された。さらに同貝塚D-3、D-4区の不整楕円型第3号土壙墓(第3号人骨)が発見された。第3号人骨は、同10月2日、最初、頭頂部を露出し、調査団(団長中平留義)以下10名の細心な協力によって、埋葬時の現状保存のままと思われる仰臥位において、上肢は軀幹と平行に、下肢は伸展位で並列の状態が発掘された(PL6)。頭位は南東の方向で、顔面は下肢側に正対し、上下顎はほぼ咬合位置にあった。頭蓋冠および顔面の破損は著しいが、全骨片はほぼ埋葬時の原位に近く存在していた。各人骨の頭尾側は南東の方位にほぼ解剖学的配列をとっていた。腰椎L4の左位に接して、平城式縄文土器片1片、および人骨の周辺および人骨を覆うように、同土器を含む自然礫約50個を出土した。これら土器片の形状から埋葬時期は縄文後期中葉(約3300年前)と推定されている。

### 第1号人骨(PL4)

表層：筋突起を欠く下顎骨左半分が出土。歯牙は $\overline{5678}$ を残し、齶蝕は見られない咬耗は $\overline{5678}$ ともに象牙質を点状に露出した状態である。栞原の分類によると、咬耗度4段である。下顎骨の計測値は表1のようである。

左肩甲骨は肩甲棘関節下半分を残し、欠除している。関節は強大で、関節の最大幅は2.7cmに達する。左側頭鱗の骨片2個、左鎖骨は胸骨端の一部を欠失している。左上腕骨の骨頭と頸部を含む近位部3.6cmおよび右遠位端関節部が残存している。その関節面の最大幅は4.4cm、近位関節頭の解離なし、その他、頭蓋底を構造した骨細片無数。

中層：椎骨体破片12、肋骨破片23、および胸骨柄1。

深層：左側頭骨片1、胸骨体破片1、椎骨破片15、頭頂骨破片(厚さ約5mm)1、その他、細粉片無数、関節頭、幅、および面の大きさなどから、強健な男性成人骨と推定される。

### 第2号人骨(PL5)

右側頭蓋冠と頭蓋底の一部および左側頭蓋冠の一部が出土した。左側前方に前頭稜、その右側に右眼窩上縁がみられる。後頭部浅層の土中からは左右側頭骨の錐体、その右前外側に右上顎骨片と下顎頭部および脱落歯11本を数えた。それらの9本の乳歯で2本の未萌出の永久歯冠 $\overline{61}$ の石灰化は不全である。乳歯(PL5下)は $\frac{CBA}{A|A} \frac{B}{CD} \frac{E}{}$ と同定できる。その他、後頭骨片、管状および板状骨片が多数発見された。これらの人骨のすべては骨質が菲薄かつ脆弱であること、椎骨に付随する軟骨様部分の欠失部があること、乳歯が完全で永久歯が未萌出であることなどから、弱年4才未満の1体分の幼児の遺骨の一部であると推定できる。

### 第3号人骨(PL6・7)

#### 頭骨

発掘時、頭骨の損壊は少いような外見を示したが、採骨清掃すると、各縫合は解離しており、後頭部、側頭部、脳底特に眼窩後部および上鼻部は完全に損壊し、大部分の細骨片は頭蓋底へ陥落していた。それら約100個の頭骨片を水洗、乾燥後、接着復元した(PL8・9・10)。復元頭骨の可能な計測項目は第7表のようである。

頬弓巾12.1cm、最大上顎巾、中顔巾はそれぞれ、6.1cm、9.4cmで大きくはない。上顔高は5.8cmで低い(PL8)。鼻巾2.4cm、鼻高4.5cm、ブregマ高12.9cm、頭耳高10.9cmであった(PL10)。頭長17.5cm、頭巾14.1cmで(PL9)、頭長巾指数は80.6の中頭に近い短頭を示した。コルマン上顔指数47.9、ウィルヒョウ上顔指数61.7はいずれも低顔型を示す。その他、乳突間巾、アステリオン間巾はそれぞれ9.1cm、10.4cmで広くはない。

#### 上下顎

上顎は $\overline{7+7}$ まで完全に萌出している。 $\overline{8|8}$ は未萌出で顎骨中に埋伏している。下顎も同様に、 $\overline{7+7}$ まで完全に萌出し、 $\overline{8|8}$ は顎骨中に埋伏している(PL11)。上下顎ともに齶蝕はなく歯列は整。上顎の歯列型は楕円型に近い。咬耗は少く、 $\frac{621}{621} \frac{126}{126}$ では、象牙質が点状又は線状に露出している。即ち栞原の分類では第4段に属する。 $\frac{54}{5} \frac{45}{5}$ は無咬耗、 $\frac{7}{74} \frac{7}{47}$ はエナメル質のみ面状に咬耗している。下顎骨の計測値は第6表のようである。左右筋突起の先端および関節突起の外側部を除いて、保存は良好であった。一般的に若年者の外観を示し、特に筋突起は前方に位し、下顎切痕は浅い。また下顎体に比して、上行枝の前後巾が厚い。上行枝の側方への張り出しも弱く、全体として $\overline{えら}$ の張った外見を示す。

#### 軀幹と骨盤(PL7・12)

頸椎C<sub>1</sub>～C<sub>7</sub>、胸椎T<sub>1</sub>～T<sub>12</sub>、腰椎L<sub>1</sub>～L<sub>5</sub>、仙椎S<sub>1</sub>～S<sub>5</sub>のすべては解離し、S<sub>1</sub>のみ椎弓が残存、T<sub>3</sub>、T<sub>6</sub>およびL<sub>1</sub>の椎骨体は半壊、肋骨左1～12中10は欠失、右1～12中11は欠失。骨盤は左右対照型、歪なし。棘突裂なし。腰椎との融合なし。腸骨、恥骨、坐骨は完全に解離し、仙腸関節も離脱している。大骨盤最大径20.1cm、上棘突間巾18.4cm、小骨盤上孔はやや長いハート型、岬恥骨連合巾8.5cm、骨盤高12.9cm、右恥骨弓は全く欠失し、

左閉鎖孔縁は鈍三角型、左最大内径4.7cm(PL12)。

上下肢と肩甲骨など (PL7)

左右肩甲骨の関節部のみ残存、関節はまが玉型、鳥喙突起は解離。左右鎖骨あり左9.9cm。上腕骨は右完全全長23.2cm、左遠位端を欠失。左右の橈骨尺骨の遠位端は欠失。その他、手根骨6個、中手骨5個、指骨7個あり。

大腿骨完全右33.8cm、左34.0cm、脛骨右完全27.5cm、左遠位端欠失。左腓骨完全26.4cm、右遠位端欠失。右足根骨完全、右中足骨VI基部を欠く。左距骨、踵骨、内側楔状骨のみ。左右の距骨には蹲居小面を認める。中足骨5個、足指骨8節、その他破片若干。

以上の残存骨に生体反応を認める人為的痕跡、切瘡などは認めず、また病的変型破壊痕を認めなかった。骨にはHg化合物などの染骨痕跡なし。左右大腿骨長、左脛骨長から身長は130cm程度と推算される。全所見を総合すると若年(14~15才)の女性と推定される。

本発掘に当り、現状の保存と遺骨の収容および調査研究に絶大な協力をいただいた平城貝塚調査団団長中平留義、同副団長野平啓真、調査指導者、阪本安光、草地性自、調査担当木村剛朗氏らを始めとして、御荘町文化財保護審議会委員、同町教育委員会および中央公民館の諸氏に厚く御礼申し上げます。

(調査研究協力者)

藤盛 健, 山下伸典, 近森憲助, 荒木 勉, 宮井正明, 田辺伸悟,  
山本明良, 松原 博, 錦織 健, 加茂重良, 宮田一好, 福島 襄,  
原田道則, 多田通代, 北村明美, 庄野正行,

第6表 第1号人骨・第3号人骨

|        |        |             |
|--------|--------|-------------|
| 下顎頭巾   |        | 11.0        |
| 筋突起巾   |        | 8.6         |
| 下顎角巾   |        | 8.0         |
| 下顎体長   | 右      | — 7.1       |
|        | 左      | 8.4 7.2     |
| 下顎長    | (10.5) | 9.1         |
| 下顎枝高   | 右      | — 5.3       |
|        | 左      | 5.5 5.1     |
| 下顎最小枝高 | 右      | — 4.4       |
|        | 左      | 3.5 4.2     |
| 下顎枝巾   | 右      | 3.4         |
|        | 左      | 3.5         |
| 下顎切痕高  | 右      | 7.0         |
|        | 左      | 7.5         |
| 下顎枝角   | 右      | — 123°      |
|        | 左      | (117°) 125° |

単位：cm, ( ): 推定値

第7表 頭骨計測値および指数 (第3号人骨)

|            |       |
|------------|-------|
| 頬弓巾        | 12.1  |
| 最大上顎巾      | 6.1   |
| 中顔巾        | 9.4   |
| 上顔高        | 5.8   |
| 鼻巾         | 2.4   |
| 外鼻孔長       | (3.1) |
| 鼻高         | 4.5   |
| (最小)鼻根巾    | (2.0) |
| 鼻根横孤長      | (3.2) |
| ブレグマ高      | 12.9  |
| 頭耳高        | 10.9  |
| 頭長         | 17.5  |
| 頭巾         | 14.1  |
| 頭長巾指数      | 80.6  |
| コルマン上顔指数   | 47.9  |
| ウィルヒョウ上顔指数 | 61.7  |
| 鼻指数        | 53.3  |
| 大後頭孔長      | 3.5   |
| 大後頭孔巾      | 2.6   |
| 大後頭孔指数     | 74.2  |
| 乳突間巾       | 9.1   |
| アステリオン間巾   | 10.4  |

単位：cm, ( ): 推定値

## 第7章 考察

今回の平城貝塚発掘調査は、四国銀行御荘支店が駐車場とするのに先だつての緊急発掘調査である。面積172.8㎡をわずか11日間という限られた日程で追われながらの調査であったことや、その他、種々の都合上から記録その他に不備な点を多く残した。ただ救われることは、今回の区域が、埋めもどし後、表面をアスファルトで固める程度にとどめるものであり、遺跡、遺構は密封されながらも現状のまま永久保存されるところにある。

将来、再度この地が発掘調査される機会にでも恵まれれば、今回の調査で欠落した諸点をこれで補っていただくことを念願する。

さて、今回の発掘調査では、充分とまではいかなかったけれども、従来明らかでなかった生活遺構や、遺物を検出することができ一応の成果を上げることができた。

1. 遺構では、堅穴住居址、柱穴、貯蔵穴、配石・集石遺構と人骨を伴う土壙墓等である。これらのあり方からして今回の調査地域が生活の場そのものであったことが明確となった。すなわち、それは洪積段丘頂部の南緩斜面、貝塚が分布する東北隅に位置するものである。そして、その時期は、主体となる縄文土器から推して平城式第2群期の後期中葉にある。

貯蔵穴内からは、保存食糧としていたものであろう植物種子が炭化した状態で多数検出された。これらは当時の食生活の一端を知る上で極めて貴重である。この貯蔵穴の床面には、比較的大き目で、扁平な土器片が小片に混ざって多数敷かれ、土器片敷貯蔵穴とでもいい得る新たな構造を有し、今後に類例遺構の出土が期待される。床面に使われている土器片は、もちろん平城式第2群土器である。西南四国で明らかな炭化種子出土遺跡は、高知県三里(縄文後期)<sup>註1</sup>、同有岡(縄文晩期)<sup>註2</sup>、同中村貝塚(縄文晩期)<sup>註3</sup>などで、本例を加え4箇所を数える。種子には、ドングリ・クリ・シイ・モモ等があり、三里は炉跡、他は遺物包含層からの出土である。

柱穴は7箇所を検出されたが、それらは不規則で、相互の関連性にとぼしく建物遺構を復原するにはほど遠いものであった。ただ直径30cm、深さ35cmを前後する支柱とみられるものをA-4区とB-2区で1個ずつ確かめ得たことは一つの収穫であった。

堅穴住居址は、発掘区のほぼ中央部、茶褐色粘質土層を基盤とする極めて平坦なベース上に築かれていたもので、今回は日程の都合で、それを確認する程度の調査で打ち切り、その全容を把握なし得なかったが、一部露呈した輪郭からは、平面プランが不整楕円形に近いものであることが考えられた。いずれにしても正確には将来に明らかとされようが、その位置からは出入口を南面あるいは御荘湾を望む西方に向けていたであろう

ことが想定される。

人骨を伴う3基の土壙墓は、今回の遺構の中では最も注目されるものである。1号、2号人骨は、不完全であったものの、その頭位は、前者が東方、後者は南方に置くものであった。第3号人骨は、ほぼ完全な骨格を保つ仰臥伸展葬で、頭位は南東を向き、それぞれの埋葬方位が異なるもので一定の統一性は見いだせなかった。ただ、これらの人骨を包む封土には可成りの割合で浜砂が混り、死者に対して意識的に被したであろうことが考えられた。また、これらの中で、特に第3号人骨では、拳大礫が40個ほどと魚骨・獣骨類が胸部を中心に被覆され比較的丁寧な埋葬法が看取されたが、これについては精霊に対する尊敬の念を抱いての処置であったと解されようし、被葬者が若年期の女性であり、世を惜しまれて去ったことにも起因しているかもしれない。

当人骨の頭蓋後頭部直下に出土した扁平礫は、大きさに不安は残るもののその出土状態から一種の枕石と解してよいであろう。また左腹部の位置にスクレイパー1点の出土を見たが、これは生前身に付けていたそのままのものか、あるいは副葬品であったかについては定かでないが、強いてそれに答えるならば前者にその可能性を求めたい。

土壙形態は、深さに若干の差はあるものの平面形は不整長楕円形で、底部は舟底形を有するものであって、形態、上部に礫を被ぶせる例と共に片粕遺跡のそれに共通するものである。ただ片粕の土壙墓は、後期初頭のものであり、本貝塚の例は土壙墓内の土器が示す後期中葉である。墓域内容では、片粕が遺跡の北斜面に共同墓地として形成するのに対し、本例では生活の場内に設けられ、その様相を異にする。

配石遺構の出土を第3号人骨南西70センチの近距離にみているが、本遺構の性格については岩谷遺跡の例にもれず信仰的遺構とみてまず間違いないであろう。内容についてはさまざまな推測がなされるであろうが、最も考えられるのは、その位置からいって第3号人骨との関係はみのがし得まい。また、平城縄文人が魚撈を主体とする生活集団であったことが想定されるところから、海上での安全や、魚、貝類の繁殖、その豊漁などについても祈願されたことと思われる。狩撈についてもそれに似た祈りがなされたであろう。その祭祀に関係するものと考えるが、この遺構の周辺には良好なマグロの脊椎骨、ニホンジカの下顎骨が見られたし、遺構内にも細片となった獣・魚骨片が多数出土している。このような祭祀形態を周辺地域でみると、現在、岩谷と平城の2例を数えるのみである。前者では平城式第2類土器、ここでいう第2群土器<sup>註5</sup>に出現したことが明らかとされ、本貝塚と時期を等しくするものであり注目される。

2. 石器の大多数が後期中葉、平城式に伴うものとみてよいであろう。打製石斧は、肉厚く小形で、形態的にも未発達を示し、晩期のそれとは様相を異にする。特に三角形状の自然礫を半裁し、打製石斧とする製法は、今のところ本貝塚にのみ見られる特徴で注目される。

石鏃は、わずか3点であり、獣骨出土量に比例し、そのバランスを欠くものである。これは本来、本貝塚に少ないのではなく、小遺物がたまたま検出されなかったという事

情にあると思う。

姫島産黒曜石剥片やFig. 49-3の小形石鏃は、貝層土壌の洗浄によって検出されたものである。貝塚における遺物包含土壌は、できればその総てを洗浄作業されることの必要を痛感する。

叩石は、前回の出土資料にも多くが見られ、本貝塚にみる石器の主体をなすものであることは明らかであるが、これらが磨石としても兼用されているものを多く含み、他遺跡ではあまり見られぬ例である。磨石、大形石皿はセットをなすものと思われるが、木の実の粉末や魚肉などをミンチ状にするなど調理に用いられたものであろう。

貝塚でありながら漁具である石錘出土の少なさは意外であった。魚類相からすれば、網漁も行なわれていたのであろうが、ヤス、釣針を用いての刺突、釣漁法にむしろウェイトをおいた魚撈であったと推察される。

姫島産黒曜石の出土は、東九州縄文人との交易を如実に示すものとして貴重である。出土資料は、将来まだまだそれを増すであろうが、縄文前期にみられるような多量出土はまず望めないであろう。西四国の後期縄文遺跡では、ほとんどの遺跡にそれを見るが、その量はけっして多いものではない。この現象は、後期が、前期の狩猟主体の生活であったのと異なり魚撈に強く依存するそれであったことに起因しているように思われる。いずれにしても、この件については将来検討すべき課題である。

3. 縄文土器については、従来見られなかった押型文土器と轟B式土器を検出した。これによって平城貝塚の生活時期にみる上限が早期中葉にあり、前期初頭にまたがっていたことが明らかとなった。中期前葉船元式土器は、既にその出土が明らかなもので、今回もわずかながらその出土を見た。これらは偶然の出土によるものであり、その量も少ない。将来、貝層下の茶褐色粘質土層及び黄褐色粘質土層を検索することにより、これらのまとまった資料の得られることが期待される。

西南四国の前期初頭は、九州の轟B式と瀬戸内の羽島下層式文化がミックスした様相を呈し、その傾向は中津川洞、影野地遺跡<sup>註6</sup>で明らかなように内陸部に強い。遺跡はキャンプサイトの小規模遺跡が大半をしめる。ただ姫島産黒曜石を多量に伴い、九州との関係は密接である。今回明らかとなった腰岳産黒曜石も、このような交流の中で搬入されたものであろう。これと同質のものを中村貝塚にも出土している。

押型文土器や船元式土器を出土する遺跡も前者を中津川洞・穴神洞に、後者を深泥で確認する他は、いずれも微量な遺物をわずかな遺跡にみるのみである。この様に本地方の早・前・中期では分布密度も希薄で、良好な遺跡に恵まれてない。特に前・中期にかけては、東九州でも同じ傾向が報じられ、この現象についてを別府大学の賀川光夫教授は、阿蘇火山の噴火活動による降灰環境に起因すると考えている。本地方が、この環境内に含まれていた可能性も充分考えられ、前・中期遺物を包含の火山灰土壌<sup>註9</sup>の分析が急がれる。

4. 本遺跡で中心をなし、最も良好な多くの遺物を出土するのが後期中葉平城式期であ

る。平城式土器は、従来と変わりなく重要なものを多く出土した。それにもまして今回は、後期前葉宿毛式をわずかではあるがたしかめ得たことは注目に値する。

宿毛式は瀬戸内の後期初頭中津式に祖形を持ち、西南四国で宿毛式特有のものへと変容を示したものである。厳密には、宿毛式は新・古2つに細分でき、宿毛Ⅰは中津式の要素を強く残存するものであって福田KⅡ式に先行する。宿毛Ⅱは、いわゆる南九州の綾式との接触を示すもので福田KⅡ式に平行し、沈線文末端で巻ひれ状にからむ入組文や、大きく渦巻状に描く入組文を特色とする。共に文様手法は、磨消縄文手法となるのを主体とするが、それを描く沈線は2条を基本とする。沈線の筋は前者が太く、後者はやや細い傾向を見る。愛媛県小松川式は宿毛Ⅰの典型といえるものである。宿毛貝塚では、この宿毛Ⅰが比較的少なく宿毛Ⅱ<sup>註11</sup>を主体としている。

これらの分布を西四国で見ると、北と南ではやや様相を異にする。すなわち宿毛Ⅰは、南で希薄なのに対し、北では多い。宿毛Ⅱの段階では、南がこれ一色となるのに対し、北では宿毛Ⅰを介して3本沈線を特色とする福田KⅡ式へと発展推移する。明らかに宿毛Ⅱの段階で北と南が分裂を示し、北は福田KⅡ式、南は宿毛Ⅱ式として両地方が安定した土器文化圏を形成する。今のところ宿毛Ⅱ式の北限が高知県ショウジガイチ遺跡<sup>註12</sup>にあり、福田KⅡ式の南限は愛媛県岩谷遺跡にある。平城貝塚に出土の宿毛式は、その特徴から宿毛Ⅱ式の範ちゅうで理解されるものであり、当地がその文化圏内にあったことが知られるのである。

縄文土器型式編年的には、平城式は宿毛式の次に位置づけられるもので、宿毛式(後期前葉)→平城式(同中葉)となるが、これをさらに細かくみると宿毛(新)の宿毛Ⅱ式→平城式(古)の平城式第1類土器、ここでいう平城式第1群土器となる。

この第1群土器は、次に記す第2群土器と共に従来は、同一時期として理解されていたものである。それも片粕遺跡の発見によって平城式第2群土器が器形、文様の特徴から後期後葉片粕式の祖形になることが明らかとなってから、平城式第1群は第2群に先行することが判明した。すなわち、その推移を平城式第1群→平城式第2群<sup>註13</sup>と考えた。しかし、それらは層位的に把握されたものでなく不安を残すものであった。

今回の発掘調査では、それについての層位的実証に一つの期待をかけていたが、貝層が薄く、その点について確かめることができなかった。しかし結果的には第2群土器が、第1群をはるかにしのぐ主体的な出土を示し、ここが平城式第2群土器を中心とする生活の場所そのものであることが知られると共に、第1群土器が第2群と分離されることが判明し、それぞれ1時期を画するものであることが明らかとなった。

平城式第1群と第2群土器は編年的に先後関係にあることは既述のとおりであるが、これらは漸移的変容を遂げたものであって、第2群を主体とする中に先行する第1群がわずか伴うことは、ごく自然といえよう。宿毛式が平城式に若干伴うこともその意味では同じである。

さて、平城式第1群土器は宿毛Ⅱ式を祖形とするもので、2本沈線が先端部でからむ



入組文、磨消縄文手法、地文の縄文がRしであることなどは、祖形からの伝統をすなおに踏襲するものである。ただ平城式には、宿毛式で深鉢の頸部が緩く外反する形状を保っていたのがここではそれを強め、その部分に橋状把手、波状口縁の頂部を瘤状突起などで飾るなどの宿毛式では見られなかった平城式独自のものへと変化を示す。また橋状把手を持たぬものでは波状口縁直下の頸部に特徴的な巻ひれ状の入組文が描かれ、胴部では、逆三角形文が大きく曲線で描かれて、その中を渦巻き入組文で飾るなど平城式第1群土器独自ともいえる文様構成の成立を見る。器形が口縁直下で「く」字状に内折する鉢形は、従来の資料に見られぬもので、新器形のものである。

これらの出土遺跡を西四国で見ると、平城貝塚を中心に、高知県の宿毛貝塚、片粕遺跡など海岸を南下分布するコース、一方、四万十川中流域にある愛媛県岩谷<sup>註14</sup>、高知県広瀬<sup>註15</sup>と、愛媛県久万町父二峰<sup>註16</sup>、同芋坂遺跡などの瀬戸内西南斜面の山岳地帯に孤立する分布が見られる。これらの遺跡<sup>註17</sup>に出土の遺物は、どれも断片的で、平城のそれにとっても及ぶものではない。対岸の大分・宮崎両県では、小池原貝塚を筆頭にコウゴ一松<sup>註18</sup>、西和田貝塚<sup>註19</sup>、立石貝塚<sup>註20</sup>、森貝塚<sup>註21</sup>、大溜遺跡<sup>註22</sup>など海岸部にその多くが並列する。これらの遺跡<sup>註23</sup>に出土の平城式第1群土器も、まとまった資料を小池原にみる他は、その遺物内容は平城貝塚をけっして凌ぐものではない。

以上のように平城式第1群土器分布は、豊後水道をはさみ両岸にみられるのであって、この範囲内は、相互に親近関係を保っていたことが知られる。本貝塚における平城式第1群土器分布の中心については、昭和29年度発掘の分に良好な遺物を主体的に出土していることから、その場所にあったことが想定されよう<sup>註24</sup>。

平城式第2群土器は、今回出土の平城式土器では主体をなし、これが第1群に後続することは前述したとおりである。本群土器が示す第1群からの移行は実にスムーズである。口縁部に描かれる文様構成は、第1群からのそれをそのまま踏襲しながらも、第2群では、文様集約部の発達著るしく、同心円、渦巻文の形成となって、その多用をみる。しかし、第1群で特徴の波状口縁頂部の瘤状突起や橋状把手は、ここでは消失する。第1群の口縁文様集約部直下の頸部を飾る入組渦巻文も第2群では縦位に流れる4～5条の短直線と変化し、あるいはそれを持たぬ完全無文の頸部となる。その文様変化の過程を示したのがFig. 51である。1～3までは第1群土器で、内1はその典型で、整然とした入組文を示す。2は、幾分か直線化のきざしを見る。3では短直線と曲線文を交えた構成で、4へと向う直前の様相を呈する。

口縁文様帯は、第1群に比べやや幅広で、外側肥厚の断面形が「く」字状を呈し、その口縁器形が第1群で波状が勝っていたのに比べ、ここでは平縁が優先する。

口縁、胴部文様が磨消手法ではなく、縄文地に直接描かれるのを本群の最大の特徴とするが、その胴部に描かれる大ぶりの連続波状文も、第1群磨消縄文深鉢にみる胴部文様からの変化である。第1群で見られる複雑な構成は、ここでは単純化され、曲線と直線を交えた構成で一種の幾何学文となっている。中には胴部連続波状文の各区画内中央

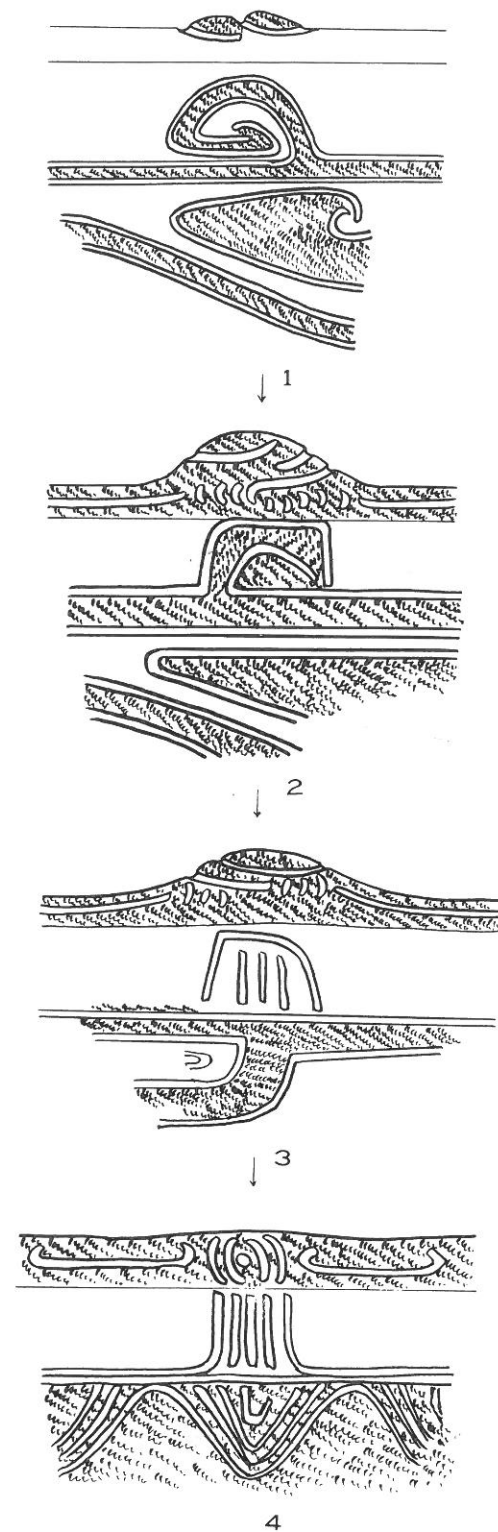


Fig. 51 平城式頸部文様変遷図

を縦位のS字文で飾るものを見るが、これは第1群胴部の渦巻文の変化したものである。<sup>註26</sup>

鉢形は、従来その様相が明らかでなかったもので、今回は、良好な資料に恵まれ、器形、文様構成の把握がなされた。これ以外の資料で、口縁直下で「く」字に内折し、口縁を取り巻く文様が入組文の退化した横位に流れる曲線文、あるいは大ぶりの連続波状文となったものを第Ⅲ次のものに見る(Fig. 52)が、これらの祖形は、前述の第1群鉢形(Fig. 36-17)にそれが求められるものである。

この鉢形が深鉢のセットになることはここに述べるまでもないが、他の第3群～第6群までも、その出土状態から、これに付随するものとみて大過ない。

以上、平城式第2群土器が、第1群からの推移によるものであることについては、理解いただけただかと思う。これらのいわゆる縁帯文土器といわれる土器群については、瀬戸内を中心とした西日本のほぼ一帯に分布し、各々が共通する要素を持ち合わせている。この共通性は、文化圏を越えた接触が相互に保たれていたためと考えるが、しかし、微細に観察した場合は、それぞれの地域で異なる特有の要素を持っていることに気付く。この相違は、各地域で異なるその祖形(集団)に起因するものと考えられる。第2群土器が津雲A式(三里式)<sup>註27</sup>に同類でありながらも、それに含まれないのは、その点を異にするか

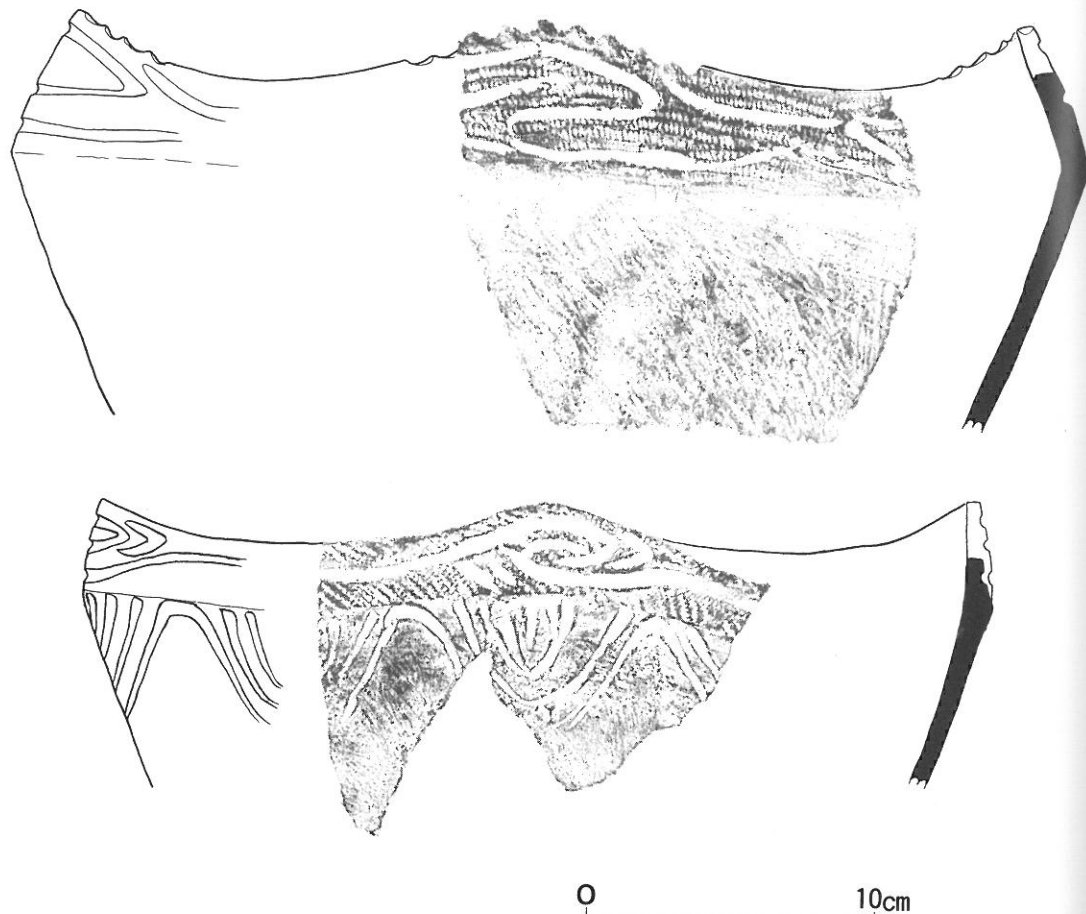


Fig. 52 平城式第2群鉢形土器(第3次発掘資料)

らである。

平城式第2群土器は、平城式第1群土器の出土する範囲内に分布するのであって、その分布圏を豊後水道両岸の広範囲に持っている。東九州ではコウゴ松や森貝塚にまずまずの資料を見る他は、どの遺跡も断片的資料にとどまり、器形、文様構成の全体把握にはほど遠いものである。その意味からも今回の第2群土器は貢献され得る。

5. 片粕式土器は、前述の平城式第2群土器を祖形とするものである。今回は、微量な出土で良好なものに恵まれてないが、本貝塚におけるこの土器は、けっしてこの様なものではない。それについては、犬飼によって既に報じられて明らかなように、その分布の中心を発掘区対岸の県道(旧国道56号線)を越えた北側一面に持ち、貝塚を形成するものである。

片粕式土器の文様や器形には、祖形からの伝統を随所に認めるものの後続の広瀬上層式、伊吹町式にみる一般的特徴をも兼ねそなえたものである。

片粕式では、その文様も全体的に直線化し、祖形にみられた胴部を連続波状文で描く構成は、連続山形文と変化する。この直線化の傾向は、後続土器で、さらにそれを強める。ただし区画内中央にS字文、縄文地に直接文様を描く手法は、祖形からの伝統をそのまま踏襲するものである。また本式土器の口縁に多用される小刻みの連続波状文も祖形の胴部連続波状文にその原形が求められる。主体となる深鉢の器形は、祖形からほぼそのまま引きつがれながらも口縁部では器肉を薄め「く」字口縁がより明瞭化し、頸部も完全無文となる。この特徴は、後続土器にそのまま踏襲される。

本式土器の波状口縁頂部に横「S」字状、蛇行状の粘土組貼付文を多くみるが、この手法は、祖形からは直接たどれぬものの平城式第1群の瘤状突起に類似するものであって、この変化しながらも復活と考えてよいものである。

地文となる縄文の撚り方向はRL・LRともに見られ、前者は先代からの伝統であり、後者は新しく登場した要素である。この両者の割合は、後者を優先するものである。ここに縄を撚るという技術面で、一つの変化が起っていたことの実態を知ることができる。この原因解明については急がれるものの、なにさま比較資料があまりにも少なく、その増加を待つほかない。ただ、この時期に平行あるいは若干先行する桑飼下式(京都府舞鶴市桑飼下遺跡)<sup>註28</sup>では、器面を飾る縄文がLRを絶対優先し、共通する内容を認める。文様手法も縄文地に直接描かれるものが多く、その構成に片粕式を彷彿させるものがある。また中には平城式第1群系土器も若干出土している。どうもこれらの内容からみて、片粕式には桑飼下遺跡を含む東方からの文化的影響が加わっているように思われてならない。いずれにしても、この件については今後追求すべき重要課題ともいえよう。

さて片粕式期には、平城貝塚と片粕の2個所に主体遺跡がまたがっている。これは集団の分化を示すものと考えてよいであろうし、片粕の地にも漁撈主体の定住的集落が形成されたことを意味するものであろう。

遺跡は、これだけでなく、本貝塚から直線距離で85kmの高知県新土居遺跡<sup>註29</sup>や、周辺で、

は宿毛貝塚、広瀬、岩屋などに散見できる。これらの遺跡に出土の遺物は比較的少なく、狩猟あるいは、淡水漁撈を含むそのキャンプサイトの性格を持つもののように思われる。新土居遺跡のような例は、その移動を陸路より、海上のルートで行なわれたと考えるべきであろう。

片粕式土器も、その多くが平城式を出土の遺跡に重複し、分布圏の中心を西南四国に持っている。西四国北部のこの時期は、津雲A式を祖形とする上野Ⅲ式土器が分布する。東九州でも近年、片粕式土器の出土が報じられているがその出土は平城式土器分布圏にあることからすれば、当然といえるし、今後も片粕式土器資料の増加は期待されよう。

広瀬上層式土器を出土する遺跡は、高知県広瀬にまずまずの資料を出土する他は、今回の例も含めてどこも貧弱である。これは本式文化期での衰退と、その期間が小期で終結したことを物語っているのではなかろうか。器形、文様構成には、遺物の項で述べたとおり、片粕、伊吹町両式の要素を具備し、その折衷型式とでもいえるものである。今回の資料には、口唇部に紐状隆起文が小さく貼付けられたものを含むが、これなどは、貼付けさえなければ伊吹町式に編入してだれもとがめるものではない。

広瀬上層式土器の分布も片粕式の例にもれず、平城式を出土する遺跡に重複するものであり、もちろん東九州からの出土も知られている。

広瀬上層式からの移行を示す伊吹町式は、資料は少ないものの確かなものである。これらも器形、文様共に祖形からの伝統を変化しながらも踏襲するが、特に縄文の撚り方向に限ってはRLに対しLRが勝った片粕式からのパターンをそのまま受け継ぎ注目される。また色調赤褐色で、粒子の細かな胎土、光沢を持つ器面、堅い器質を有するなど本貝塚、片粕、宿毛貝塚、橋上、広見遺跡に見られる伊吹町式土器共通の特徴で、祖形からの製法技術の伝達がうかがえる。これに対し、標式遺跡の宇和島市伊吹町遺跡では、胎土荒く、焼成不良、灰・黒褐色を呈するなど西南部のそれとは様相を異にする。本式土器の出土で有力な岩谷遺跡の資料もこれと全く同質である。

この様に本貝塚を中心とする南北で器質の異なるあり方については将来検討すべき課題といえる。可能性として、北部のそれは、集団、あるいは土器系譜が別に求められるものであるかもしれない。いずれにしても、この時期には九州西北部では鐘が崎式からの系譜にある西平式が盛行し、それは本式土器と区別つけにくいほどに共通するものである。

本貝塚の後期は、伊吹町式土器をもって終了し、次に黒土BⅡ式土器が示す晩期後半の土器がみられるにすぎない。

資料はただ一点で、生活の痕跡を知るていどにとどまるが、このタイプ土器は、同じ凸帯文土器を出土する西南四国の中村Ⅱ式とは若干趣を異にするものである。大体において、この手の土器分布は、瀬戸内に面する北斜面に中心を持つものであって、南四国では東部にその出土を見るものの西部では、それを見ないものである。凸帯文土器出土遺跡を周辺地域でみると広見、岩谷、茶道、橋上、有岡、本貝塚の例と6個所が明らかである。この内、有岡が沖積平野を望む低湿地に、他は洪積段丘上、あるいは河成段丘

上に立地する。なお西南四国における晩期縄文文化については、本格的になされたものがなく、今一つ様相が判然としない。これについての研究もそろそろなされてよい時期である。

晩期で本貝塚の縄文時代は幕をとじるが、弥生時代を迎えては、その後期にのみ生活の形跡を認める。その遺物は少なく、小規模、短期間の住まいであったことが知られる。

本貝塚は、弥生時代以後、一時人の住まない場所となるが、歴史時代になって再度本貝塚での生活が認められる。鎌倉時代～室町時代の土師質小皿、坏、常滑焼の甕がそれである。これらは日常生活容器として使われた雑器である。

結局、本貝塚は、縄文時代10期、弥生時代2期、鎌倉・室町時代と14期の時期を異にした文化遺物が検出されたことになる。なお、主体となる縄文土器を編年的、系統的に表示すると次の如くなる。

第8表 平城貝塚第4次縄文土器編年位置

◎多量 ○少量 ○微量

|    | 西北九州              | 東九州   | 平城貝塚<br>第4次                | 西 四 国                                       |   |   | 山陽筋                              |
|----|-------------------|---|----------------------------|---|---|---|----------------------------------|
|    |                   |   |                            | (西南部)                                       | (南部)  | (北部)  |                                  |
| 早期 |                   | 早水台   | ○                          | 穴神第9層<br>中津川第4層B<br>穴神第4層<br>中津川第4層A        | 不動カ岩屋I<br>不動カ岩屋II<br>城の台                            | 上黒岩 I<br>上黒岩 II                             | 黄島                               |
|    |                   | 轟 A   | ○                          | 茶堂・深泥                                       | 影野地Z<br>不動カ岩屋III<br>広瀬Z<br>玉屋敷                      | 水崎 Z  | 羽島下層<br>磯の森<br>彦崎Z<br>田井         |
| 前期 |                   | 轟 B   | ○                          | 宿毛 C<br>片粕 C                                | 永野 C<br>広瀬 C  | 水崎 I  | 船元 I<br>船元 II<br>里木 II<br>福田 C   |
|    |                   |   | ○                          | 下益野 I<br>宿毛 II<br>宿毛 II<br>平城式第1群<br>平城式第2群 | 下益野 II<br>宿毛 II<br>三里川原谷<br>片粕上野 III<br>広瀬上層<br>伊吹町 | 六軒 I<br>小松川 II<br>六軒 II<br>川原谷 III<br>上野 IV | 中津崎<br>福田 K II<br>津雲 A<br>彦崎 K I |
| 後期 | 鐘が崎<br>北久根山<br>西平 | 小池原下層<br>小池原上層<br>コウゴ松類a・c<br>夏足原<br>松ノ木<br>小牧<br>三万田<br>御領 | ○<br>◎<br>◎<br>○<br>○<br>○ | 片粕 C<br>伊吹町<br>有岡 K                         | 片粕 C<br>伊吹町<br>有岡 K                                 | 上野 IV                                       | 彦崎 K II<br>馬取<br>福田 K III        |
|    |                   | 大黒山<br>石川寺  | ○                          | 中入<br>村田<br>I II B                          | 八反坪   | 山神 III<br>叶浦 B I<br>叶浦 B II<br>叶浦 B III     | 中山 B<br>黒土 B I<br>黒土 B II        |

以上、縄文期の土器を主体に、その考察を試みたが、これで分るとおり、平城貝塚での盛行は、なんといっても後期中葉、平城式期にあり、それも今回は、従来、平城式第2類として分けられていた一群の土器、ここでいう第2群土器にあったことが明らかとされた。そしてこの土器は、宿毛式の発展形態、平城式第1群土器を祖形とし生成されたものとした。第2群土器からは、片粕式、広瀬上層式、伊吹町式の後期後半まで連続と祖形からの伝統を一部に保ちつつ推移したことを述べた。

これらの平城式期を中心とする後期土器文化の発展は、自然遺物の内容で明らかな様に、狩猟も盛んであったものの漁撈にその主因があったと考える。特に魚類相からは、御荘湾はおろか豊後水道にかけて広範な海域での活動が想起される。

これを背景とした文化は、西南四国を生活領域として瀬戸内海地方とはやや異なる独自のそれを形成するに至る。一方、これと同じ様相を宮崎県東部を含む東九州に認め、これらの地方が本地方に歩調を合わせ共通する文化内容を保有し推移していったことを定義付けた。筆者は、この範囲についてを、今後「豊後水道後期縄文文化圏」と呼称し、表わして行きたいと考えている。もちろん本文化圏成因の背景には、豊後水道一帯での漁撈活動と姫島産黒曜石交易の中で成されたことは論を待たない。

当然、本文化圏と隣接する地域では、その地方独自の文化に根差したものが展開し、その接点では、それらとの交錯した複雑な様相を認めることができる。たとえば九州における本文化圏の北部境界、宇佐平野では、福田KⅡ式からの系譜にある鐘が崎式が平城式と混在し、あるいは南四国の三里式には平城式第2群土器の要素が顕著に認められるなど、この文化圏における接点での様相については、<sup>註35</sup>今後研究すべき問題を多く残すものである。

#### 註

1. 岡本健児・広田典夫・木村剛朗『高知県三里遺跡』中村市教育委員会、昭53年。
2. 近くに報告書刊行予定。
3. 岡本健児「採集経済の行きづまり—縄文時代の晩期—」『高知県史考古編』昭43年。
4. 岡本健児・広田典夫・木村剛朗『高知県片粕遺跡』高知県文化財調査報告書第19集、高知県教育委員会、昭50年。
5. 西田栄他『岩谷遺跡』岩谷遺跡発掘調査団、広見町教育委員会、昭54年。
6. 大山正風・草地牲自『中津川洞』第3次発掘調査報告書、城川町教育委員会、昭51年。
7. 木村剛朗『高知県梶原の縄文遺跡と遺物—県西部縄文期の内陸部における一様相』土佐考古学叢書1、昭53年。
8. 木村剛朗『姫島産黒曜石の交易—九州姫島産黒曜石よりみたる西四国縄文期の交易圏—』土佐考古学叢書2、昭53年。
9. 賀川光夫『大分県の考古学』東京、昭46年。

10. 岡本健児「高知県縄文式土器型式編年論」『高知県史考古編』昭43年。
11. 資料提供を犬飼徹夫氏から受けた。
12. 註7に同じ。
13. 註4に同じ。
14. 註10に同じ。
15. 岡本健児『高知県広瀬縄文遺跡の調査』高知県文化財調査報告書第13集、昭38年。
16. 西田栄「愛媛県下の縄文式土器についての一試論—中四国及び九州の接点としての在り方—」『愛媛大学紀要』第一部、第六卷第二号、昭36年。
17. 註16に同じ。
18. 賀川光夫『小池原貝塚』大分県文化財調査報告書第13輯、大分県教育委員会、昭42年。
19. 賀川光夫・橘昌信『コウゴ—松遺跡調査報告』大分県直入郡久住町教育委員会昭49年。
20. 坂本嘉弘他『石原貝塚・西和田貝塚—大分県宇佐平野周辺の縄文時代貝塚の調査—』宇佐市教育委員会・大分県教育委員会、昭54年。
21. 賀川光夫・橘昌信・清水宗昭他『立石貝塚』大分県文化財調査報告第31輯、昭49年。
22. 註20に同じ。
23. 石川恒太郎『宮崎県の考古学』東京、昭43年。
24. 鎌木義昌・西田栄『伊豫平城貝塚』愛媛県御荘町教育委員会、昭31年。
25. 図No.1～3は、第1次と第3次に出土の資料中にみられるもので、筆者なりに図化したものである。
26. 草地牲自「平城貝塚第3次発掘調査概報」愛媛の文化第13号、昭48年。
27. 岡本健児・広田典夫・木村剛朗『高知県三里遺跡』中村市教育委員会、昭53年。
28. 渡辺誠『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館、昭50年。
29. 岡本健児・木村剛朗『新土居の遺跡と遺物』葉山村教育委員会、昭51年。
30. 犬飼徹夫氏の御教示と資料の提供を受けた。
31. 高橋信武「片粕系土器の細分に向けて」『赤れんが』創刊号、昭56年。
32. 岡本健児・広田典夫『高知県広瀬遺跡第2次調査報告書』十和村文化財報告書、昭48年。
33. 木村剛朗「高知県宿毛市橋上遺跡とその遺物」『古代文化』第29巻第6号、昭49年。
34. 木村剛朗「愛媛県南宇和郡広見縄文遺跡と出土遺物」『古代文化』第24巻6号、第6号、昭47年。
35. 註20に同じ。

## あとがき

四国の西南端、高知県境にほど近い御荘町平城商店街の一角に位置する「平城貝塚」は、世に知られて久しくなりますが、この発見は、明治24年（西1819）のことです。このことは、私たち郷土御荘町にとっても記念すべき年です。発見者の寺石正路先生は、高知の人で、当時24才の若き学究の徒にすぎませんでした。しかし、この貝塚の発見研究は、まもなく「四国島貝塚」と題し東京人類学雑誌の第67号に発表され、一躍日本考古学界にその名をしられたのであります。この発見の年から14年前の明治10年には、米人エドワード・モースによって有名な大森貝塚の発見がなされていますが、彼の研究は、実に近代日本考古学の草分けであり日本の歴史に偉大な業績を残したのであります。寺石先生のこの発見も同じように四国は勿論、広く西日本一帯にわたった考古学の進展を今日的なものにしたといっても過言ではありません。

以来 100年近い間多くの同好学究の人々は、この恩恵のもとに今日に至ったのであります。今回の発掘調査は、一般には第4次調査とされるものでありますが、従来のそれと異り初めての学術調査であったことに大きな意義があります。さいわい町当局とりわけ町教育委員会の熱意ある構想計画により町文化財保護審議委員会を中心とした発掘調査団が編成され、高知県中村市右山に居住される木村剛朗先生（日本考古学協会）を調査主任として委嘱、併せて多くの協力者のお力を経ながらまさに郷土の歴史的発掘調査でありました。考えますと発見者の寺石先生と同郷の木村先生によって、その全貌が明らかにされたということは、くしき因縁と思われてなりません。行政区を異にする愛媛・高知両県ではありますが、太古から隣接した地形上その文化や風土のすべてが類似したものがあっても不思議ではありません。わけても原始の昔には、あらゆる文化の交流や、民族の移動があっても、あたりまえのことと思われるのであります。

第1次の調査は、昭和29年2月で前愛媛大学教授の西田栄先生や当時倉敷考古館在勤の鎌木義昌先生方の研究者による貴重な研究がなされ、「伊予平城貝塚」として町教育委員会から発行されています。次に第2次とされるものは、昭和37年10月でしたが、この発掘は、貝塚指定地に隣接した元御荘町長だった前田茂男氏の店舗改装工事現場で、あわただしい工事のためにその学術的記録はなされず、ただ工事現場や、捨てられた土砂の中から多くの土器片をはじめ石器等の文化遺物と獣骨・魚貝類などの自然遺物の採集にとどまったものであります。ところで第4次調査では、たまたま四国銀行御荘支店が店舗改築された隣地を同店専用駐車場として、舗装工事されるごく短期間のものでしたが、今回発見された三体の人骨中一体は第2次の現場に当時確認されながら発掘にいたらなかったもので、20年前の記憶をもとに再び脚光をみたのであります。この外、平城人らの住居址と思われる柱穴の発見もあって大きな成果をあげることが出来ました。

第三次は昭和48年10月で、この調査の概報として「愛媛の文化」第13号に草地牲自先生の記載をすることができます。ただ第1次・第3次及び第4次のいずれも四国銀行御荘支店の度々の改修工事にとまなうもので、学術調査という立場からすれば不十分な条件のもとでの調査といえるのであります。このことは、包蔵地帯の主たる地域が平城商店街の中心を占める位置にあることに起因するもので何らかの機会がない限り完全な包含物の確認やその実態を把握することは容易なことではありませんが、反面考古学上からすれば発掘行為は、埋蔵文化財の破壊につながるものでこそあれ、真の遺跡の保存にはならないし、むしろ遺跡保存上からすると好ましいものではありません。

今回出土したもののの中で人骨の発見は、最大の収穫といえましょう。これまでの調査でも人骨の発掘は、たびたびなされていますが、今回のそれは縄文後期のものとして四国地方では、他に例をみない貴重なものであり他に、破損人骨ながら二体の発掘という大きな成果をみ全く幸運の一言につきまします。このニュースは、テレビや各新聞等でも大きく報ぜられ調査団の面目をなしたものです。ところで過去、平城貝塚一帯の人骨発見は、破損ものや部分的なものを合せ約12体をすることができますが、いずれも第1次・第2次発掘のもので、これらは新潟医大の小片教授のもとに鑑定に出されましたが、不完全な人骨のため簡易な報告がなされたにすぎません。しかし今回は、完全に近い人骨であり、併せて徳島大学医学部の山田正興先生を中心に、高知医科大学の山本恵三先生方や権威ある学識者になる綿密な鑑定と、その復元は永久的保存に耐えうる立派なものであり、あつく感謝を申しあげる次第であります。

また自然遺物については、現在東京在住の猪石宏明氏（日本考古学会員）に随分お骨折り願ひ、膨大な資料のもと種の同定を続行中で、今後さらに花粉分析まで展開したいと思っております。さて、それぞれの地域文化をどのように育むかは、今後大きな課題といえますが、なんとしましても市町村の自治体そのものが率先し主体となると共に、お互い住民の一人一人も今少し積極的に町・村づくりに取りくみながら次代の若人らに歴史とは何であるのか!!また文化とは何であるのか!!の意識ある働きかけを推め、文化財とは私たち郷土の独占的なものでなくすべての人類ののこしたすばらしい人間文化の流れであり、共有の財産とせねばならないと思うのであります。今回の調査は、或は最初でありまた最後のものかもしれませんが、終りに、終始本調査に献身的に尽力頂きました木村先生は勿論ですが、県文化振興局の坂本先生をはじめ、西田栄・森光晴・草地牲自・長井数秋・犬飼徹夫・大山正風の諸先生方や、また高知女子大の岡本健児先生方の陰ながらの御協力を感謝申し上げます。

一方地元であります、町教育委員会の事務局の大役を果して頂いた辻内課長や、委員会職員・町公民館職員の方々等併せては、工事中にかかわらず、調査に御協力頂いた四国銀行御荘支店や作業員の皆さんに厚く御礼を申し上げます。

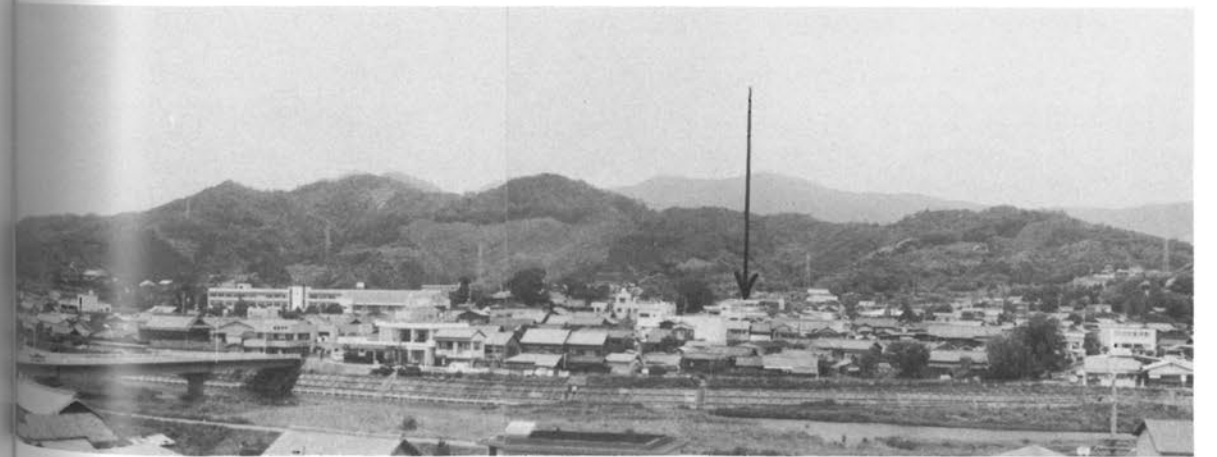
昭和57年7月30日

調査団副団長・町文化財保護審議委員会 委員長 野平啓真

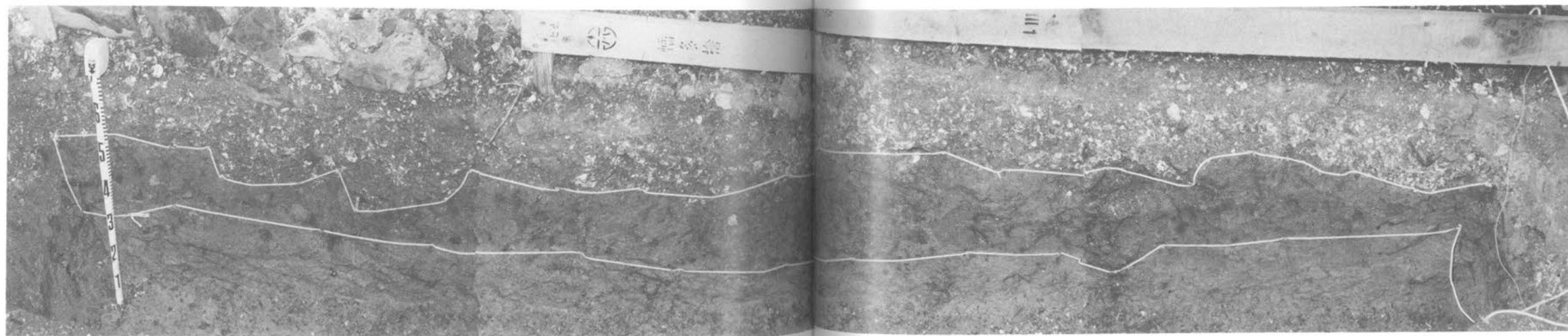
版 圖



(貝塚○印)



PL. 1 僧都川堤防上より北方に貝塚を望む

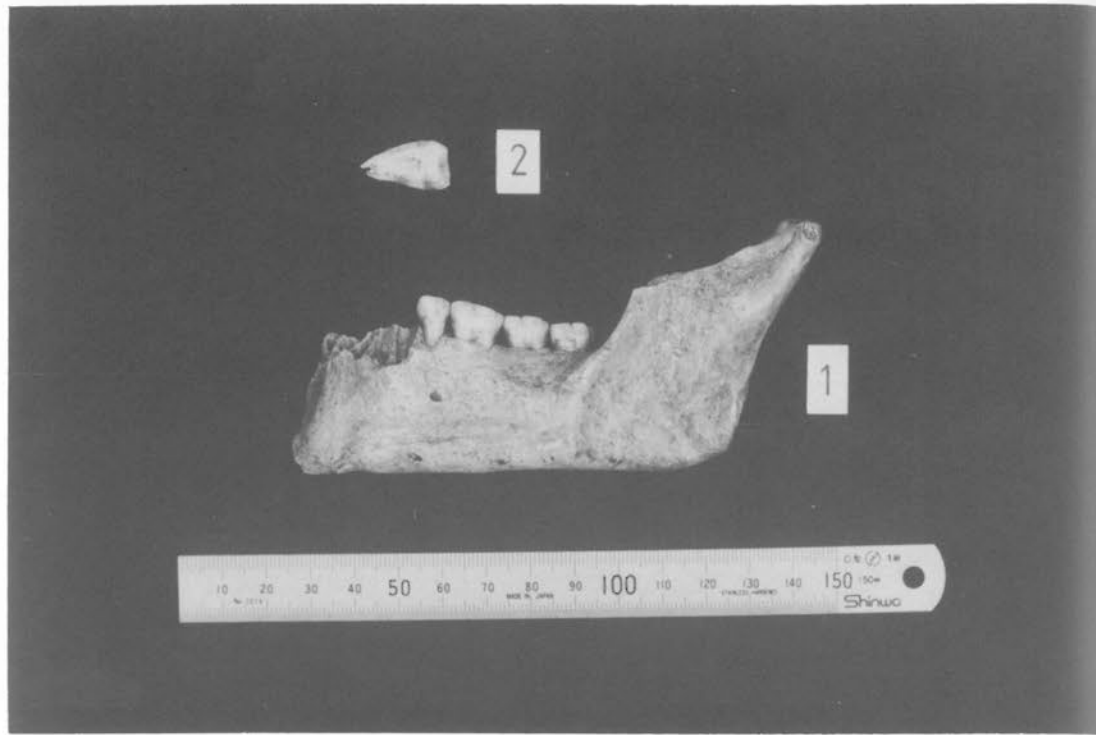


PL. 2 D-0~C-0区北側の壁面



PL. 3 C-0~C-3区西側の壁面



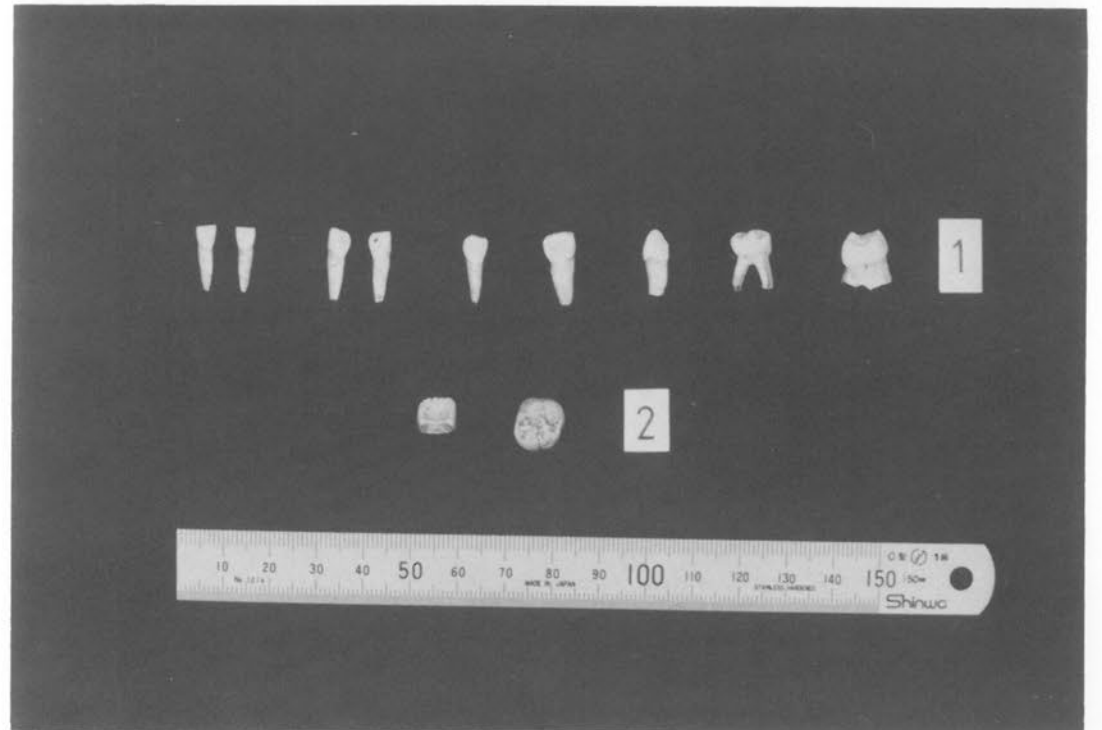
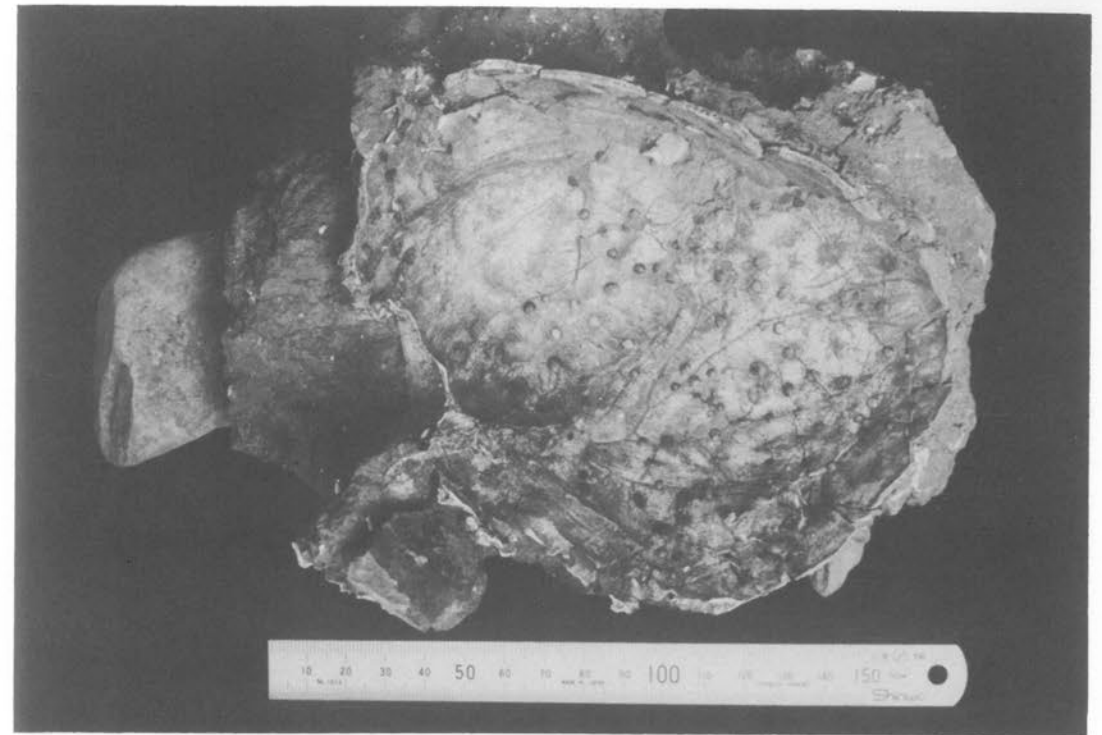


PL. 4 第1号人骨

(1)下顎骨左半側と「5678」外側面観

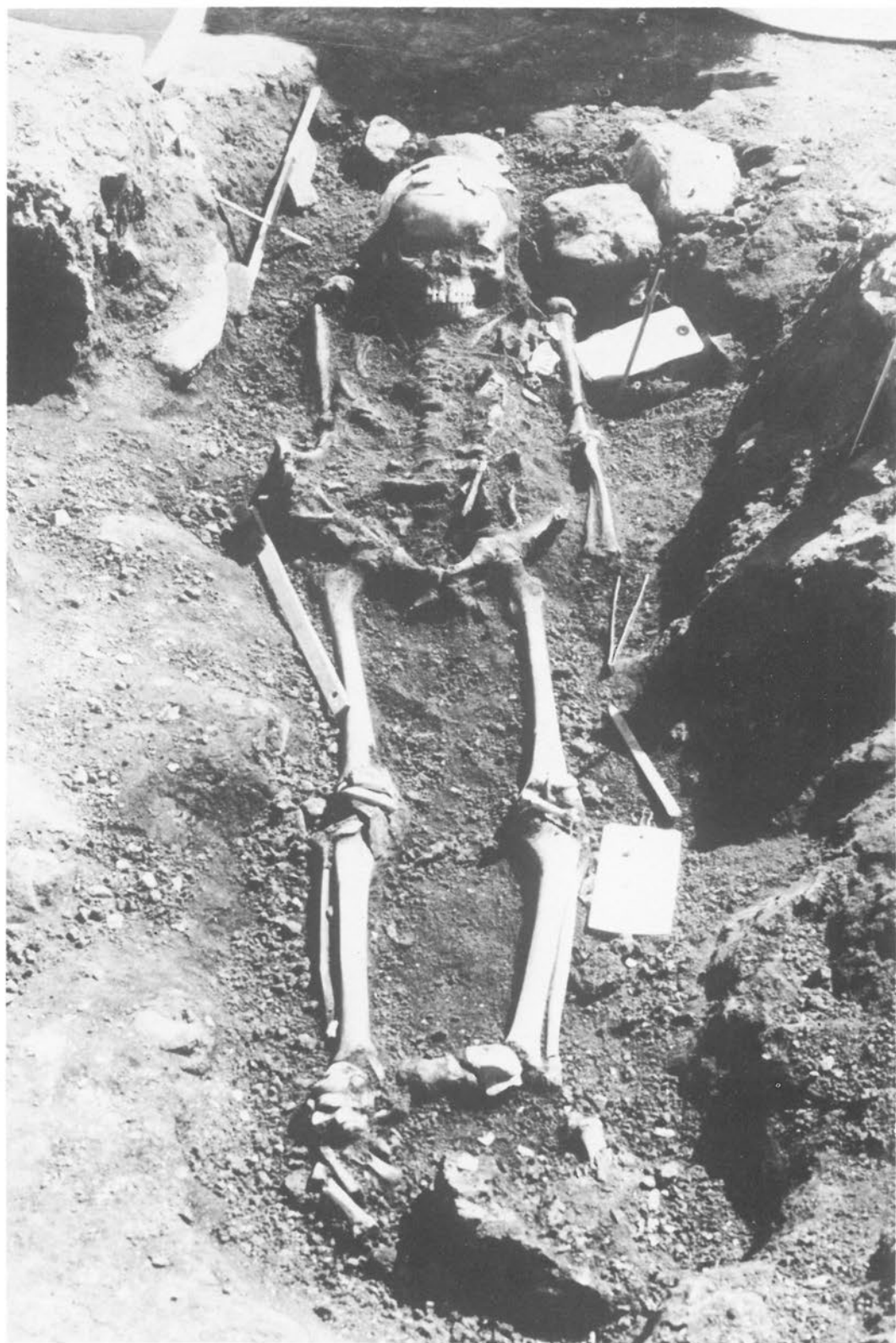
(2)上顎「5」

左鎖骨上面観，左肩甲骨外側角の上面観，左上腕骨頭頸部と右上腕骨遠位端掌面観

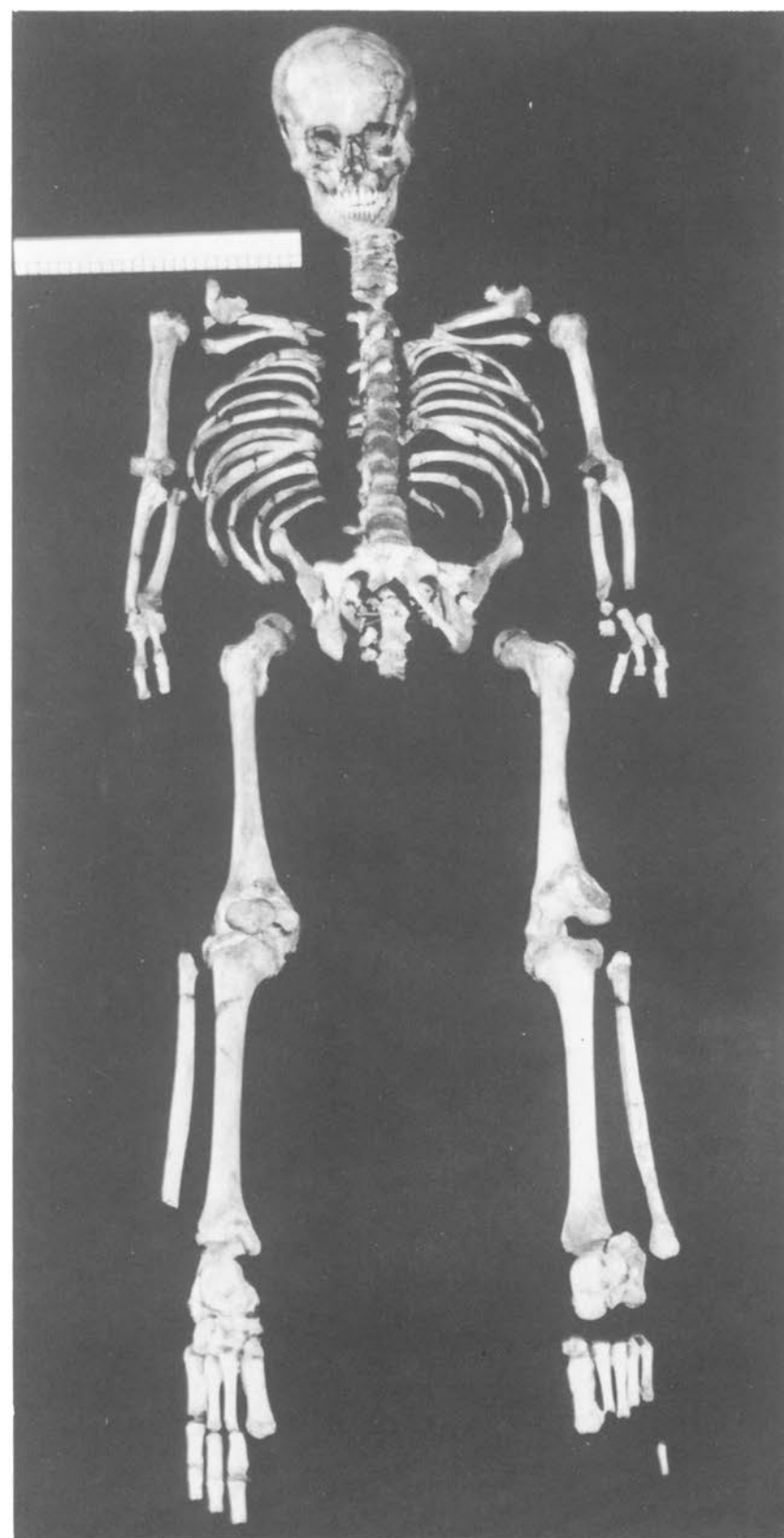


PL. 5 第2号人骨

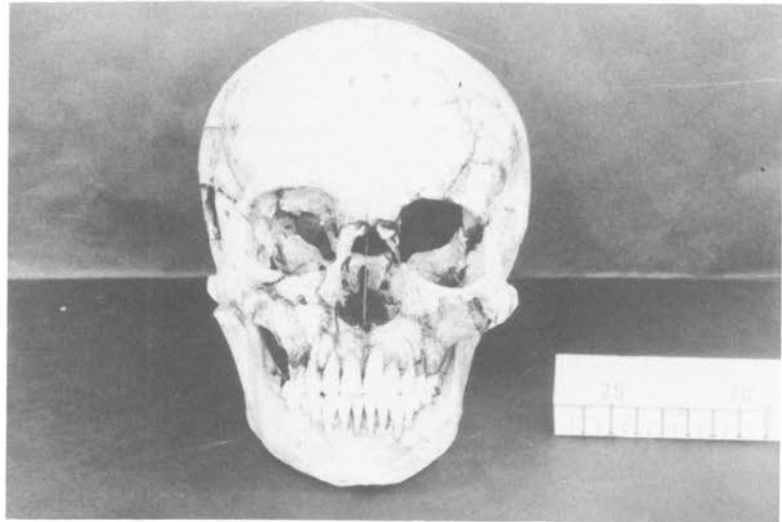
右側頭蓋冠と頭底の一部内景，発掘時の土塊中より露出させたもの。頭蓋底前部外側の土塊中より発見された(1)乳歯  $\begin{matrix} C & B & A \\ A & B & C & D & E \end{matrix}$  (2)未萌出永久歯冠「6 1」



PL. 6 第3号人骨発掘時の配列状態



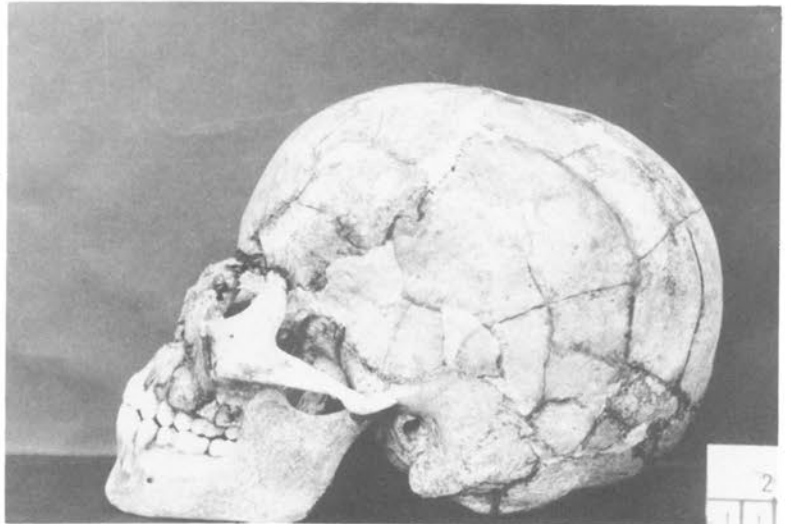
PL. 7 第3号人骨収骨後補修復元後



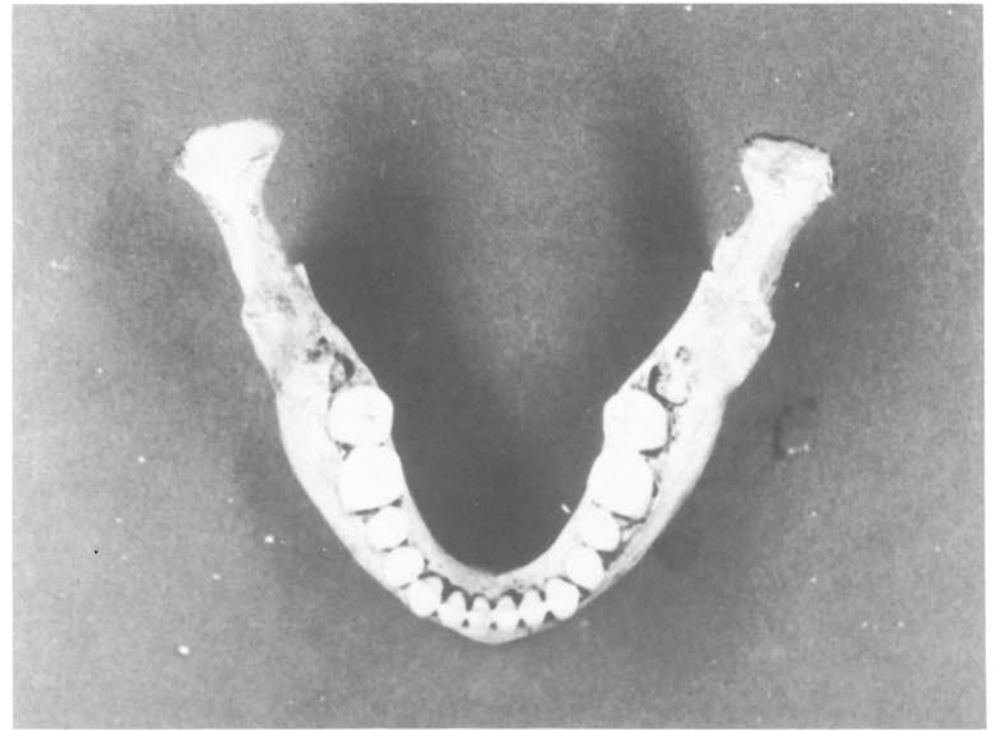
PL. 8 第3号人骨頭骨。  
下顎を鉗子状咬合位に付  
した復元頭骨の顔面観



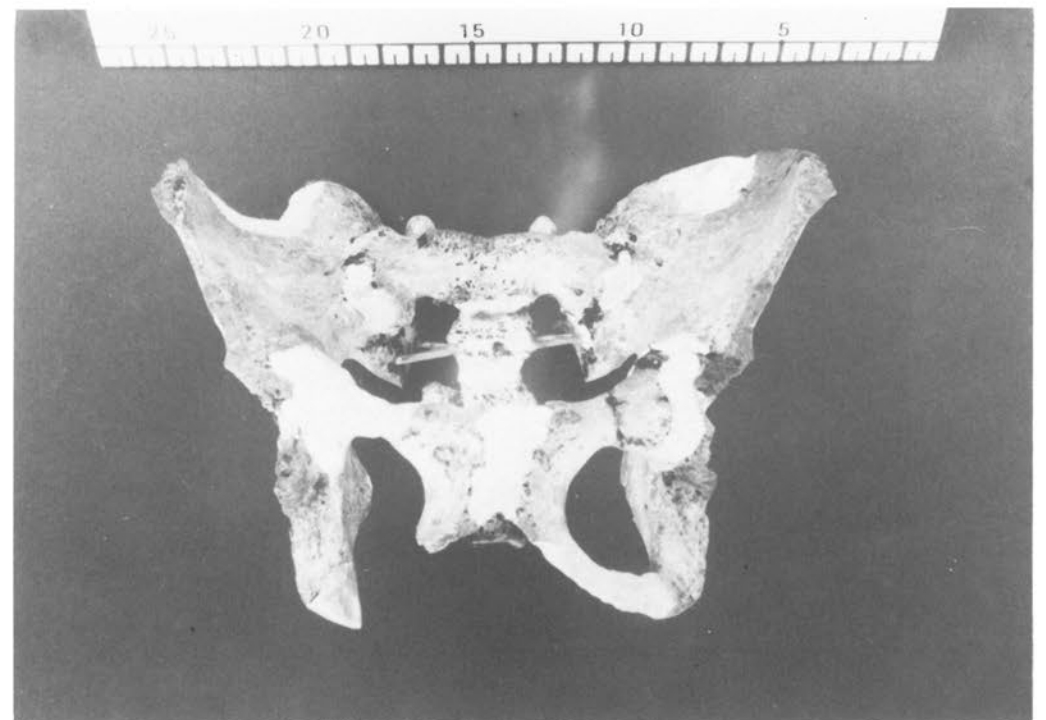
PL. 9 第3号人骨頭骨上  
面観



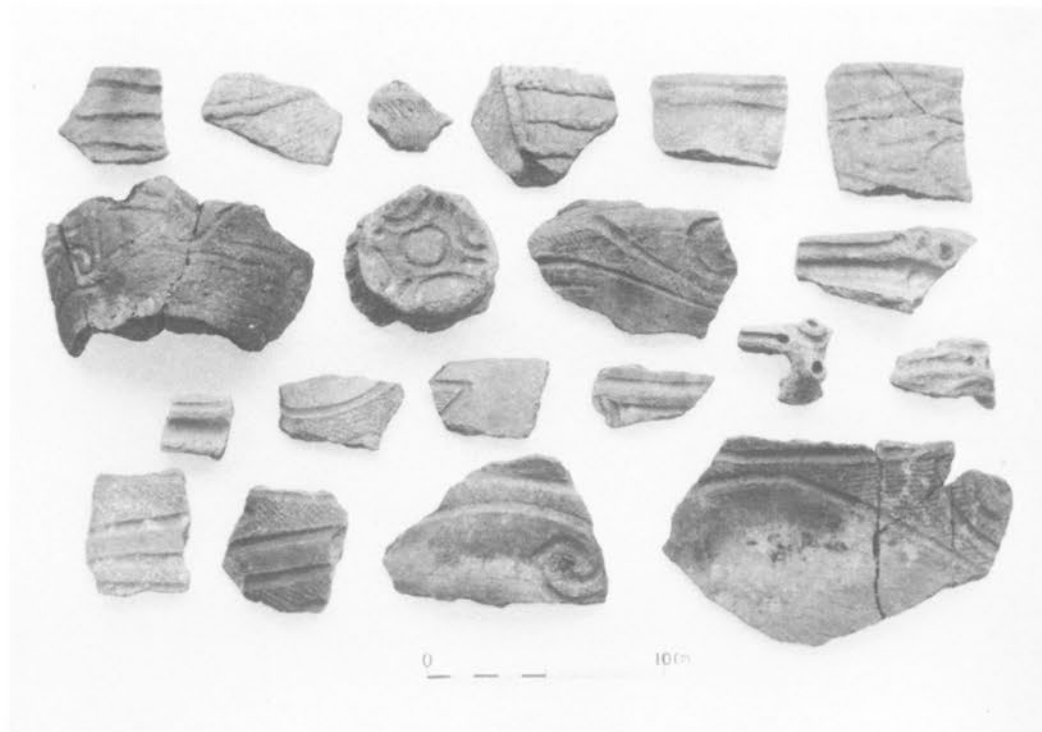
PL. 10 第3号人骨頭骨左  
側面観。  
下顎を鉗子状咬合位に付  
したもの



PL. 11 第3号人骨下顎骨上面観  
7+7:完全萌出 8|8:未萌出



PL. 12 第3号人骨の復元された骨盤, 前面観



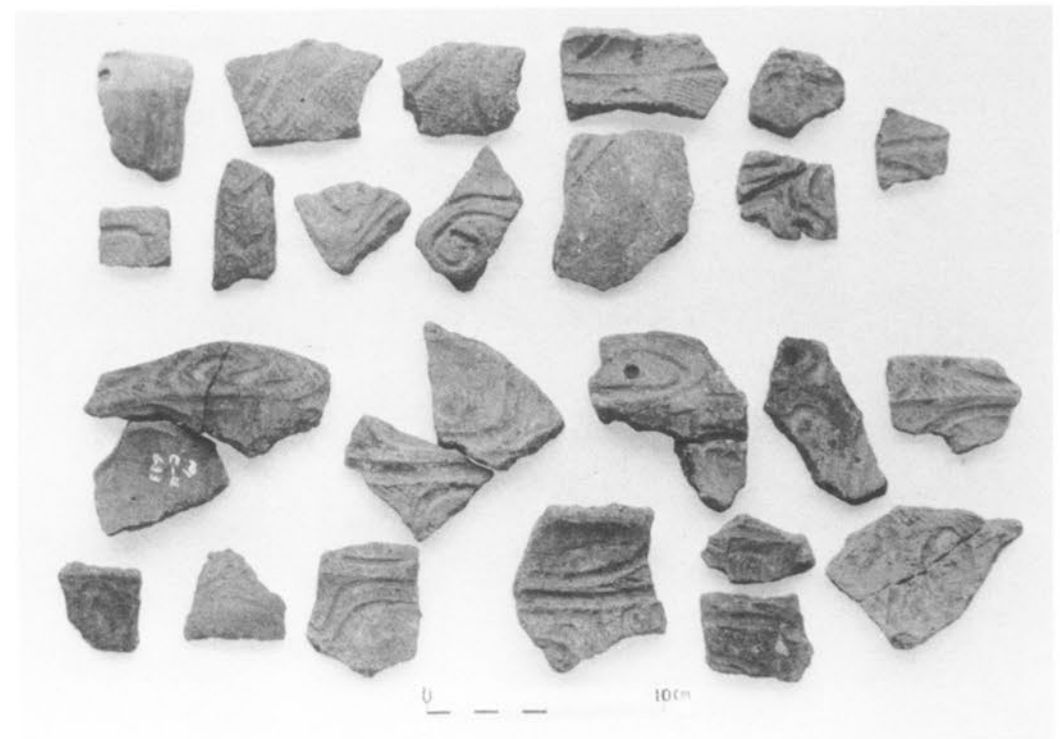
PL. 13 轟B式, 船元式, 宿毛式, 平城式第1群土器



PL. 15 平城式第2群土器a類



PL. 14 平城式第2群土器a類



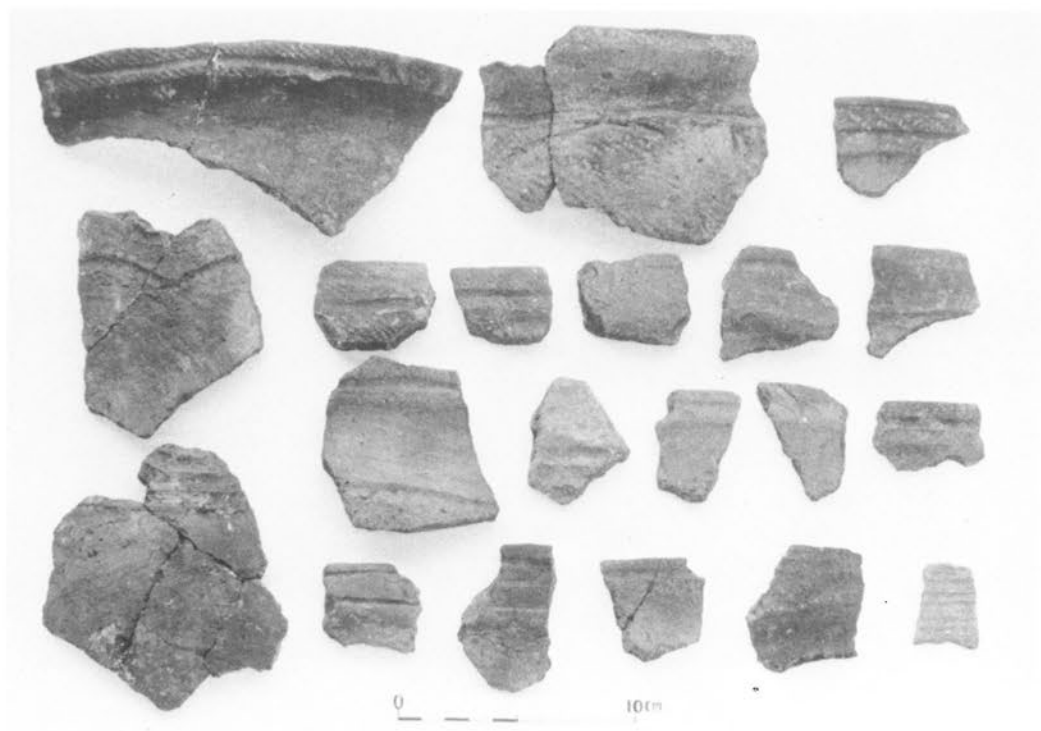
PL. 16 平城式第2群土器a類



PL. 17 平城式第2群a・b類土器a類(最上段左端)他はb類



PL. 19 平城式第3群土器(上2段), 平城式第4群土器(下2段)



PL. 18 平城式第2群土器b類



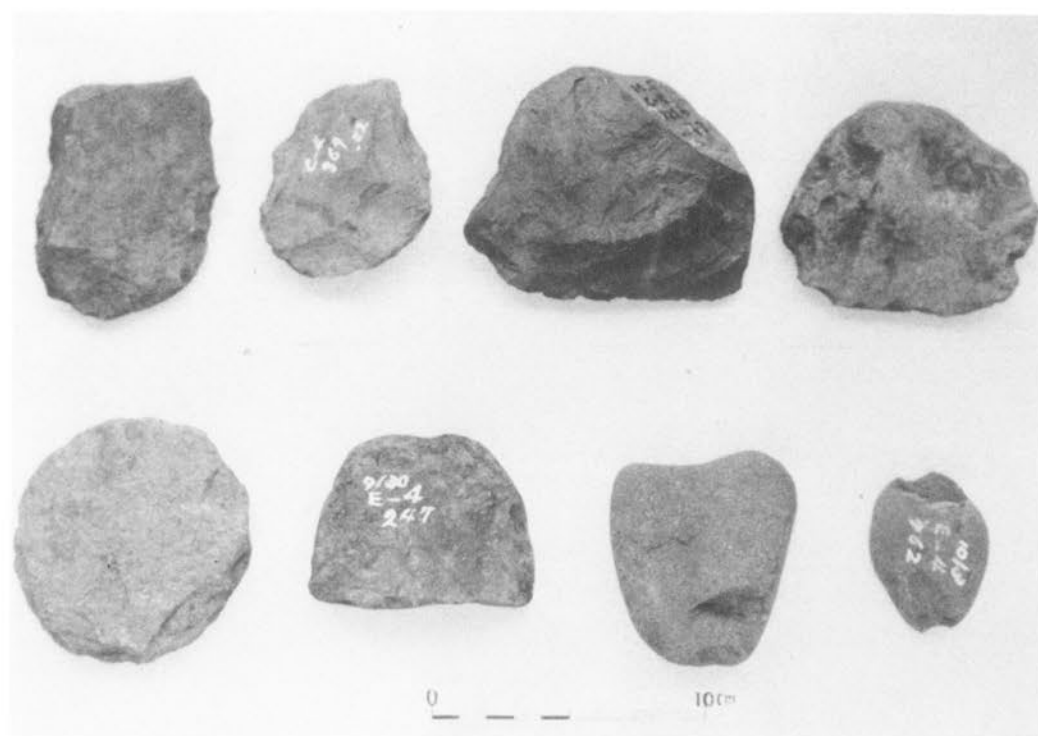
PL. 20 平城式第5群土器



PL. 21 平城式土器底部



PL. 22 片粕式土器(上段), 伊吹町式土器(中段), 黒土BⅡ式・土師質坏・小皿, 常滑甕(下段2列)



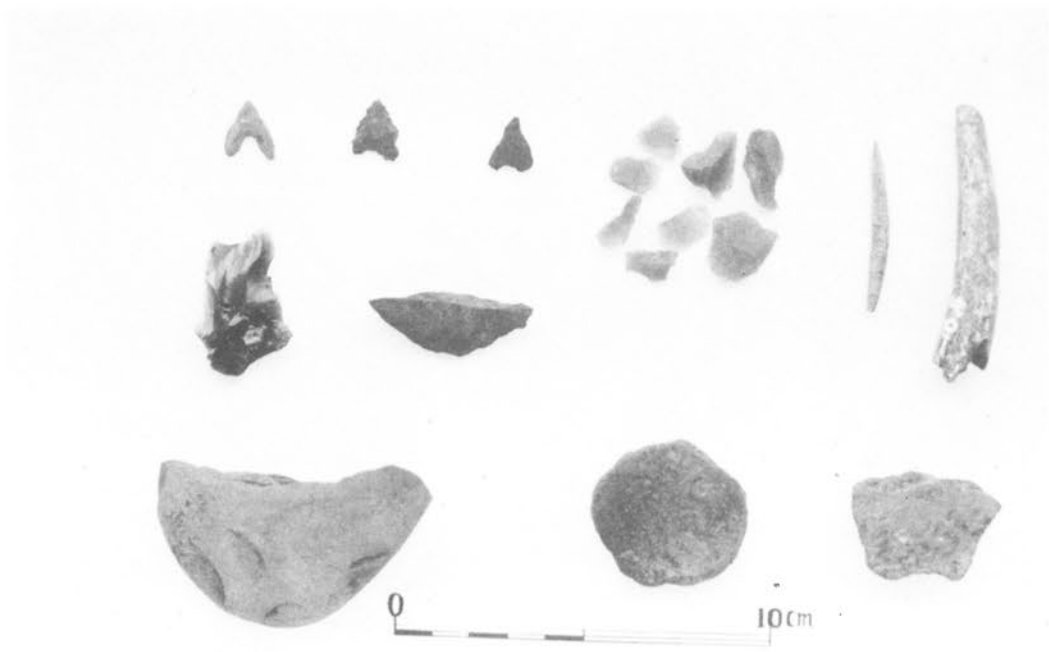
PL. 23 打製石斧(上段), 円盤状石器(下段左端), 石錘(下段左3個)



PL. 24 叩石, 石核(下段右端)



PL. 25 石皿

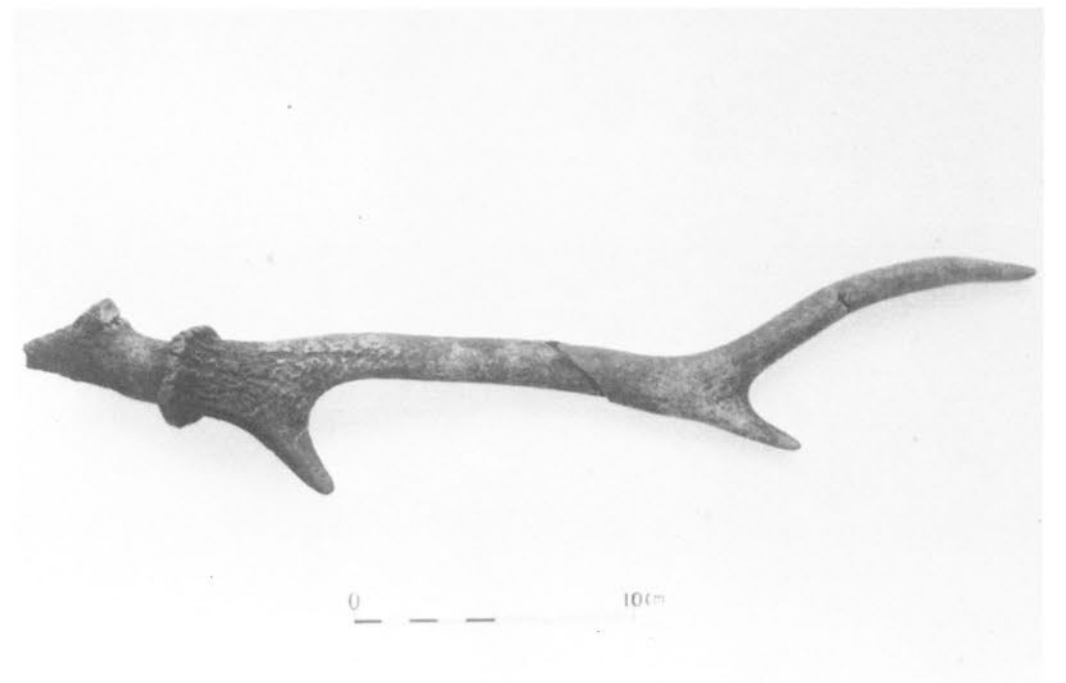


PL. 26 石鏃(上段左3個), 姫島産黒曜石剝片(上段中央), スクレイパー(中段左2個), 骨角器ヤス(上段右2列目), 円盤状土器片(下段中央), 第3号人骨頭蓋直下礫(下段左端), 第3号人骨胸部に出土の平城式第4群土器(下段右端)

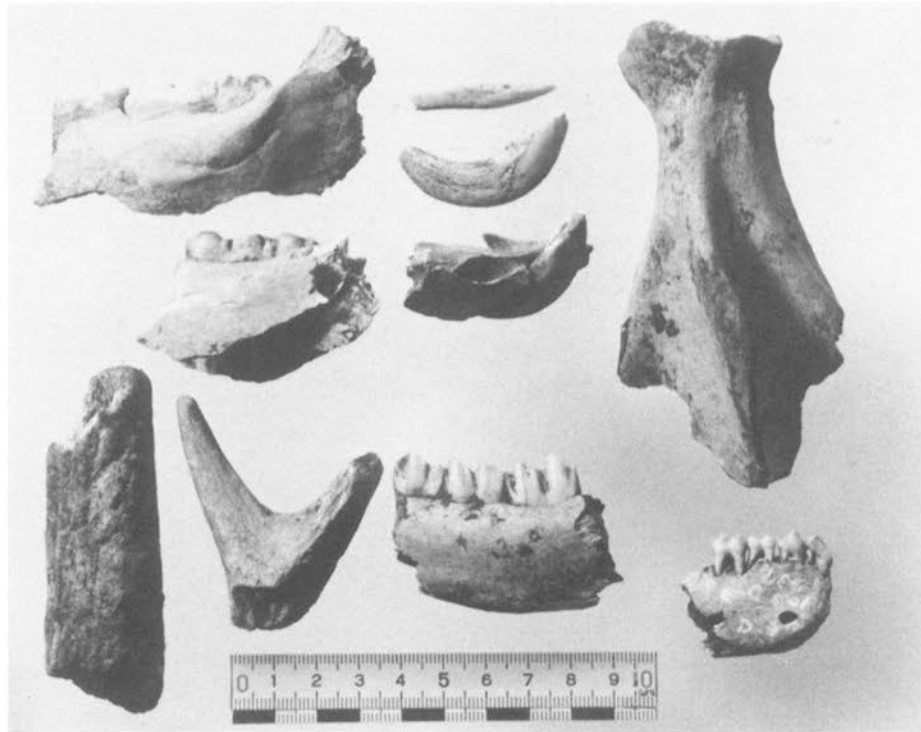


PL. 27 貝類

上列左よりハマグリ・ハイガイ・サルボウ・シオヤガイ・アサリ・カガミガイ・マガキ・ナミマカシワガイ・フジツボ・アカニシ・レイシ・マガキガイ・スガイ・ウミニナ・イボウミニナ・フトヘナタリ・カワニナ・(陸産)ホソオカチヨウジガイ

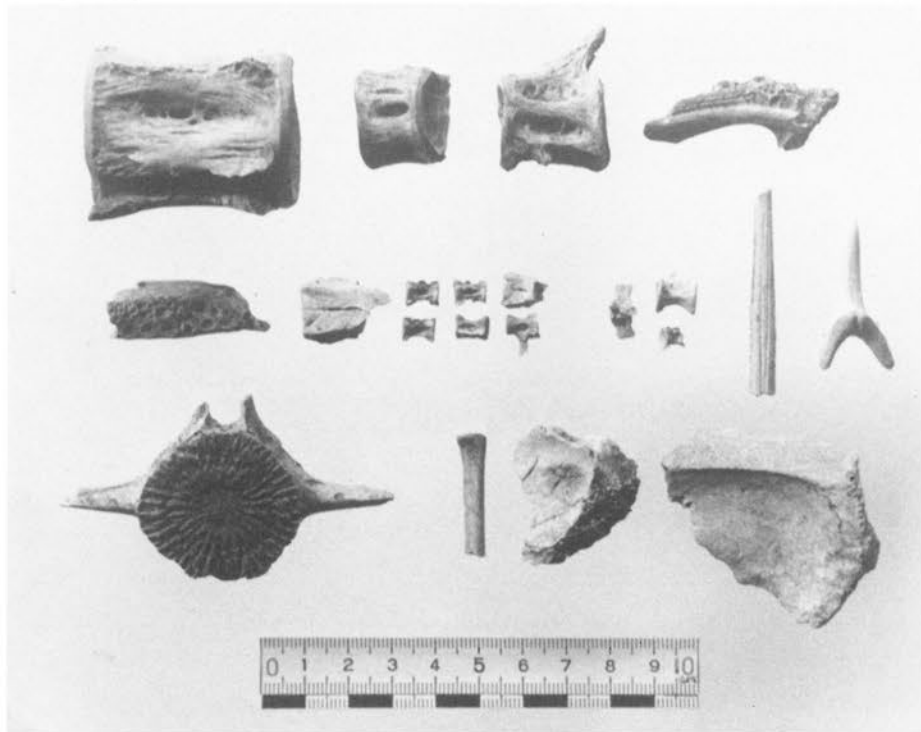


PL. 28 鹿角



PL. 29 哺乳類

上列左よりイノシシ(下顎骨・切歯・犬歯・肩甲骨) 下列左よりシカ(鹿角・鹿下顎骨)・サル(右下顎骨)



PL. 30 魚類, 海棲哺乳類, 爬虫類

上列左よりマグロ属(尾椎)・キワダ・ハタ科(腹椎)・ハタ科(上顎骨), マダイ(右前上顎骨)・サバ科(尾柄部)・サバ科・ソウダカツオ属(尾椎)・エイ目(尾棘)・シロワニサメ, 下列 海棲哺乳類……イルカ(腰椎)・爬虫類……ウミガメ(肢骨)・ウミガメ(甲羅) — 96 —



PL. 31 植物

ブナ科カシ類(D-4区貯蔵穴内出土炭化種子)



## 平城貝塚

埋蔵文化財第Ⅳ次発掘調査報告書

昭和57年8月31日発行

編集 御荘町教育委員会

発行 御荘町教育委員会  
愛媛県南宇和郡御荘町平城3063番地  
TEL(御荘)2-1111

印刷 中央印刷株式会社  
高知県須崎市浜町2丁目8番3号

